

§1 一般事項

- 本配筋標準図(2021年版)は、(一社)日本建設業連合会と(一社)日本建築構造技術者協会が協働で作成した鉄筋コンクリート造の配筋標準図である。
- 本配筋標準図は、
  - 「公共建築工事標準仕様書(建築工事編)(平成31年版)」(国土交通省大臣官房官庁営繕部監修)
  - 「鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説(2018版)」(日本建築学会)
  - 「建築工事標準仕様書・同解説JASS5鉄筋コンクリート工事(2018年版)」(日本建築学会)
  - 「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説(2021版)」(日本建築学会)
 を参考に作成している。
- 本配筋標準図は表1-1に示すコンクリートおよび鉄筋を使用する鉄筋工事に適用する。高強度せん断補強筋を使用する場合は、構造図(伏図、軸組図、部材リスト、詳細図等の図面を示す)による。
- 構造図に記載された事項は、本配筋標準図に優先して適用するものとする。
- 本配筋標準図において、「監理者に確認」、「監理者に承認」と記載された内容は、監理者が設計者と協議し、設計者が承認した結果を示す。
- 図表中の寸法の値は最小値を示し、当該寸法以上を確保することを原則とする。(～程度、～以下、@、Pと表記しているものを除く)
- 本配筋標準図に☒印を記した項目は、適用しない。
- 杭に関する事項は、構造図による。

表1-1 適用範囲

1. コンクリート	普通 $F_c=18N/mm^2$ 以上 $60N/mm^2$ 以下 軽量 $F_c=18N/mm^2$ 以上 $36N/mm^2$ 以下		
	SD390の鉄筋を使用する場合は $F_c=21N/mm^2$ 以上 SD490の鉄筋を使用する場合は $F_c=24N/mm^2$ 以上 SD490の鉄筋を使用する部位に軽量コンクリートを用いない。		
2. 鉄筋	規格番号	規格名称	種類の記号
	JIS G 3112	鉄筋コンクリート用棒鋼	SD295 SD345, SD390 SD490
3. 溶接金網 および鉄筋格子	異形鉄筋はD41以下とする。		
	溶接金網および鉄筋格子は、JIS G 3551 (溶接金網および鉄筋格子)に適合するものを使用する。		

§2 鉄筋加工共通事項

2-1 折曲げ形状・寸法

- 鉄筋の折曲げ加工は常温加工とする。
- 折曲げ内法直径を表2-1の数値よりも小さくする場合は、事前に鉄筋の折曲げ試験を実施するかメーカー発行の性能試験証明書を確認した上で、監理者の承認を得ること。
- SD490の鉄筋を90°を超える曲げ角度で折曲げ加工する場合は、事前に鉄筋の曲げ試験を行い支障ないことを確認した上で、監理者の承認を得ること。

表2-1 折曲げ形状・寸法

折曲げ形状	折曲げ角度	鉄筋の種類	鉄筋の径による区分	鉄筋の折曲げ内法直径(D)
180° フック	180° 135° 90°	SD295 SD345	D16以下	3d以上
			D19~D41	4d以上
135° フック	90°	SD390	D41以下	5d以上
			D25以下	5d以上
90° フック	90°	SD490	D29~D41	6d以上

▽は折曲げ開始点を示す。  
この開始点位置は、以下の図面において共通とする。  
(注) 1.片持ちスラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90°フックまたは135°フックを用いる場合には、余長は4d以上とする。  
2.90°未満の折曲げ内法直径は構造図による。構造図に記載のない場合は、表2-1の90°フックと同じとする。

2-2 鉄筋のフック

- 次の部分に使用する異形鉄筋の末端部にはフックを付ける。(図中◎印)
- (1)柱の四隅または梁の出隅および下端筋の両側にある主筋を重ね継手とする場合(フックの形状は180°フックとする)

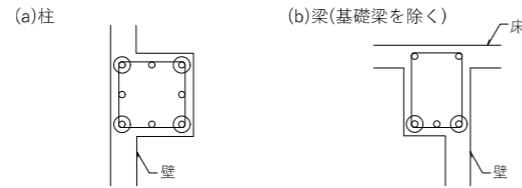


図2-2-1 フックが必要な重ね継手

- 柱の四隅にある主筋で最上階(中間階で上に柱のない場合を含む)の柱頭部(フックの形状は180°フックとする)

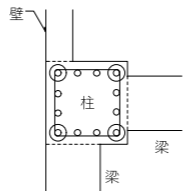


図2-2-2 最上階(上に柱がない場合を含む)の柱頭部でフックが必要な主筋

- あばら筋、帯筋(フック形状は2-3による)および幅止め筋(フック形状は図2-2-3による)

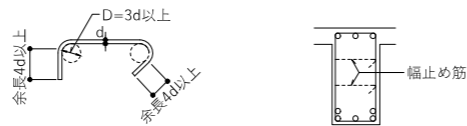
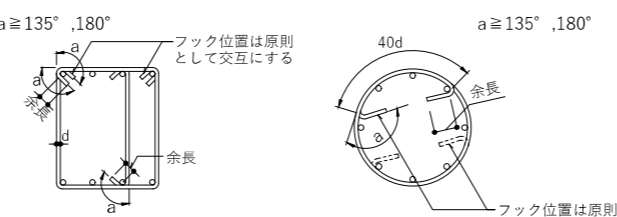


図2-2-3 幅止め筋の形状

- 煙突の鉄筋(フックの形状は180°フックとする)
- 杭基礎のベース筋  
単杭の場合は、監理者と協議すること。

2-3 あばら筋および帯筋形状・寸法

- あばら筋および帯筋のスパイラル筋形状、寸法は、図3-3-4による。



・135°フックの余長は6d以上、180°フックの余長は4d以上とする。  
図2-3-1 あばら筋・帯筋の形状(末端部がフックの場合)

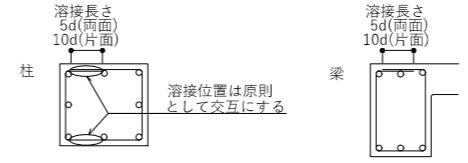
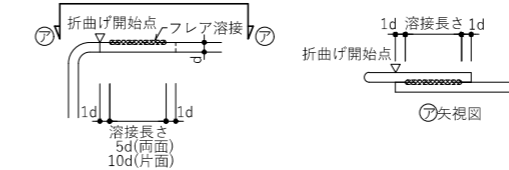


図2-3-2 あばら筋・帯筋の形状(末端部が溶接の場合)



- ・フレア溶接を採用する場合は監理者と協議すること。
- ・ヒード形状は表3-1-3による。
- ・フレア溶接は、折曲げ開始点、鉄筋材端から1d以上離すこと。

図2-3-3 あばら筋・帯筋の溶接要領

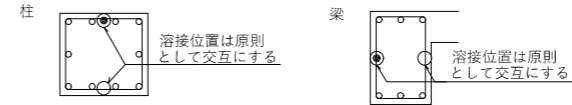
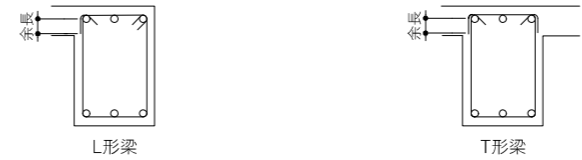
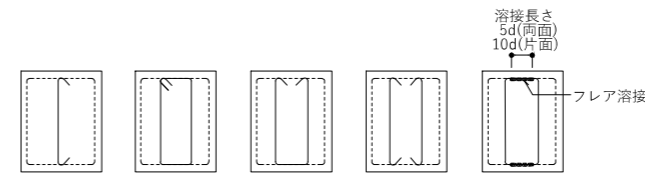


図2-3-4 あばら筋・帯筋の形状(溶接閉鎖形の場合)



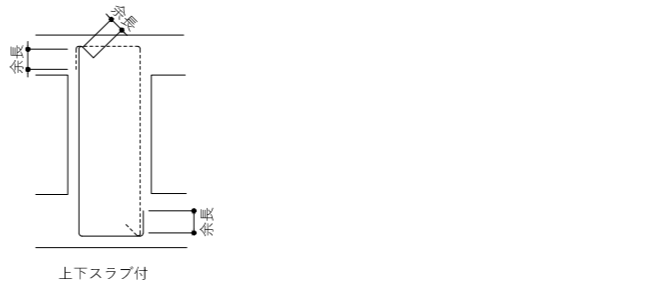
- ・スラブと同時に打ち込むT形、L形梁のキャップタイ末端部は本図によってもよい。
- ・スラブが取り付く側のキャップタイ末端部は、90°フックとしてよい。
- ・スラブ付梁のキャップタイに90°フックを使用する場合、フックの余長は8d以上とする。

図2-3-5 スラブ付梁のあばら筋(末端部がフックの場合)



・鉄筋末端部フックは、図2-3-1による。

図2-3-6 副あばら筋・副帯筋の形状



- ・原則、梁の上下にスラブが取り付く場合、かつ、梁せい1.5m以上の場合、使用可能とする。原則を守れない場合は、監理者と協議すること。

図2-3-7 梁せいの大きな基礎梁など、あばら筋を分割する場合のあばら筋・副あばら筋の形状

※L1h(フック付重ね継手)は、表3-1-2による。

- ・原則、梁の上下にスラブが取り付く場合、かつ、梁せい1.5m以上の場合、使用可能とする。原則を守れない場合は、監理者と協議すること。

図2-3-7 梁せいの大きな基礎梁など、あばら筋を分割する場合のあばら筋・副あばら筋の形状

設計者	一級建築士登録321729号	小澤 透
協賛設計コンサルタント	一級建築士登録293856号	福田 豊和
協長大	一級建築士登録361861号	正田 崇貴
構造設計一級建築士登録 10823号		

2-4 主筋のあき・2段筋の間隔

- 主筋相互のあきaは粗骨材最大寸法の1.25倍以上、隣り合う鉄筋呼び径の平均値の1.5倍以上とする。
- 粗骨材の最大寸法を25mmとして算出した数値を表2-4に示す。
- 粗骨材の最大寸法が25mm以外の場合のあき寸法、2段筋の間隔の最小値は、監理者に確認すること。
- 2段筋の間隔P2は構造図による。構造図に記載がない場合は表2-4による。
- 2段筋の間隔P2の最大値については、監理者に確認すること。

表2-4 主筋のあきaの最小値および2段筋の間隔P2 (単位mm)

呼び名(d)	最大径	主筋のあきaの最小値	2段筋の間隔P2の最小値
D10	11	32	43
D13	15	32	47
D16	19	32	51
D19	22	32	54
D22	26	33	59
D25	29	38	67
D29	33	44	77
D32	37	48	85
D35	40	53	93
D38	43	57	100
D41	47	62	109

(注) 1.鉄筋の最大径は銘柄ごとに異なるため、使用する鉄筋に合わせて適宜判断すること。

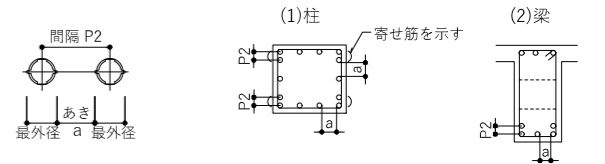


図2-4 柱梁主筋のあきと間隔

2-5 2段筋位置保持金物の形状および配置

- 2段筋がある場合は、原則として2段筋位置保持金物を図2-5-1にない取り付け。

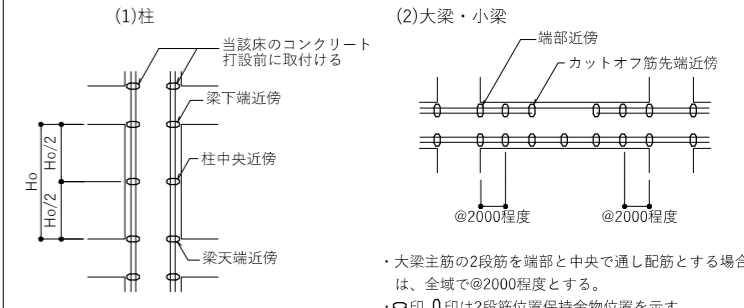


図2-5-1 2段筋位置保持金物の配置例

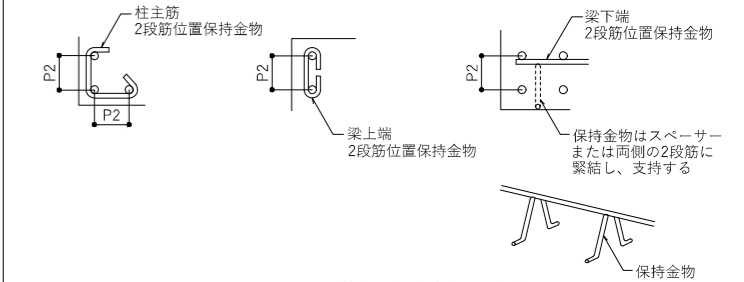


図2-5-2 2段筋位置保持金物の形状例

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)					No.
図名 配筋標準図 (1)					S- 23
設計	光市建設部建築住宅課				縮尺(A1) - 縮尺(A3) -
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

§3 継手および定着

3-1 継手

- 対象とする継手は重ね継手、ガス圧接継手、フレア溶接継手とし、その他(機械式継手、突合せアーク溶接継手など)の仕様は構造図による。
- 柱梁主筋の異形鉄筋重ね継手長さは構造図による。
- 耐力壁主筋に直線重ね継手を使用する場合、継手長さは、表3-1-1による。(表3-1-1の記載例：■採用、□不採用)

表3-1-1 直線重ね継手長さの指示

指示欄	構造計算方法	直線重ね継手長さ
□	構造計算を保有水平耐力計算等で実施したため、建築基準法施行令第73条の適用を除外する。	表3-1-2による。
□	上記以外	表3-1-2かつ40d以上(軽量コンクリートを使用する場合は、50d)とする。

- D35以上の異形鉄筋には、原則として重ね継手を用いない。
- 径の異なる鉄筋の重ね継手長さは、細い方の鉄筋の径(d)により算出する。
- あき重ね継手は、原則としてスラブ筋、基礎スラブ筋、壁筋に適用する。
- その場合、あき重ね継手の継手長さは表3-1-2のL1を確保し、あき寸法は、0.2L1かつ150mm以下とする。(図3-1-3)
- 梁主筋の重ね継手は水平重ね継手を原則とし、上下重ね継手とする場合は監理者と協議すること。

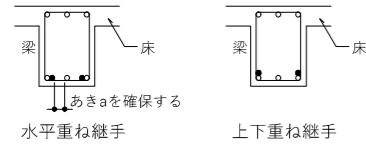


図3-1-1 梁主筋の重ね継手

- ガス圧接およびフレア溶接の形状は、表3-1-3による。
- 径の異なる鉄筋のガス圧接は、細い方の鉄筋の径(d)により算出する。径の差は原則として、7mm以下とする。
- 鉄筋のフレア溶接は、原則として鉄筋の種類はSD345まで、鉄筋の径はD16までとする。
- フレア溶接は、被覆アーク溶接またはガスシールドアーク溶接により、使用する溶接材料は、表3-1-4による。
- 隣り合う継手の位置は、図3-1-2による。ただし、スラブ筋(基礎スラブ筋を含む)でD16以下の場合および壁筋の場合は除く。
- 杭に用いる鉄筋の重ね継手長さは構造図による。

表3-1-2 鉄筋の重ね継手長さ L1,L1h

重ね継手長さ L1:フックなし L1h:フック付	鉄筋の種類	Fc(N/mm <sup>2</sup> )					
		18	21	24	30	39	48
直線重ね継手の長さ L1	SD295	45d	40d	35d	35d	30d	30d
	SD345	50d	45d	40d	35d	35d	30d
	SD390	50d	45d	40d	40d	35d	
	SD490		55d	50d	45d	40d	
フック付重ね継手の長さ L1h 180°フックの場合 ※	SD295	35d	30d	25d	25d	20d	20d
	SD345	35d	30d	30d	25d	25d	20d
	SD390	35d	35d	30d	30d	25d	
	SD490 <90°フックのみ>		40d	35d	35d	30d	

(注) 1. 軽量コンクリートの場合は、上表の数値に5dを加えた値とする。  
2. 継手位置は、各標準図に示す継手の好ましい位置に設けること。

表3-1-3 ガス圧接・フレア溶接の形状

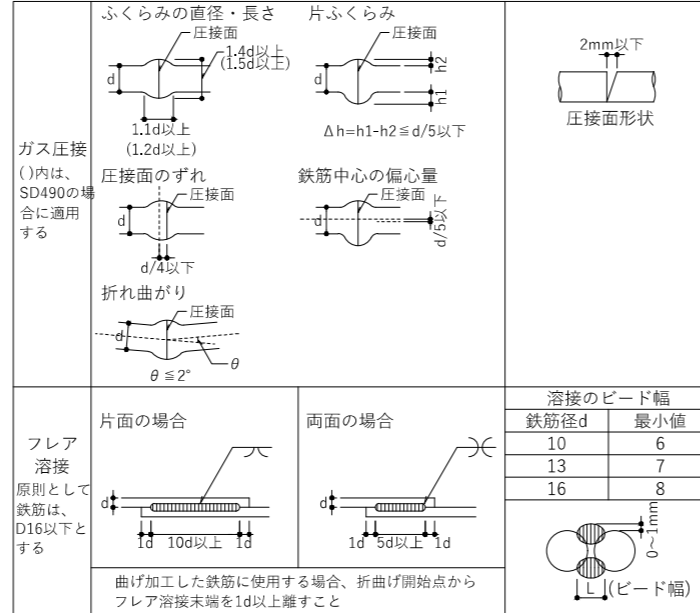
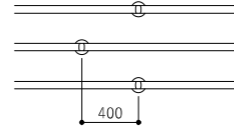


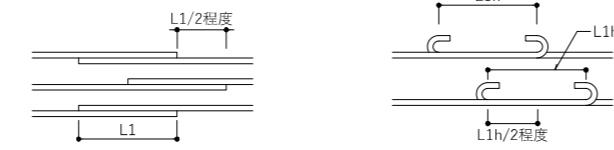
表3-1-4 フレア溶接に用いる鉄筋と溶接材料の組み合わせ

溶接される鉄筋の種類	被覆アーク溶接棒の種類 JIS Z 3211	ソリッドワイヤの種類 JIS Z 3312
SD295	E4316,E4915,E4916等の低水素系溶接棒	YGW11 YGW12 YGW13 YGW15
SD345	E4915,E4916等の低水素系溶接棒	YGW16 YGW18 YGW19

圧接の場合



主筋のあきが確保できる場合の重ね継手の場合



主筋のあきの確保が困難な場合の重ね継手の場合

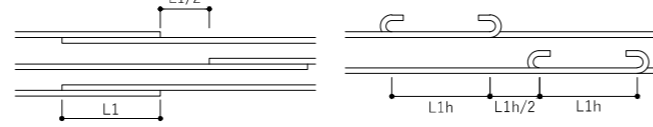
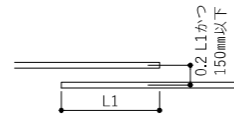


図3-1-2 隣り合う継手位置



あき重ね継手を使用する場合は、監理者に確認の上使用する。

図3-1-3 スラブ筋・基礎スラブ筋・壁筋のあき重ね継手

3-2 定着

- 異形鉄筋の定着長さは、表3-2-1の鉄筋の定着長さによる。ただし、小梁、スラブの下端筋の定着長さは、表3-2-2による。
- 梁主筋の柱への定着は、原則として折曲げ定着とする。
- 梁主筋の柱内定着において、定着の投影長さは原則柱せいの3/4倍以上とする。
- 柱梁仕口内に縦に折り曲げて定着する鉄筋の定着長さが、表3-2-1のフック付定着の長さL2hを確保できない場合は、全長を表3-2-1に示す直線定着の長さとし、余長を8d以上、仕口面から鉄筋外面までの投影定着長さを、表3-2-3に示す長さLa以上とする。
- 大梁内に縦に折り曲げて定着する鉄筋の定着長さが、表3-2-1のフック付定着の長さL2hを確保できない小梁及びスラブの場合は、全長を表3-2-1に示す直線定着の長さとし、余長を8d以上、仕口面から鉄筋外面までの投影長さを、表3-2-3に示す長さLb(かつ、原則として、定着される梁幅の1/2倍)以上とする。

表3-2-1 鉄筋の定着長さ L2,L2h

定着長さ L2:直線定着 L2h:フック付定着	鉄筋の種類	Fc(N/mm <sup>2</sup> )					
		18	21	24	30	39	48
直線定着長さ L2	SD295	40d	35d	30d	30d	25d	25d
	SD345	40d	35d	35d	30d	30d	25d
	SD390	40d	40d	35d	35d	30d	
	SD490		45d	40d	40d	35d	
フック付定着長さ L2h 90°フックの場合 ※	SD295	30d	25d	20d	20d	15d	15d
	SD345	30d	25d	25d	20d	20d	15d
	SD390	30d	30d	25d	25d	20d	
	SD490 <90°フックのみ>		35d	30d	30d	25d	

(注) 1. 軽量コンクリートの場合は、上表の数値に5dを加えた値とする。

表3-2-2 小梁・スラブの下端筋の定着長さ L3,L3h

定着長さ L3:直線定着 L3h:フック付定着	鉄筋の種類	Fc(N/mm <sup>2</sup> )	
		18~60	部位
直線定着長さ L3	SD295 SD345 SD390	20d <25d>	小梁 スラブ
フック付定着長さ L3h	SD295 SD345 SD390	10d	—

(注) 1. 軽量コンクリートの場合は、上表の数値に5dを加えた値とする。  
2. 「-」は適用範囲外を示す。  
3. < > は片持ち部材の場合を示す。

表3-2-3 折曲げ定着長さ La,Lb

折曲げ定着長さ	鉄筋の種類	Fc(N/mm <sup>2</sup> )					
		18	21	24	30	39	48
梁主筋の柱内折曲げ定着の投影長さ La	SD295	20d	15d	15d	15d	15d	15d
	SD345	20d	20d	20d	15d	15d	15d
	SD390	20d	20d	20d	15d	15d	
	SD490		25d	25d	20d	20d	
小梁及びスラブの上端筋の 梁内折曲げ定着の投影長さ Lb	SD295	15d	15d	15d	15d	15d	15d
	SD345	20d	20d	15d	15d	15d	15d
	SD390	20d	20d	15d	15d	15d	
	SD490						

(注) 1.La: 梁主筋の柱内折曲げ定着の投影長さ(基礎梁、片持ち梁及び片持ちスラブの上端筋を含む)  
2.Lb: 小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の投影長さ(片持ち小梁及び片持ちスラブの上端筋を除く)  
3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5dを加えたものとする。

3-3 その他の継手および定着

- 溶接金網の重ね継手は、図3-3-1による。構造図に記載のない場合は、応力伝達とする。溶接金網の合わせ面は、図3-3-2タイプA、タイプBいずれとしてもよい。
- 溶接金網の定着は、図3-3-3による。
- 帯筋にスパイラル筋を用いる場合の定着、継手要領は、図3-3-4による。
- 鉄筋格子については、3-1 継手、3-2 定着による。

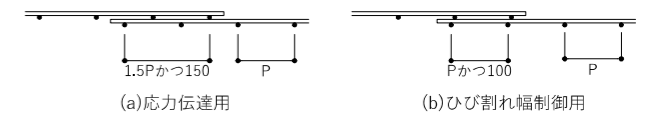


図3-3-1 溶接金網の重ね継手

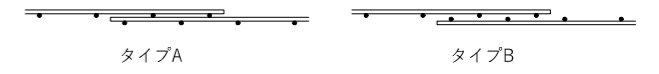


図3-3-2 溶接金網の重ね継手の合わせ面

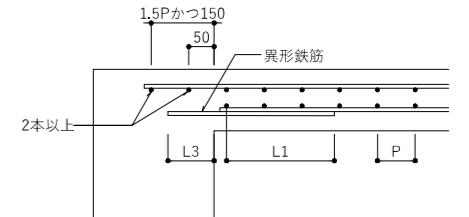
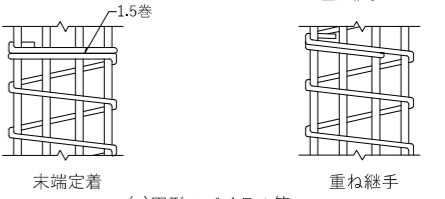
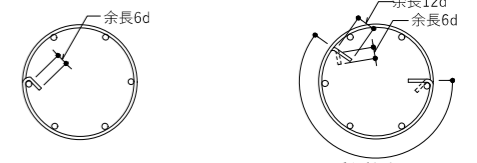


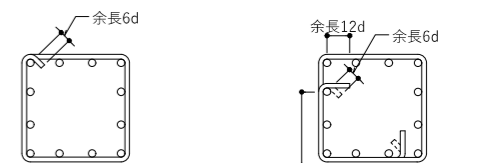
図3-3-3 溶接金網の定着

135°折曲げ 余長6d  
90°折曲げ余長12d  
または135°折曲げ余長6d



(a)円形スパイラル筋

135°折曲げ 余長6d  
90°折曲げ余長12d  
または135°折曲げ余長6d



(b)角形スパイラル筋

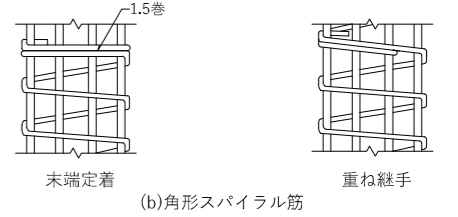


図3-3-4 スパイラル筋の末端定着・重ね継手要領

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)					No. S- 24
図名	配筋標準図 (2)				
設計	光市建設部建築住宅課				縮尺(A1) - 縮尺(A3) -
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

設計者	桐興設計コンサルタント	一級建築士登録321729号	小澤 透
	桐興設計コンサルタント	一級建築士登録293856号	福田 豊和
桐長大		一級建築士登録361861号	正田 崇貴
	構造設計一級建築士登録 10823号		

§4 かぶり厚さ

4-1 鉄筋のかぶり厚さ

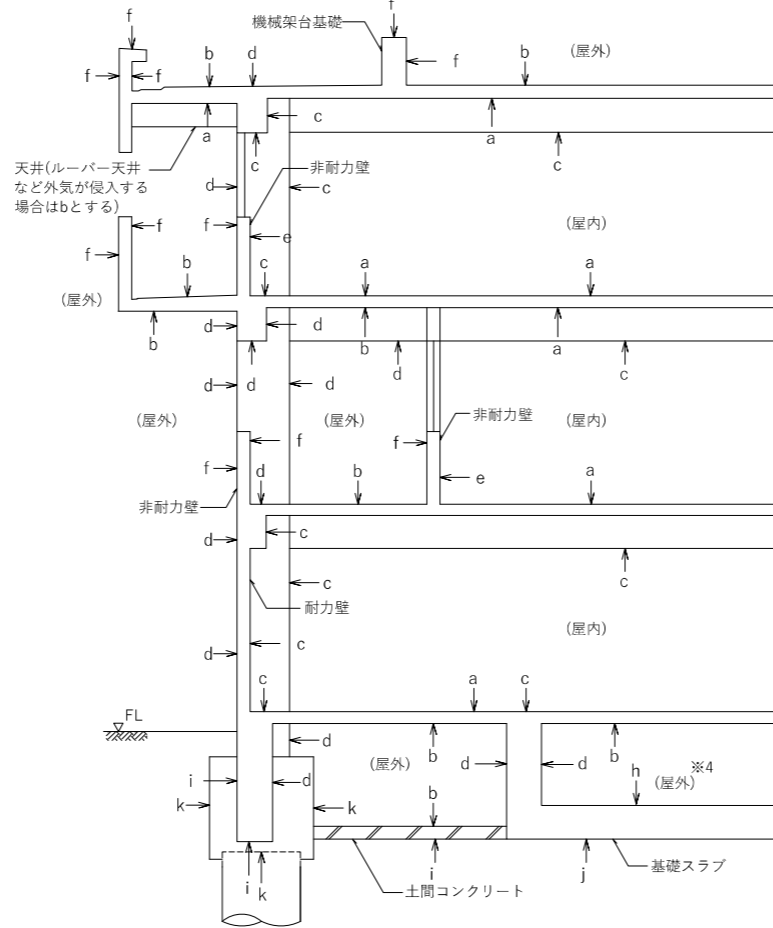
- 鉄筋のかぶり厚さは表4-1による。
- 柱、梁かぶり厚さは表4-1を満足し、かつ主筋に対する最小かぶり厚さは、主筋径の1.5倍以上とする。D29以上の鉄筋を使用する場合は、最小かぶり厚さが表4-1より大きくなる部位があるため、注意すること。
- 配筋は構造体寸法(打増しを除いた寸法)から所定の設計かぶり厚さを確保できる位置にて行う。
- 耐久性上有効な仕上げがある場合、表4-1の※1の値を10mm減じてよい。  
耐久性上有効な仕上げの例  
・タイル張り  
・モルタル塗り(10mm以上)  
・打増し(10mm以上)
- ひび割れ誘発目地、打継ぎ目地、化粧目地等がある場合は、目地からのかぶり厚さを確保する。
- 柱、梁で打継ぎ目地を設ける場合は、構造体寸法に目地深さを打増しとする。この打増しは上記4.により、耐久性上有効な仕上げと考えることができる。
- 捨てコンクリートは、かぶり厚さに含まない。

表4-1 鉄筋のかぶり厚さ (単位mm)

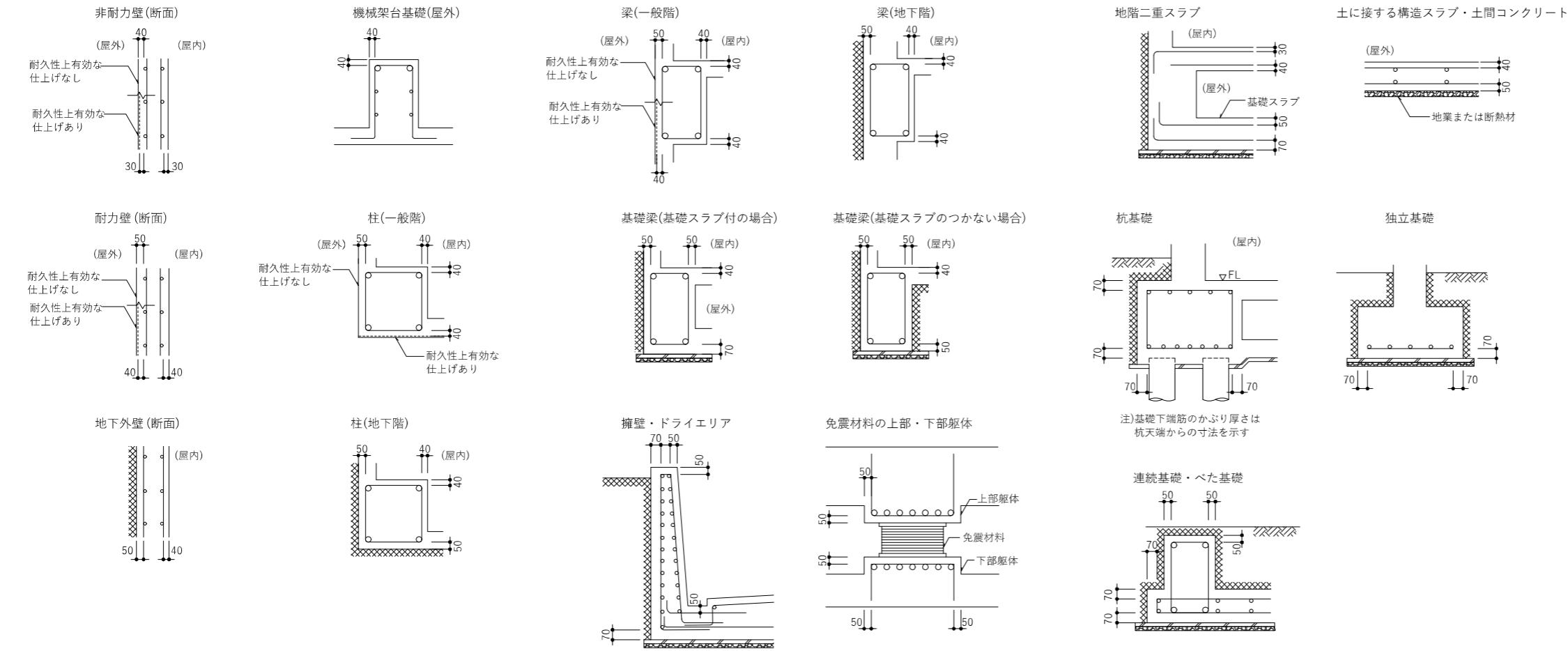
部位	設計※2 かぶり厚さ	最小※3 かぶり厚さ	分類記号		
				※1	※1
土に接しない部分	スラブ	屋内	20	a	
		屋外	30 ※1	30 ※1	b
	柱・梁	屋内	40	30	c
		屋外	50 ※1	40 ※1	d
	耐力壁	屋内	30	20	e
		屋外	40 ※1	30 ※1	f
土に接する部分	煙突内面	60	50	g	
	擁壁・基礎スラブ	50	40	h	
	柱・梁・壁・スラブ 連続基礎の立上り部分	50	40	i	
	基礎スラブ・擁壁	70	60	j	
基礎	70	60	k		

※2 設計かぶり厚さ  
施工誤差の割増10mmを標準として見込むことによって、打設後最小かぶり厚さを下回る危険性を少なくするように、設計時点で配慮したかぶり厚さを示す。

※3 最小かぶり厚さ  
建築基準法施行令に規定されたかぶり厚さを基に、屋外側については耐久性の観点から10mm増したかぶり厚さを示す。



※4: ピット内を屋内とする場合は監理者と協議のこと。



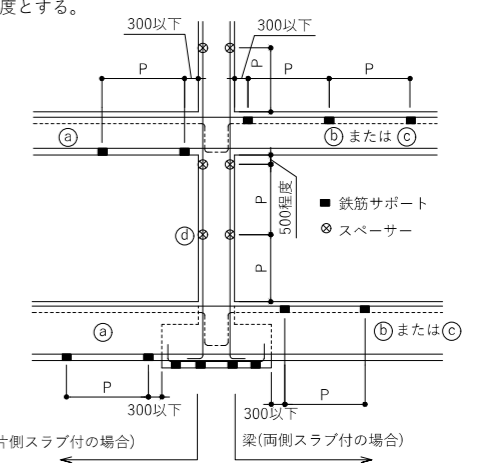
・図中の 及び は、土に接する部分を示す。  
図4-1 部位別設計かぶり厚さ

4-2 鉄筋サポート・スぺーサー・結束線

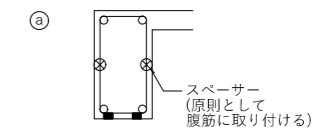
- 鉄筋サポート、スぺーサーのサイズは設計かぶり厚さを満足するものを使用する。
- 鉄筋サポート、スぺーサーの種類は設計基準強度以上のコンクリート製、モルタル製または鋼製を使用する。柱、梁、基礎、基礎梁、壁、地下外壁の側面のスぺーサーはプラスチック製でもよい。
- 鉄筋サポート、スぺーサーの数量、配置は図4-2-1、図4-2-2、図4-2-3、図4-2-4による。
- スぺーサー(ドーナツ形)は縦使いを原則とする。梁の側面の場合、スぺーサーを設置する腹筋と近傍のあばら筋を動かぬよう緊結させる。
- 断熱材打込み時の鉄筋サポートは断熱材用の製品(プレート付き)を使用するか、または鉄筋サポート下に樹脂パットを設置し、断熱材にめりこまないようにする。
- 鋼製鉄筋サポートは在来型枠との接触面に防錆処理を施した製品を使用する。
- 結束線は内側に折り曲げることを原則とする。

柱・梁

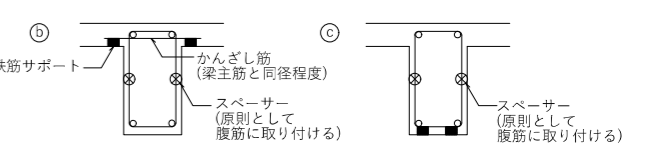
Pは1500程度とする。



(a) 梁(片側スラブ付の場合)



(b) 梁(両側スラブ付の場合) (b)または(c)いずれとしてもよい。



(c) 柱

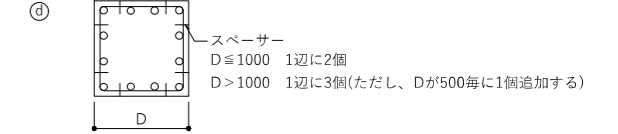


図4-2-1 柱・梁の鉄筋サポート・スぺーサーの取付け要領

壁

Pは縦、横共1500程度とする。

壁前後のスぺーサー位置は、縦方向、横方向のいずれかの間隔を200程度とすればよい。

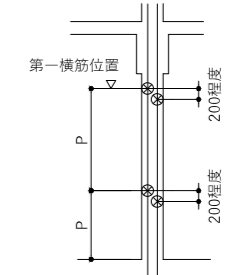


図4-2-2 壁のスぺーサーの取付け要領

設計者  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録361861号 正田 崇貴  
 構造設計一級建築士登録 10823号

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)					No. S-25
図名	配筋標準図 (3)				
設計	光市建設部建築住宅課				縮尺(A1) - 縮尺(A3) -
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

基礎

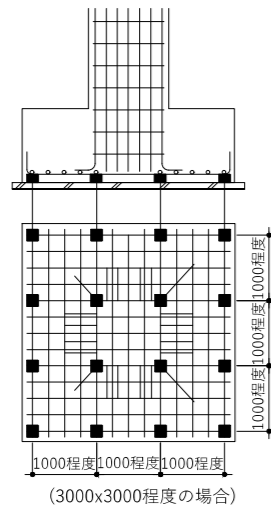


図4-2-3 基礎の鉄筋サポートの取付け要領

スラブ

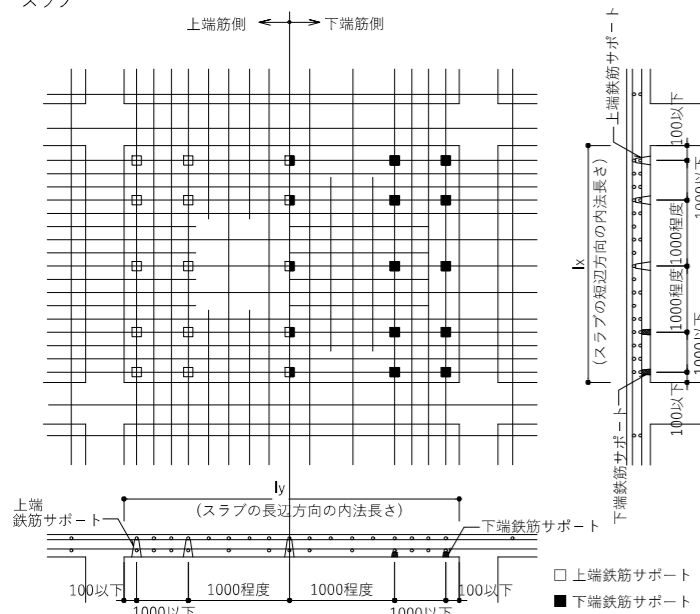


図4-2-4 スラブの鉄筋サポートの取付け要領

§5 基礎  
5-1 独立基礎

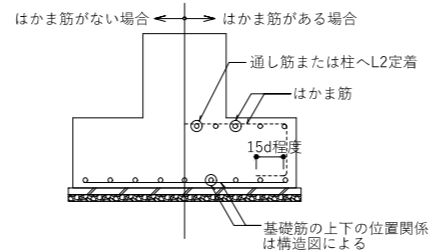


図5-1 独立基礎

5-2 連続基礎

- 1.連続基礎の側柱交差部は、外周部の基礎主筋を連続して配置する。
- 2.中柱交差部における基礎主筋を連続する方向は構造図による。
- 3.隅柱交差部は、両方向の基礎主筋を連続して配置する。

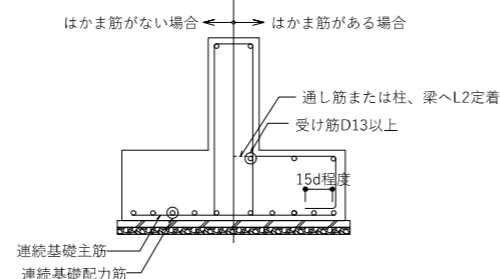


図5-2-1 連続基礎

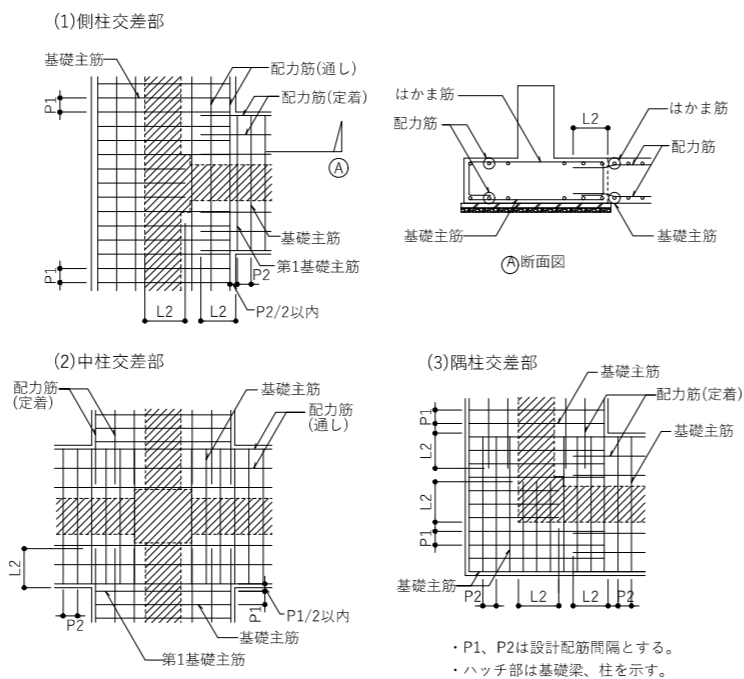


図5-2-2 連続基礎(交差部)

5-3 杭基礎

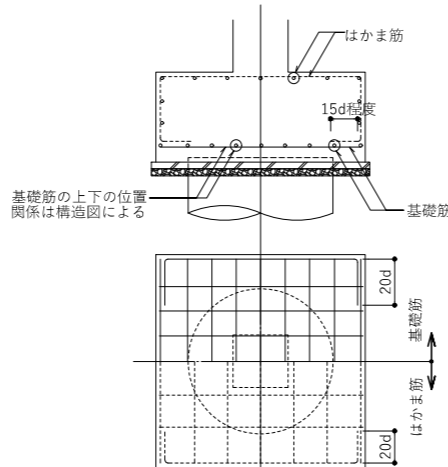


図5-3-1 1本杭の場合

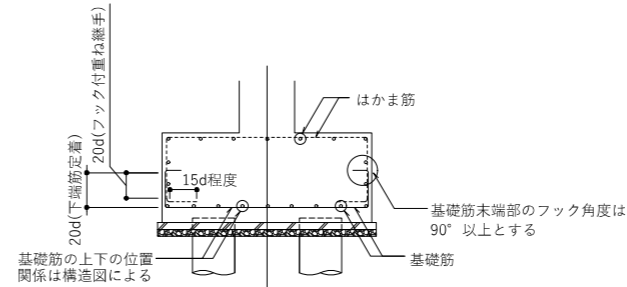
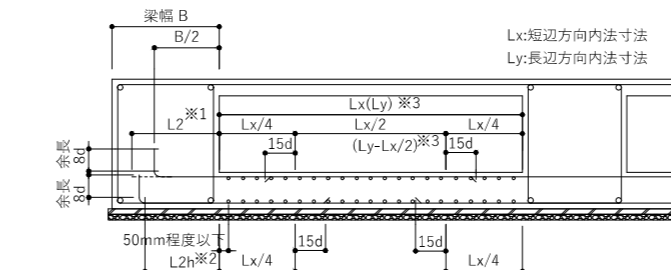


図5-3-2 2本杭以上の場合

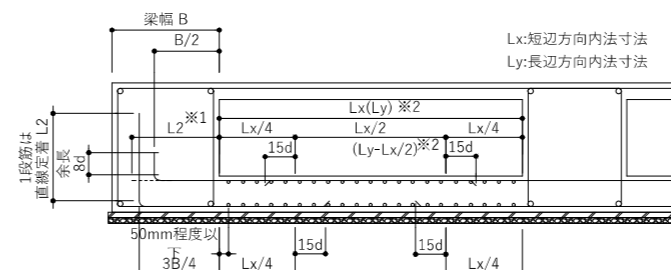
5-4 基礎スラブの定着・カットオフ筋長さおよび継手位置

- 1.採用するタイプは、基礎に浮き上がりが生じない場合はA1、浮き上がりが生じる場合はA2とし、配置は構造図による。
- 2.基礎スラブの第1鉄筋は基礎梁のコンクリート面より50mm程度の位置とする。



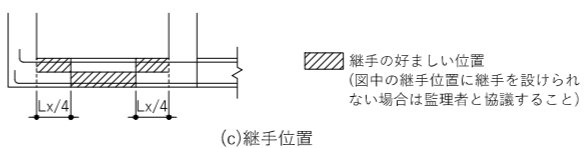
- ※1 基礎スラブ上端筋の定着は、直線定着(L2)、フック付定着(L2h)のいずれとしてもよい。ただし、投影定着長さ(水平のみみ長さ)をB/2以上確保する。
- ※2 下端筋の定着は、フック付定着(L2h)とする。ただし、投影定着長さ(水平のみみ長さ)をB/2以上確保する。
- ※3 ( )内の寸法は長辺方向の場合を示す。

(a)定着およびカットオフ筋長さ(タイプA1)



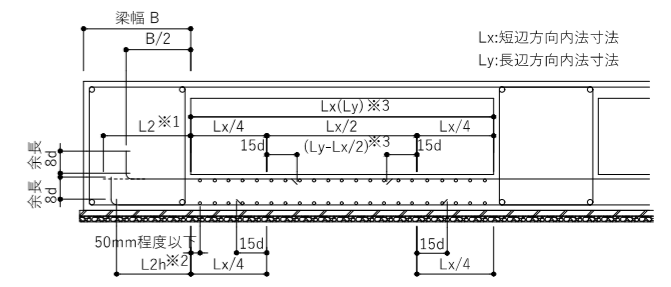
- ※1 基礎スラブ上端筋の定着は、直線定着(L2)、フック付定着(L2h)のいずれとしてもよい。ただし、投影定着長さ(水平のみみ長さ)をB/2以上確保する。
- ※2 ( )内の寸法は長辺方向の場合を示す。

(b)定着およびカットオフ筋長さ(タイプA2)  
(地震時などに基礎に浮き上がりが生じる場合)



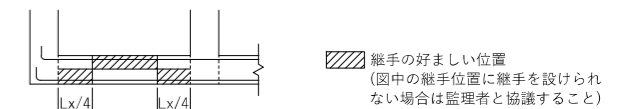
(c)継手位置

図5-4-1 べた基礎の耐圧スラブなどの場合(タイプA1・タイプA2)



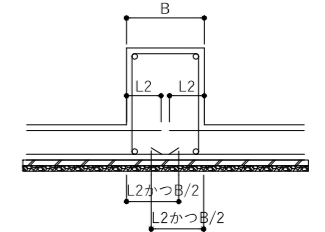
- ※1 基礎スラブ上端筋の定着は、直線定着(L2)、フック付定着(L2h)のいずれとしてもよい。ただし、投影定着長さ(水平のみみ長さ)をB/2以上確保する。
- ※2 下端筋の定着は、フック付定着(L2h)とする。ただし、投影定着長さ(水平のみみ長さ)をB/2以上確保する。
- ※3 ( )内の寸法は長辺方向の場合を示す。

(a)定着およびカットオフ筋長さ



(b)継手位置

図5-4-2 その他の基礎スラブの場合(タイプB1)



- ・基礎スラブの配筋が左右で同じ場合、通し配筋としてよい。

図5-4-3 基礎スラブが梁下で連続する場合の定着

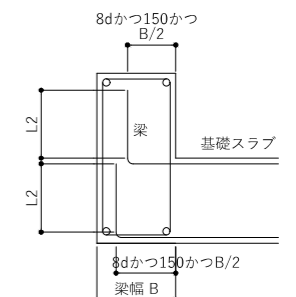


図5-4-4 幅の小さい梁への定着要領  
(L2hが確保できない場合)

設計者	榑巽設計コンサルタント	一級建築士登録321729号	小澤 透
	榑巽設計コンサルタント	一級建築士登録293856号	福田 豊和
	榑長大	一級建築士登録361861号	正田 崇貴
	構造設計一級建築士登録 10823号		

工事名 やまと学園建設工事(建築工事)					No.
図名 配筋標準図(4)					S-26
設計	光市建設部建築住宅課				縮尺(A1) -
					縮尺(A3) -
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

S6 基礎梁

6-1 基礎大梁の定着・カットオフ筋長さおよび継手位置

- 採用するタイプは、基礎に浮き上がりが生じない場合はA1、B1、C1、浮き上がりが生じる場合はB2、C2とし、本建物の基礎大梁にはタイプB1を適用する。
- 柱を介して連続する基礎梁の主筋本数が異なる場合は、通し筋以外の基礎梁主筋を柱内に定着する。または柱コンクリート面より定着長さをとって反対側の梁内に定着する。
- カットオフ筋長さは、構造図による。構造図に記載のない場合は、図6-1-1、図6-1-2、図6-1-3による。

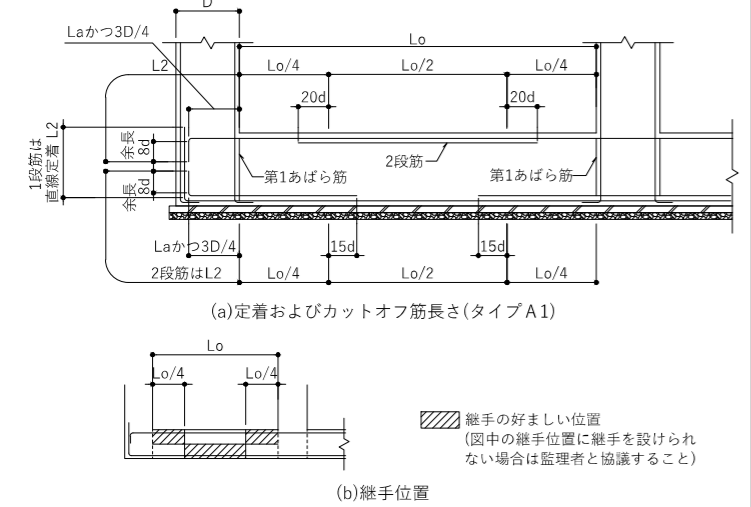


図6-1-1 べた基礎・連続基礎の場合(タイプA1)

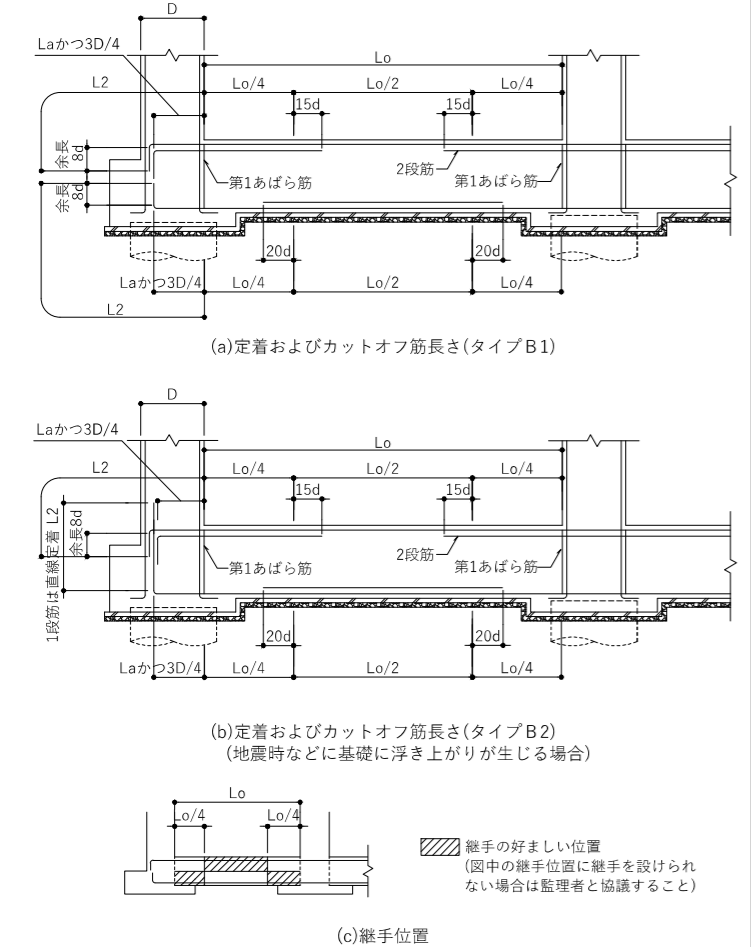


図6-1-2 杭基礎・独立基礎の場合(タイプB1・タイプB2)

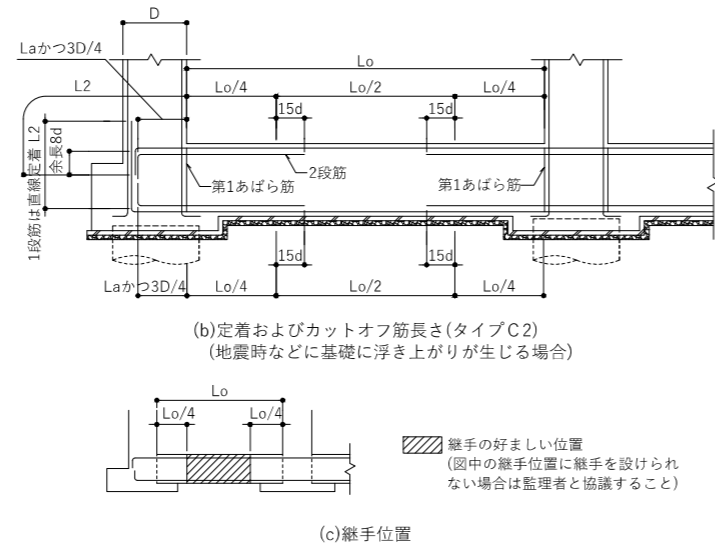
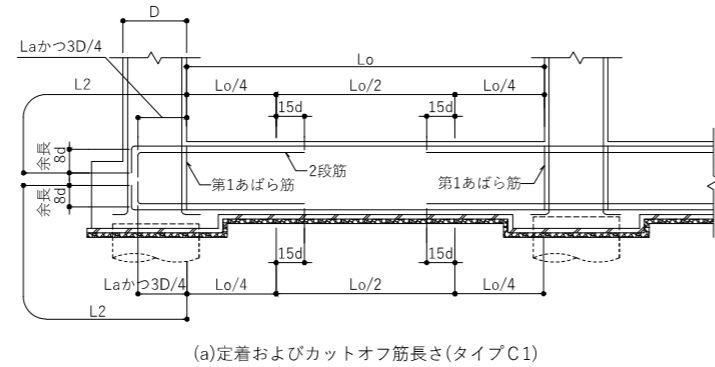


図6-1-3 杭基礎・独立基礎の場合(タイプC1・タイプC2)

6-2 基礎小梁の定着・カットオフ筋長さおよび継手位置

- 採用するタイプは、基礎小梁が連続する場合はA1、B1、連続しない場合はA2、B2とし、本建物の基礎小梁にはタイプB1、B2を適用する。

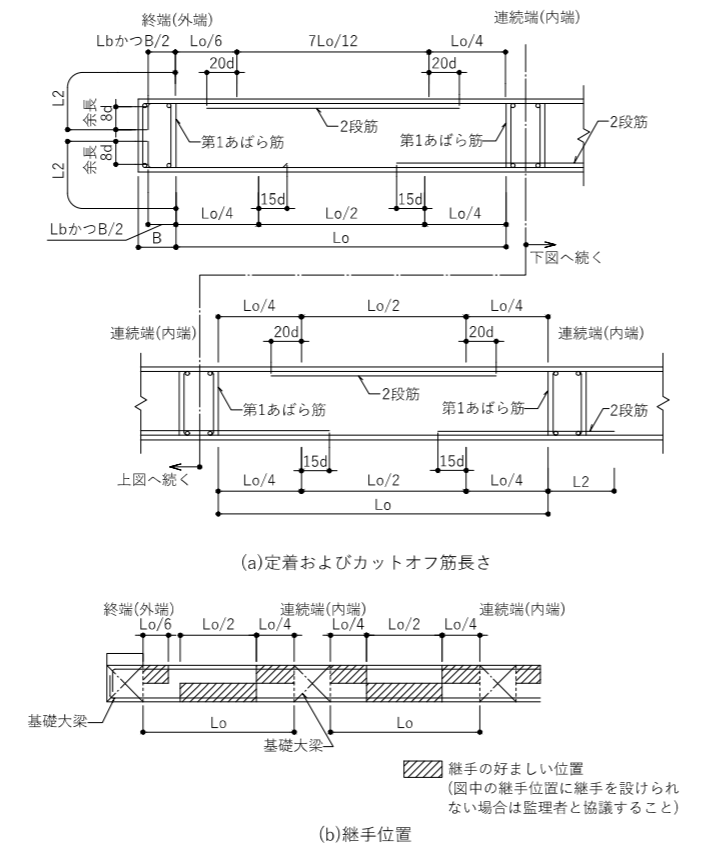


図6-2-1 基礎小梁が連続梁の場合(タイプA1)

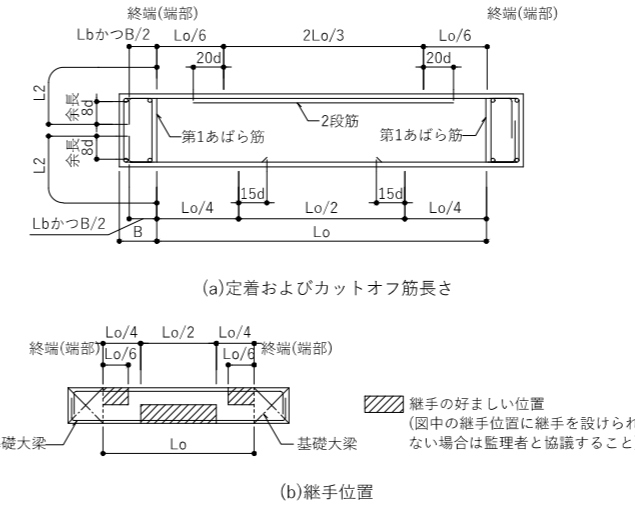


図6-2-2 基礎小梁が単独梁の場合(タイプA2)

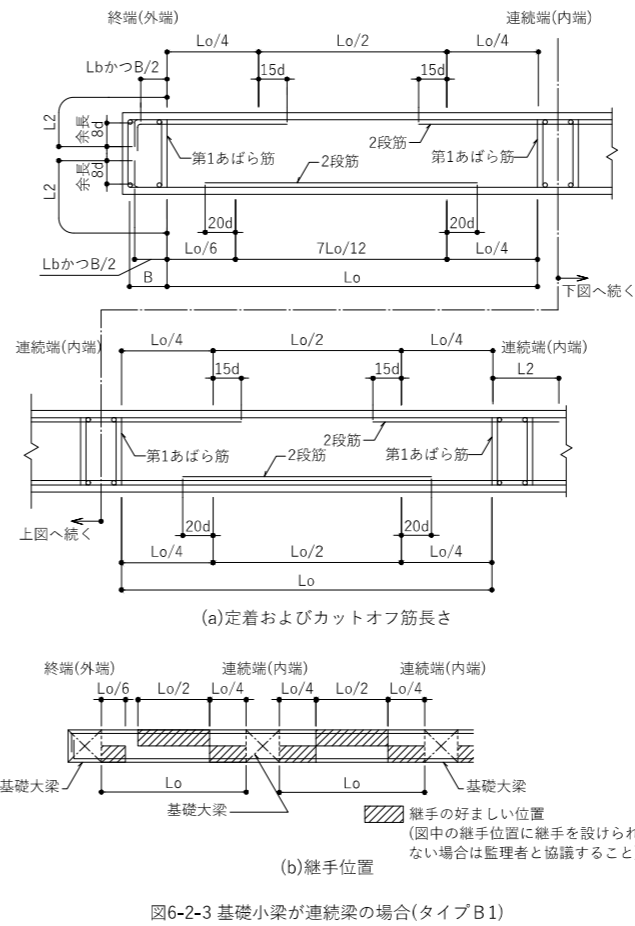


図6-2-3 基礎小梁が連続梁の場合(タイプB1)

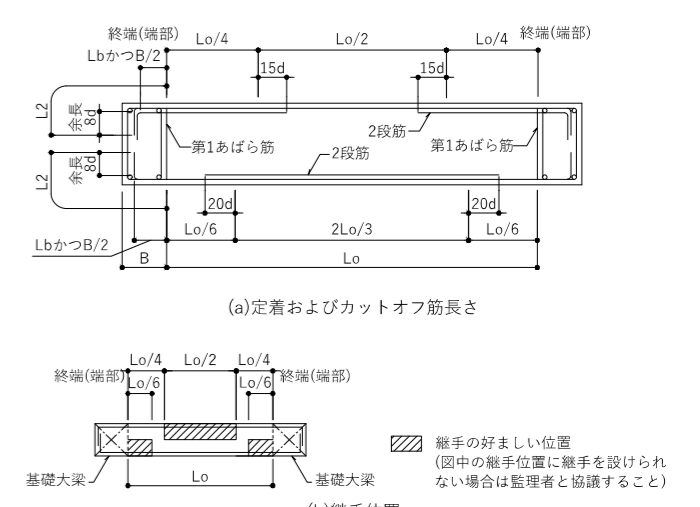
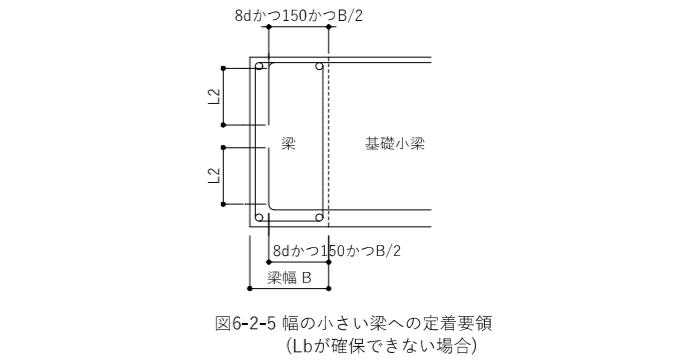
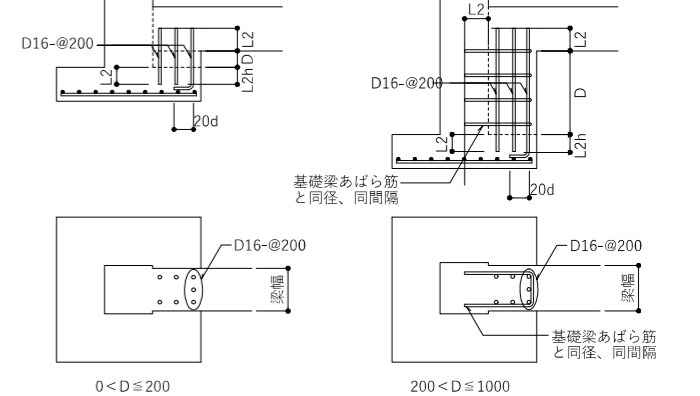


図6-2-4 基礎小梁が単独梁の場合(タイプB2)



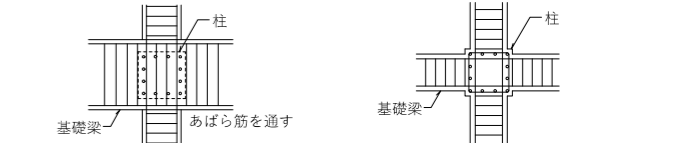
6-3 基礎梁と基礎の取合い部補強要領

- 基礎梁と基礎の取合い部補強要領は構造図による。構造図に記載のない場合は、図6-3による。
- 取合い部補強の幅は、基礎梁と同じとする。



6-4 基礎大梁と最下階柱の取合い部配筋要領

- 基礎大梁と最下階柱の取合い部配筋要領は構造図による。構造図に記載のない場合は、図6-4による。
- (1) 基礎大梁幅が柱幅より大きい柱脚の場合 (2) 基礎大梁幅が柱幅より小さい柱脚の場合



設計者	桐興設計コンサルタント	一級建築士登録321729号	小澤 透
	桐興設計コンサルタント	一級建築士登録293856号	福田 豊和
	桐長大	一級建築士登録361861号	正田 崇貴
	構造設計一級建築士登録 10823号		

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)		No.
図名 配筋標準図 (5)		S- 27
設計	光市建設部建築住宅課	縮尺(A1) - 縮尺(A3) -
部長	課長	製図
令和 8年	3月	

§7 柱

7-1 柱の定着・カットオフ筋長さおよび継手位置

- 継手はガス圧接、重ね継手を示し、それ以外の継手の仕様は構造図による。
- $H_o$ は柱の最大内法高さとする。
- 柱主筋の定着は以下による。
  - 柱頭主筋の定着：柱に取り付く最も高い梁下端から $L2$ 以上かつ最も高い梁下端から $15d$ 以上とする。
  - 柱脚主筋の定着：柱に取り付く最も低い梁下端から $L2$ 以上かつ最も低い梁下端から $15d$ 以上とする。
- カットオフ筋長さは以下による。
  - 柱頭カットオフ筋長さ：柱に取り付く最も低い梁下端から $H_o/2+15d$ 以上とする。
  - 柱脚カットオフ筋長さ：柱に取り付く最も高い梁下端から $H_o/2+15d$ 以上とする。

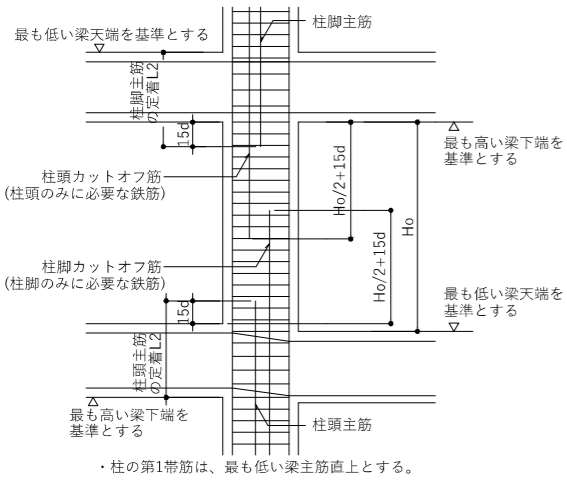


図7-1-1 柱主筋の定着およびカットオフ筋長さ

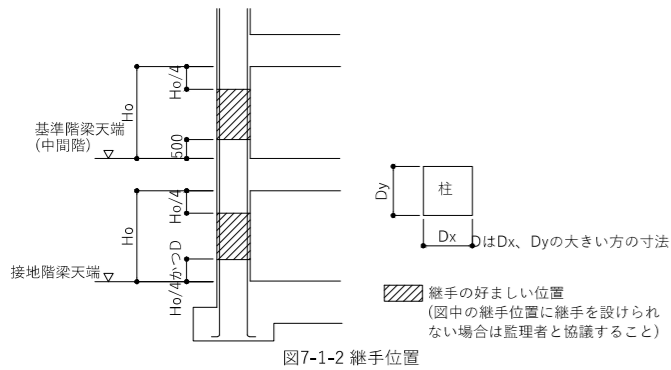


図7-1-2 継手位置

7-2 柱の仕口部(柱・梁接合部)

- 柱の仕口部の範囲は構造図による。構造図に記載のない場合は、柱に取り付く全ての梁せいが重なる範囲を仕口部とする。(図7-2-1)
- 直交梁がない場合、柱の仕口部帯筋範囲は構造図による。構造図に記載のない場合は、仕口部帯筋配筋は適用しない。(図7-2-2)
- 柱の仕口部帯筋の範囲は、図7-2-3による。
- 柱の仕口部帯筋の配筋要領は構造図による。

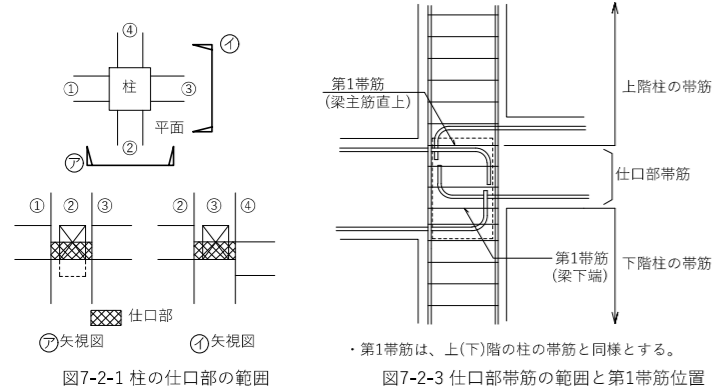


図7-2-1 柱の仕口部の範囲

図7-2-3 仕口部帯筋の範囲と第1帯筋位置

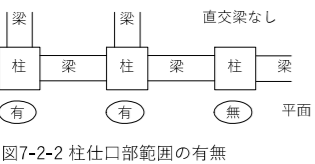


図7-2-2 柱仕口部範囲の有無

7-3 定着

- 柱部の定着は図7-3-1による。
- 柱脚部の定着は図7-3-2、図7-3-3による。

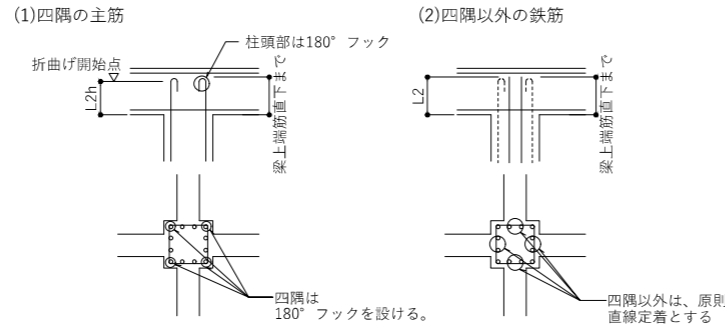


図7-3-1 最上階の柱の場合(中間階で上に柱のない場合)

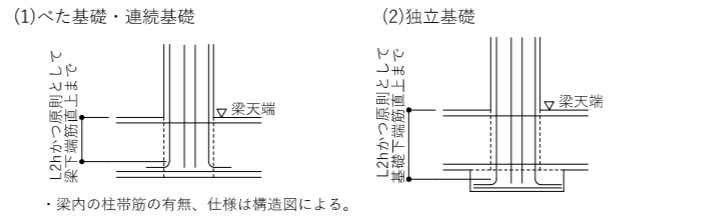


図7-3-2 最下階の柱の場合

- 柱主筋を基礎筋上に自立させる場合
- 柱主筋の支持方法を別途考慮する場合

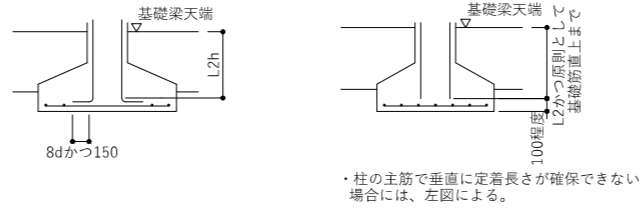


図7-3-3 最下階の柱主筋の定着と支持方法

7-4 柱主筋の折曲げ位置および帯筋

- 柱主筋の折曲げ位置は、梁の主筋間隔内とする。(図7-4-1)
- 柱主筋を折り曲げて通し筋とする場合(図7-4-1)の梁上第1帯筋は、上階柱帯筋と同径の帯筋を2組重ねる。

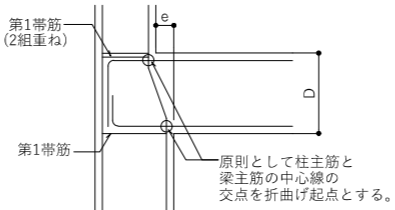


図7-4-1 柱主筋を折り曲げて通し筋とする場合(柱のしぼり勾配  $e/D \leq 1/6$  の場合)

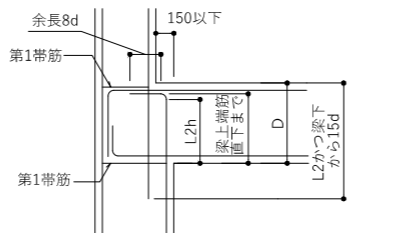


図7-4-2 柱主筋を通し筋としない場合(柱のしぼり寸法が150mm以下の場合)

§8 大梁

8-1 大梁カットオフ筋長さおよび継手位置

- カットオフ筋長さは、構造図に記載のない場合は、図8-1による。
- 大梁継手位置は、図8-1による。

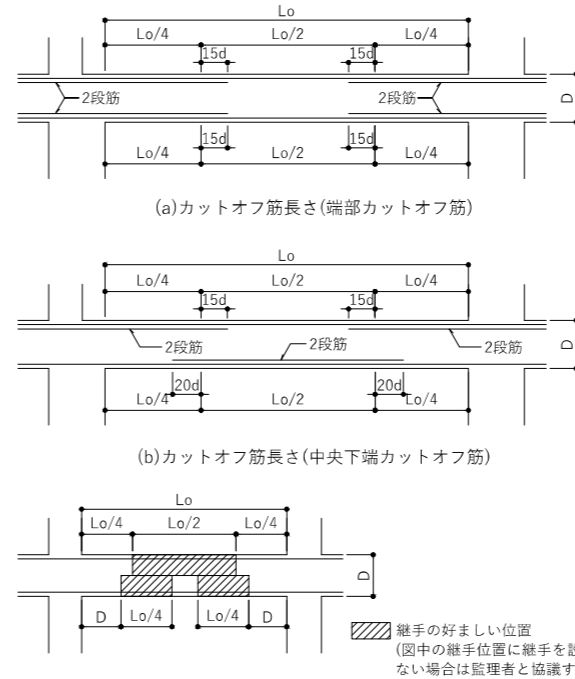


図8-1 大梁のカットオフ筋長さおよび継手位置

8-2 梁主筋の柱への定着

- 梁主筋の柱への定着は原則として折曲げ定着とし、定着要領は構造図による。構造図に記載のない場合は、図8-2-1、図8-2-2による。
- 下端筋の定着は、曲上げを原則とする。曲上げ筋がおさまらず、曲下げとする場合(図中の破線)は、監理者と協議すること。

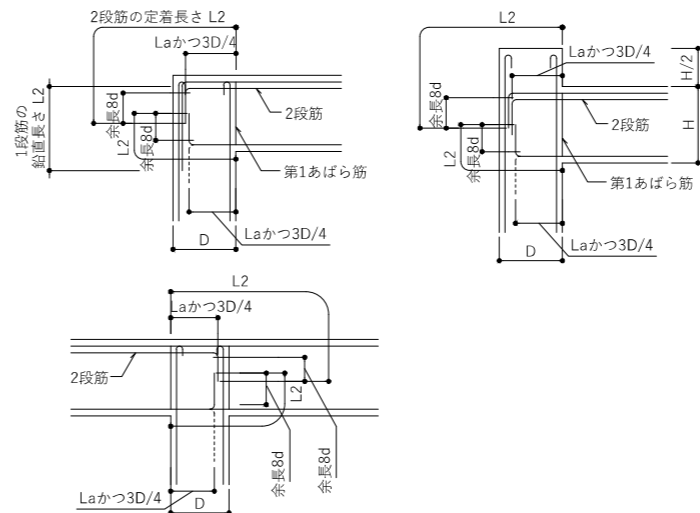
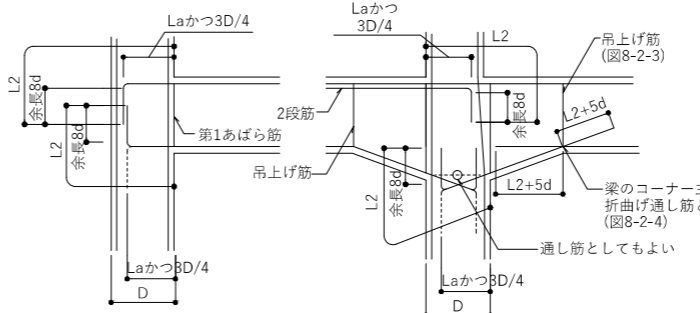


図8-2-1 最上階の場合(上に柱のない場合)



設計者 図8-2-2 中間階の場合  
 ㈱異設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 ㈱異設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 ㈱長大 一級建築士登録361861号 正田 崇貴  
 構造設計一級建築士登録 10823号



図8-2-3 吊上げ筋の形状

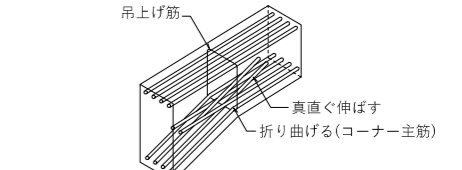


図8-2-4 ハンチ部配筋

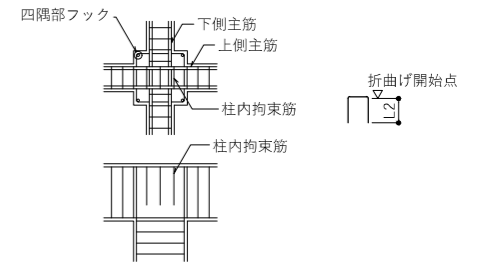
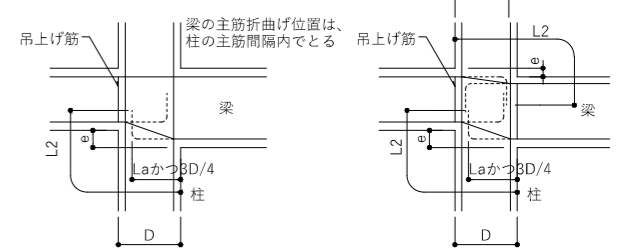


図8-2-5 最上階柱頭補強(上に柱のない場合)

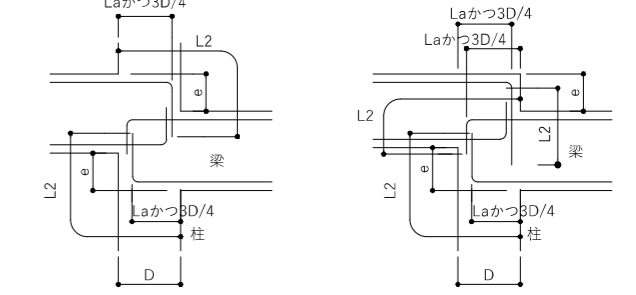
8-3 梁主筋が真直ぐ通らない場合のおさまり

梁主筋は原則として通し筋とするが、鉄筋のあき寸法が確保できる場合は折曲げ定着としてもよい。直線定着とする場合は、監理者と協議すること。

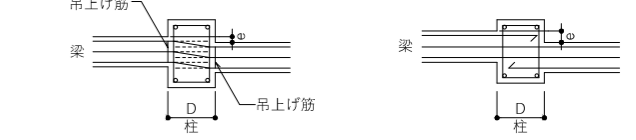
- $e/D \leq 1/6$  の場合



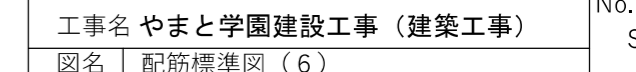
- $e/D > 1/6$  の場合



- $e/D \leq 1/6$  の場合



- 水平方向にずれのある場合



工事名 やまと学園建設工事(建築工事)  
 図名 配筋標準図(6)  
 設計 光市建設部建築住宅課

No. S-28

縮尺(A1) -  
 縮尺(A3) -  
 令和 8年 3月

8-4 柱梁配筋概要図

- 1.本図は § 6~8に示す規定をラメン形に集約したものである。
- 2.最上階大梁は中央カットオフ筋、中間階大梁は端部カットオフ筋、基礎梁は端部カットオフ筋(タイプC)の配筋を示す。
- 3.柱梁接合部に機械式定着工法を適用する場合、各機械式定着工法に定める規定を満足すること。

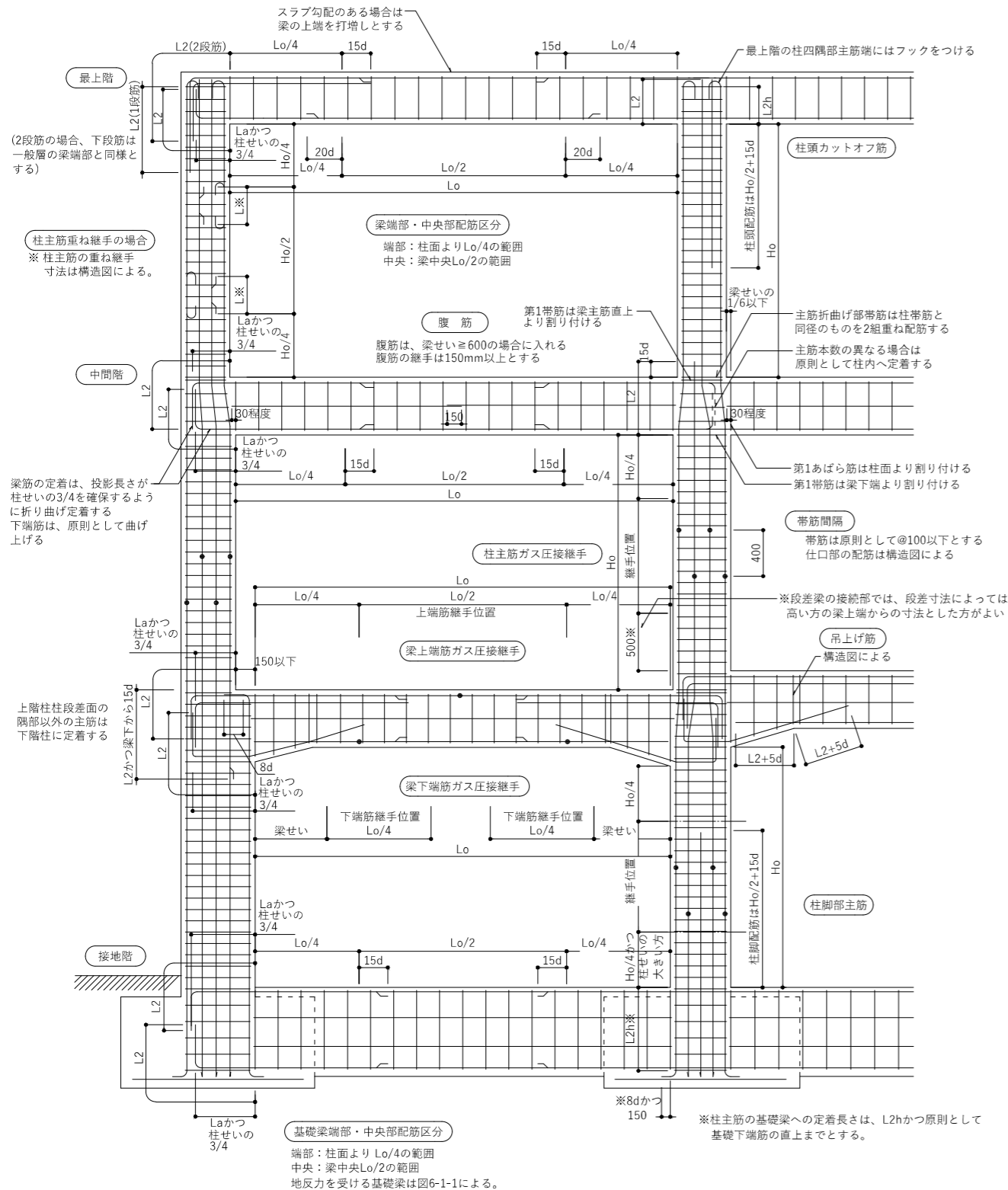
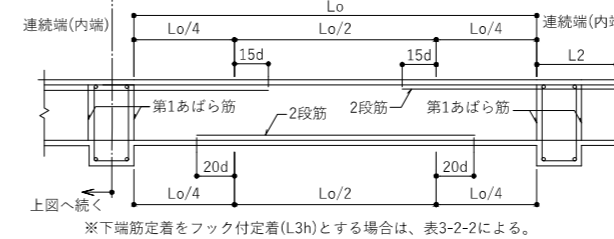
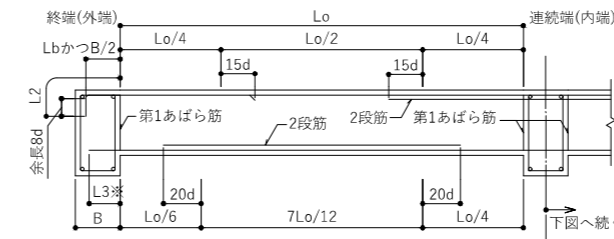


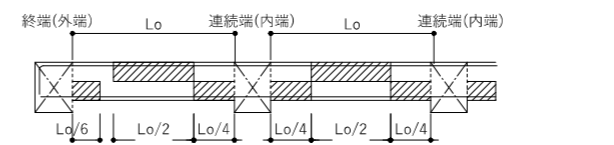
図8-4 柱梁配筋概要図

§9 小梁・片持ち梁

9-1 小梁の定着・カットオフ筋長さおよび継手位置

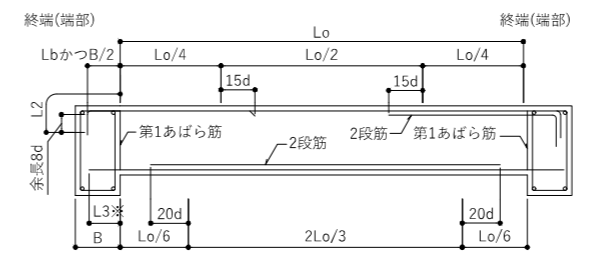


(a)定着およびカットオフ筋長さ

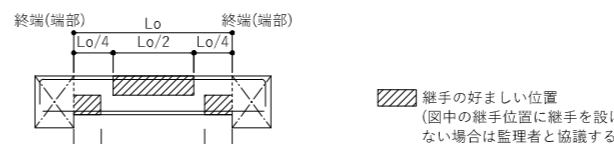


(b)継手位置

図9-1-1 小梁(連続小梁)



(a)定着およびカットオフ筋長さ



(b)継手位置

図9-1-2 小梁(単独小梁)

9-2 小梁と大梁の取合い

- 1.小梁主筋の定着で垂直に余長が確保できない場合は、上端筋は斜め定着、下端筋は斜め定着あるいは水平定着としてもよい。

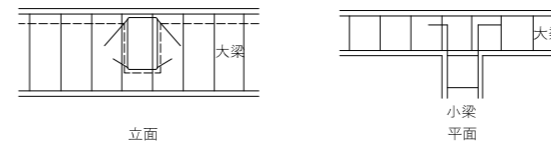


図9-2-1 小梁と大梁の取合い

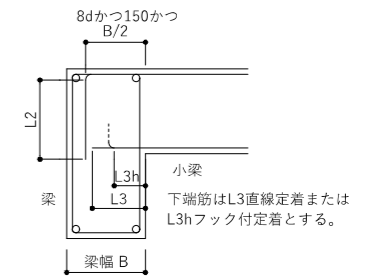
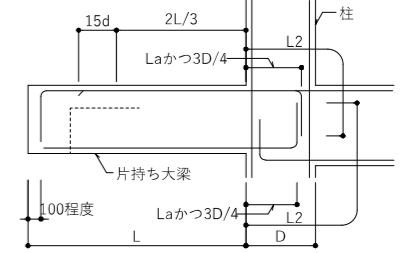


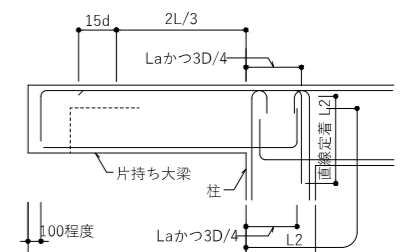
図9-2-2 幅の小さい梁への定着要領 (Lbが確保できない場合)

9-3 片持ち大梁・片持ち小梁の定着・カットオフ筋長さおよび継手位置

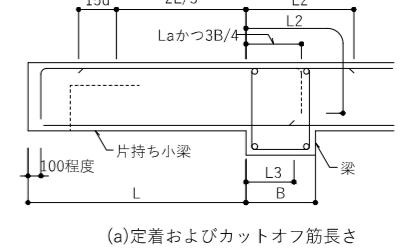
(1)片持ち大梁(中間階)



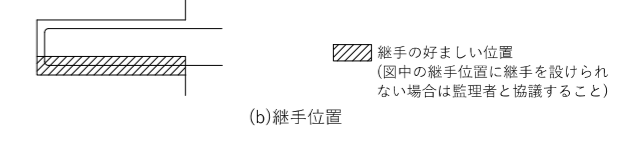
(2)片持ち大梁(最上階)



(3)片持ち小梁



(a)定着およびカットオフ筋長さ



(b)継手位置

図9-3 片持ち梁

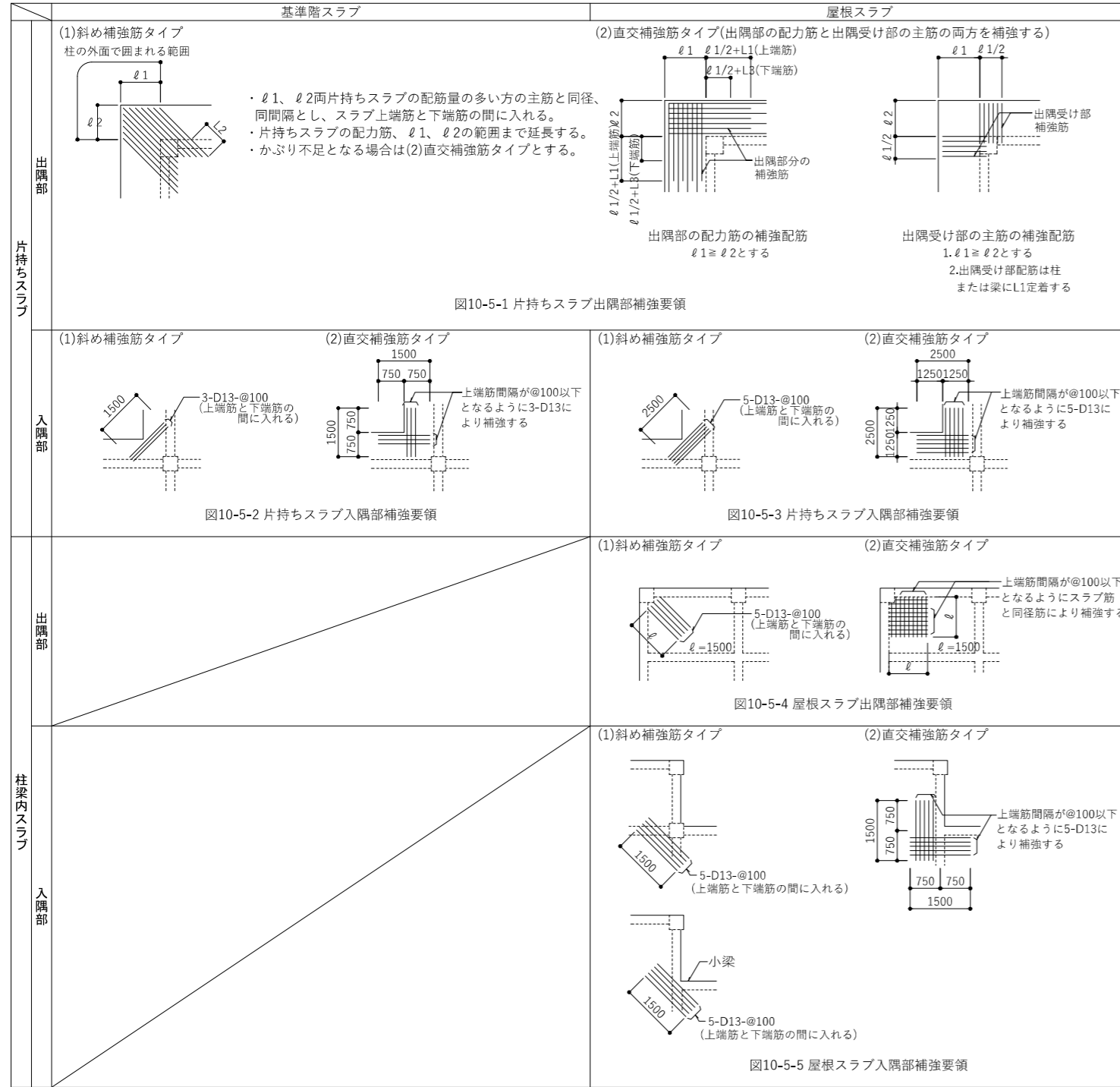
設計者	榎野設計コンサルタント	一級建築士登録321729号	小澤 透
	榎野設計コンサルタント	一級建築士登録293856号	福田 豊和
	榎長大	一級建築士登録361861号	正田 崇貴
	構造設計一級建築士登録 10823号		

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)					No.
図名 配筋標準図 (7)					S- 29
設計	光市建設部建築住宅課				縮尺(A1) -
					縮尺(A3) -
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月



10-5 補強筋

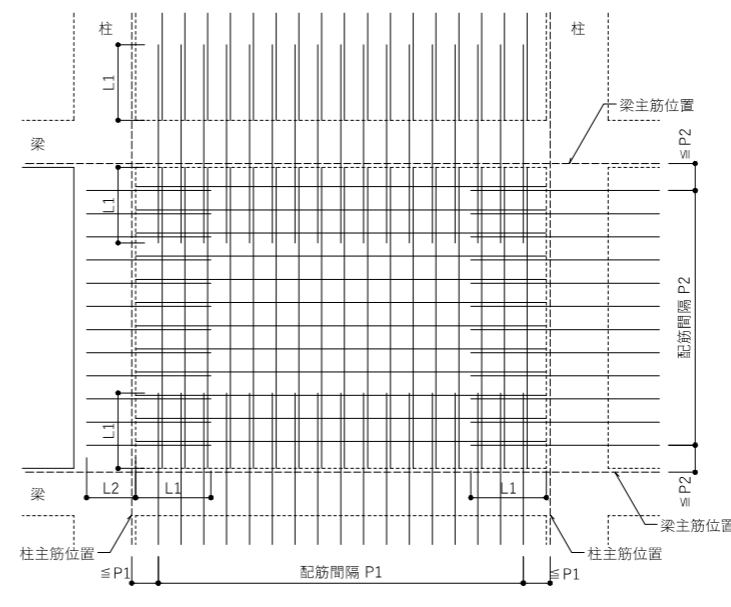
- 片持ちスラブの出隅部および入隅部補強筋は構造図による。構造図に記載のない場合は図10-5-1、図10-5-2、図10-5-3による。
- 屋根スラブの出隅部および入隅部補強筋は構造図による。構造図に記載のない場合は図10-5-4、図10-5-5による。



§11 壁

11-1 壁と柱・梁とのおさまり

- 壁筋の継手は、壁内とし、柱、梁内に設けない。
- 壁筋の柱、梁内の定着方法は、図11-1-2、図11-1-3、図11-1-4による。
- 壁の第1横筋と縦筋は、柱面、梁面から100mm以下かつ柱主筋、梁主筋から設計間隔以内に配置する。



- ・ 図中のP1、P2は、壁筋の間隔を示す。
- ・ 壁配筋の重ね継手はL1、定着長さはL2とする。
- ・ 幅止め筋は、縦横ともD10-@1000程度とする。

図11-1-1 定着と継手

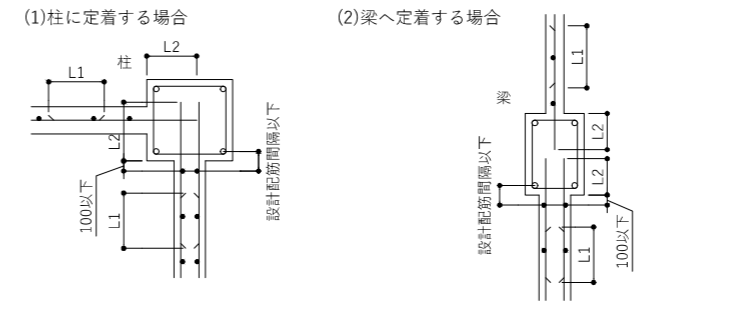


図11-1-2 帯筋、あばら筋内に配置する壁筋の定着方法

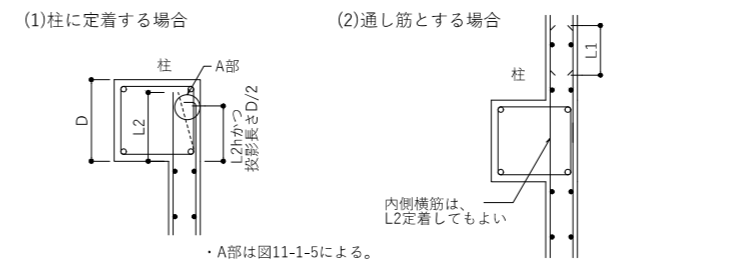


図11-1-3 柱主筋の外側を通る壁筋の柱への定着方法

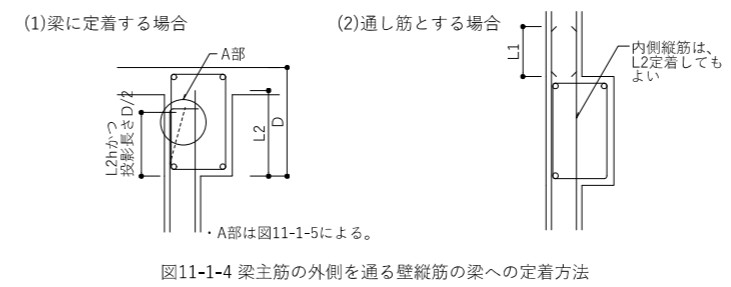


図11-1-4 梁主筋の外側を通る壁筋の梁への定着方法

- 先端90° フックとする場合
- 先端を斜めに折り曲げる場合

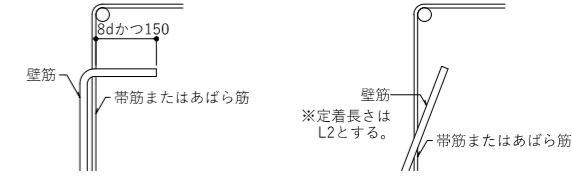
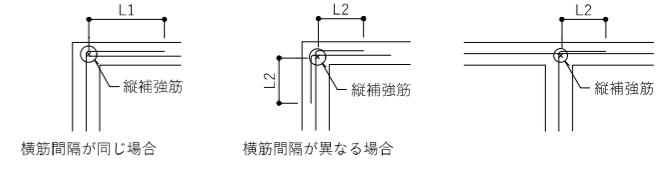


図11-1-5 A部鉄筋折曲げ形状と寸法

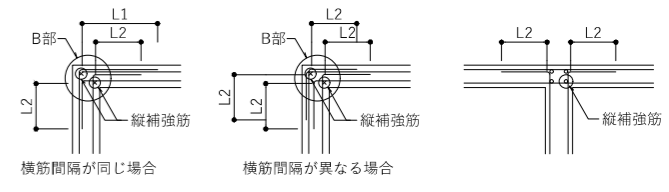
11-2 壁と壁・スラブとのおさまり

- 縦補強筋は、D13以上かつ壁縦筋最大径以上とする。
- 横補強筋は、D13以上かつ壁横筋最大径以上とする。

(1) シングル配筋の場合



(2) ダブル配筋の場合



(3) 壁交差部(B部)の縦補強筋配筋要領図

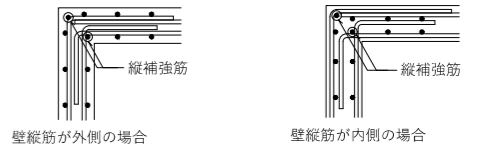
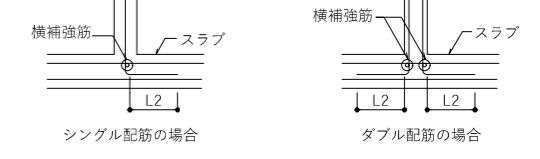


図11-2-1 壁端部と直交壁の接合部おさまり(L形・T形)

(1) 壁脚部



(2) 壁頂部

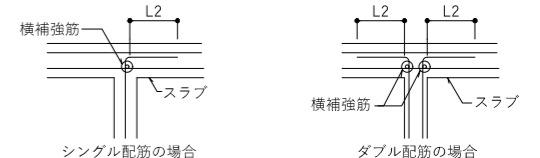
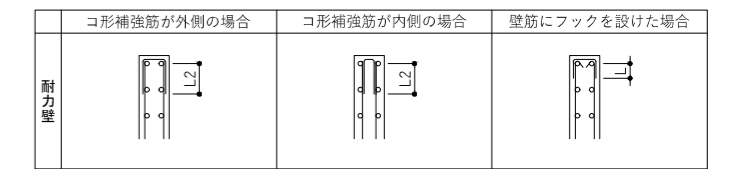


図11-2-2 壁とスラブの接合部おさまり

11-3 壁端部・開口部小口補強



- (注) 1. 耐力壁の場合、コ形補強筋は壁筋と同径、同間隔とする。  
2. L寸法は構造図による。構造図に記載のない場合は15dとする。  
3. 壁筋にフックを設けた壁で、壁厚が250mm以下の場合、開口部小口補強は省略することができる。

設計者	榑巽設計コンサルタント	一級建築士登録321729号	小澤 透
	榑巽設計コンサルタント	一級建築士登録293856号	福田 豊和
	榑長大	一級建築士登録361861号	正田 崇貴
	構造設計一級建築士登録 10823号		

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)		No.
図名	配筋標準図 (9)	S- 31
設計	光市建設部建築住宅課	縮尺(A1) - 縮尺(A3) -
部長	課長	係長
製図	写図	令和 8年 3月

11-4 地下外壁

- 1.地下外壁壁筋の定着は、図11-4-1、図11-4-2、図11-4-3、図11-4-4による。
- 2.地下外壁の壁筋の継手は、地下外壁内とし、柱、梁に設けない。(図11-4-5)
- 3.e1は壁外面と柱外面のずれ、e2は壁外面と梁外面のずれを示し、e1、e2寸法は構造図による。
- 4.土に接する側の縦筋、横筋は原則として柱、梁主筋の外側を通す。

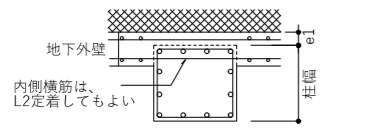


図11-4-1 柱とのおさまり

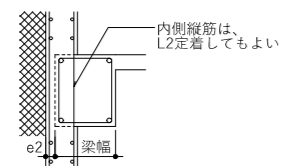


図11-4-2 梁とのおさまり

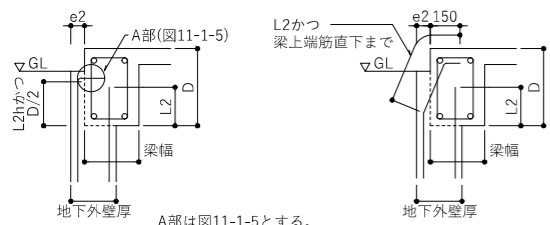


図11-4-3 壁上部のおさまり

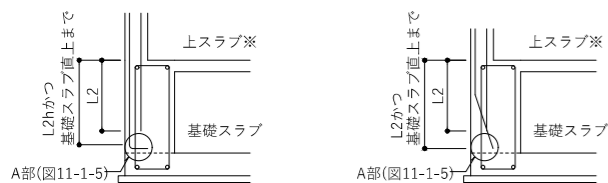


図11-4-4 地下外壁と基礎梁の接合部おさまり

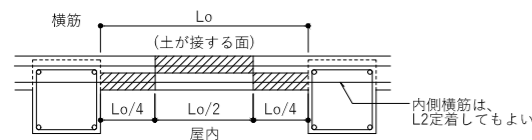


図11-4-5 継手位置

§ 12 開口補強

12-1 スラブおよび非耐力壁

- 1.一辺の最大寸法が700mm以下の開口に対するスラブ補強は、図12-1-1による。
- 2.開口が連続するスラブの場合および片持ちスラブに開口を設ける場合の補強は構造図による。
- 3.スラブ開口の最大径が両方向の配筋間隔以下の場合、鉄筋を1/6以下の勾配で曲げること、または50mm以下でずらすことにより補強筋を省略することができる。ただし、開口部から設計かぶりを確保すること。
- 4.一辺の最大寸法が700mm以下の開口に対する非耐力壁の内壁の壁開口補強は、図12-1-2による。
- 5.耐力壁、非耐力壁の外壁および開口が連続する壁の場合の開口補強は構造図による。
- 6.壁開口、スラブ開口が柱または梁に接する場合、接する柱、梁の部分には補強筋を省略できる。(図12-1-4、図12-1-5)
- 7.壁開口の最大径が両方向の配筋間隔以下の場合、鉄筋を1/6以下の勾配で曲げること、または50mm以下でずらすことにより補強筋を省略することができる。ただし、開口部から設計かぶりを確保すること。

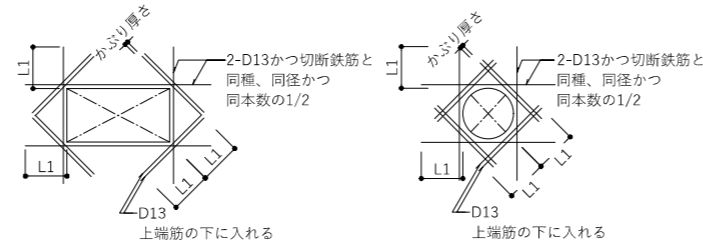


図12-1-1 スラブ開口補強

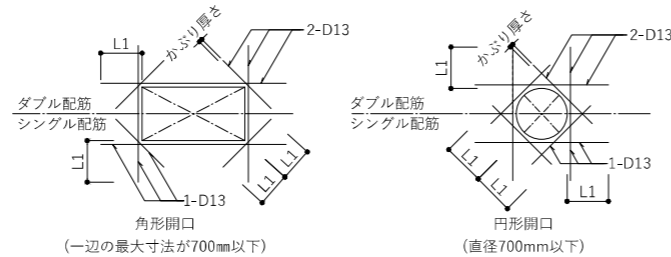


図12-1-2 非耐力壁の内壁開口補強

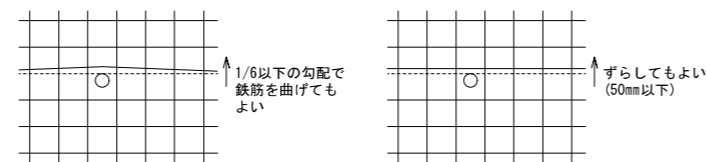


図12-1-3 単独円形小開口の配筋要領  
(開口の大きさが、床壁の配筋間隔以下の場合)

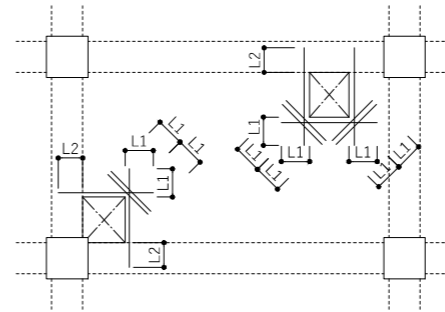


図12-1-4 スラブ開口部が柱または梁に接する場合の配筋要領

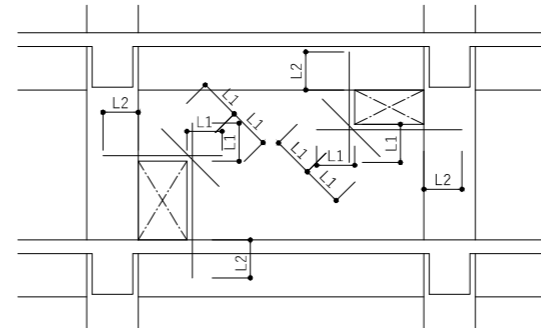



図12-1-5 壁開口部が柱または梁に接する場合の配筋要領

工事名 やまと学園建設工事（建築工事）					No.
図名 配筋標準図（10）					S- 32
設計	光市建設部建築住宅課				縮尺(A1) - 縮尺(A3) -
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

設計者	小澤 透
構異設計コンサルタント	一級建築士登録321729号 小澤 透
構異設計コンサルタント	一級建築士登録293856号 福田 豊和
構長大	一級建築士登録361861号 正田 崇貴
構造設計	一級建築士登録 10823号

§13 柱・梁・壁・スラブ打増し部配筋要領

1. 構造図に記載のない打増しを行う場合は事前に監理者と協議すること。
2. 柱、梁の打増し部に耐力壁が取り付けられる場合の打増し配筋要領は構造図による。
3. 打増し寸法a、a1、a2が70mm未満の場合は補強筋不要とする。  
打増し寸法a、a1、a2が70mm≦a≦200mmの場合の打増し部補強要領は図13-1-1～図13-1-2による。
4. 打増し寸法a、a1、a2が200mmを超える場合の打増し部詳細事項は構造図による。
4.  部は打増しコンクリートを示す。
5. ※部の打増し補強筋の定着長さについては、監理者に確認すること。

13-1 柱

1. 梁、耐力壁およびスラブの鉄筋の定着長さは、柱体内で確保し、打増し部は定着長さに算定しない。
2. 柱の打増し部配筋要領は表13-1、図13-1-1、図13-1-2による。

表13-1 柱補強筋  
(耐力壁が取り付けられる場合の要領は構造図による)

補強主筋	D16-@300程度
補強帯筋	D13-@100程度

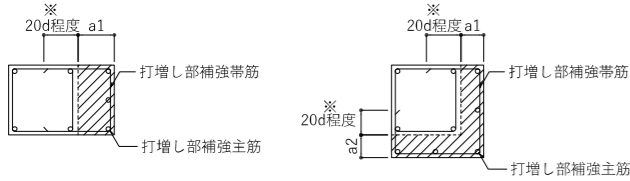


図13-1-1 柱の打増し要領

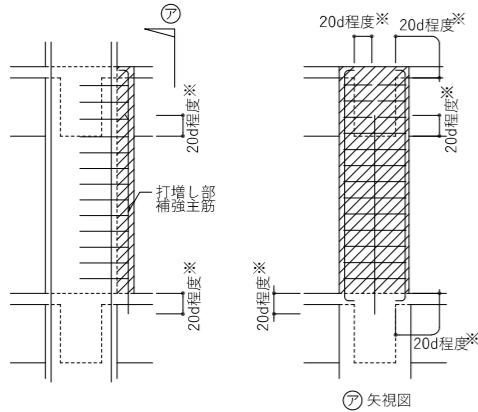


図13-1-2 柱打増し部の補強主筋の定着

13-2 梁

1. 小梁、耐力壁およびスラブの鉄筋の定着長さは、梁体内で確保し、打増し部は定着長さに算定しない。
2. 梁の打増し部配筋要領は表13-2-1、表13-2-2、図13-2-1による。
3. 打増し部腹筋は梁と同径、同段数とする。

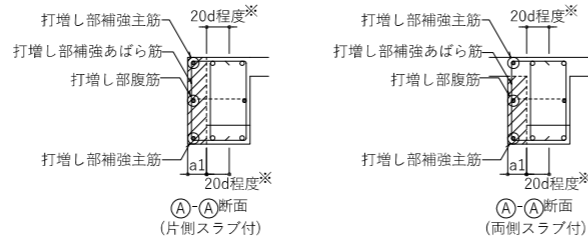
表13-2-1 梁側面補強筋  
(耐力壁が取り付けられる場合の要領は構造図による)

補強主筋	D16
補強あばら筋	梁あばら筋と同径、 間隔200mm以下

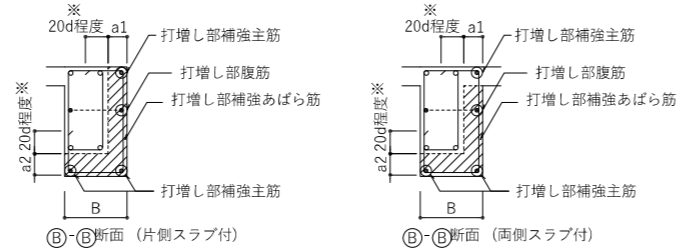
表13-2-2 梁上下面補強筋  
(耐力壁・スラブが取り付けられる場合の要領は構造図による)

梁幅	B ≦ 350mm	350mm < B
補強主筋	2-D16	D16-@250以下
補強あばら筋	梁あばら筋と同径、 間隔200mm以下	

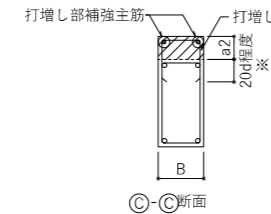
(1) 梁側面を打増しする場合



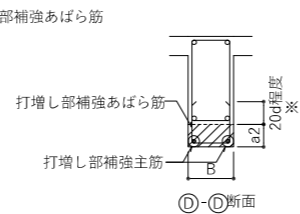
(2) 梁側面および梁下面を打増しする場合



(3) 梁上面を打増しする場合(スラブなし)



(4) 梁下面を打増しする場合



・スラブが取付く場合は図10-3-2、図10-3-3を参照。

図13-2-1 梁の打増し要領

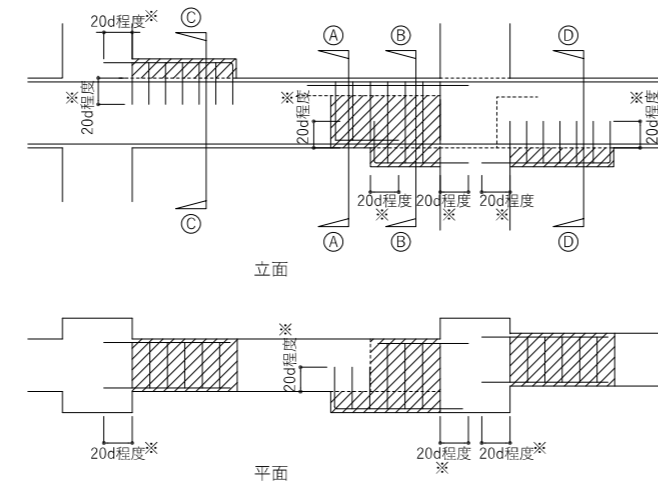


図13-2-2 梁打増し部の補強主筋の定着

13-3 壁・スラブ

1. 壁およびスラブの打増し部配筋要領は図13-3-1、図13-3-2による。

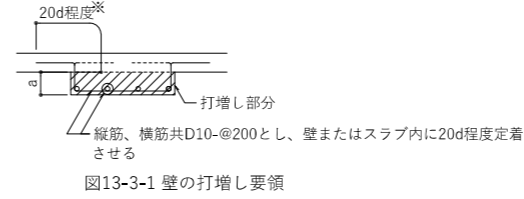


図13-3-1 壁の打増し要領

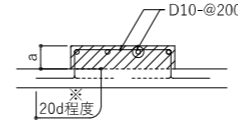


図13-3-2 スラブの打増し要領

梁貫通孔補強等要領

1. 梁貫通孔の径(構造体寸法)は、以下による。  
RC梁：梁せいの1/3以下  
S梁：梁せいの1/2以下  
SRC梁：梁せいの1/3以下かつ内蔵鉄骨梁せいの1/2以下
2. 梁貫通孔の中心間隔は、隣接する貫通孔径(径が違う場合は平均値)の3倍以上とする。
3. 柱及び直交する梁(小梁)の面から、貫通孔を設ける梁せいの1/2の範囲には梁貫通孔を設けないこと。
4. 梁貫通孔の上下方向の位置は梁せいの原則中心付近とし、上下に寄せる場合においては、梁の上端及び下端より250以上離れた位置とする。
5. RC及びSRC梁の梁貫通孔部分の補強については、既製品を用いるものとする。(ただし(財)日本建築センター評価書取得した製品に限る)  
採用に際しては、選定した製造会社・種類を示したリスト及び耐力計算書を添付の上、監督員の承認を受けること。
6. 本建物において、鉄骨梁の貫通孔部分については、孔あけのみとし、補強は不要とする。
7. 設備貫通個数表(電気及び空調衛生用貫通孔)は下表による。  
建築用開口及び基礎梁湧水連通管等の形状や個数については、意匠図による。

種別	寸法	円形						矩形						
		100φ	125φ	150φ	200φ	250φ	300φ							
梁	基礎梁	150	20	50	50	30								
	R C梁	70	20	20	10	90								
壁	壁厚	100φ	125φ	150φ	200φ	250φ	300φ	150	300	600	600	1200		
	180	130					800	1000	1000	2500	1500			
床	スラブ厚	100φ	125φ	150φ	200φ	250φ	300φ	10	15	5	5	10		
	180			270										

工事名 やまと学園建設工事(建築工事)		No. S-33	
図名 配筋標準図(11)		設計 光市建設部建築住宅課	
設計者	小澤 透	縮尺(A1)	-
設計者	福田 豊和	縮尺(A3)	-
設計者	正田 崇貴	令和	8年
設計者	構造設計一級建築士登録番号10823号	3月	

§1 一般事項

- 1.本溶接標準図は表1.1に示すJIS規格鋼材、及び国土交通大臣認定品を使用する鉄骨工事に適用する。
- 2.構造図に記載された事項は、本溶接標準図に優先して適用するものとする。
- 3.鉄骨製作工場の仕様と相違がある場合は、工事監理者との協議により溶接方法を決定する。

表1.1 適用範囲(JIS規格鋼材)

規格番号	規格名称	種類の記号
JIS G 3101	一般構造用圧延鋼材	SS400
JIS G 3106	溶接構造用圧延鋼材	SM400A,SM400B,SM400C SM490A,SM490B,SM490C SM520B,SM520C
JIS G 3114	溶接構造用耐候性圧延鋼材	SM400AW,BW,CW, SM400AP,BP,CP, SM490AW,BW,CW SM490AP,BP,CP
JIS G 3136	建築構造用圧延鋼材	SN400A,SN400B,SN400C SN490B,SN490C
JIS G 3138	建築構造用圧延棒鋼	SNR400A,SNR400B SNR490B
JIS G 3444	一般構造用炭素鋼鋼管	STK400,STK490
JIS G 3466	一般構造用角形鋼管	STKR400,STKR490
JIS G 3475	建築構造用炭素鋼鋼管	STKN400W,STKN400B STKN490B
JIS G 3350	一般構造用軽量形鋼	SSC400
JIS G 3353	一般構造用溶接軽量H形鋼	SWH400,SWH400L

4.記号の説明



記号	名称
B	突合せ継手(Butt Joint)
T	T継手(T-Joint)
C	角継手(Corner Joint)

記号	名称
I	I形開先
V	V形開先
L	L形開先
X	X形開先
K	K形開先

記号	名称
1	片側溶接
2	両側溶接

記号	名称
G	GMAW,SMAW
S	SAW
E	ESW

記号	名称
C	完全溶込み溶接(Complete joint penetration Weld Full penetration Weld)
P	部分溶込み溶接(Partial joint Penetration Weld)
F	隅肉溶接(Fillet Weld)

GMAW : Gas Metal Arc Welding : ガスシールドアーク溶接  
 SMAW : Shielded Metal Arc Welding : 被覆アーク溶接  
 SAW : Submerged Arc Welding : サブマージアーク溶接  
 ESW : ElectroSlag Welding : エレクトロスラグ溶接

§2 完全溶込み溶接の開先標準

- 1.溶接方法ごとに、表2.1～表2.4に示す開先標準を適用する。
- 2.ルート間隔、ルート面、開先角度、開先深さの許容差は、JASS6(2018年版)付則5.による。
- 3.余盛高さの標準及び許容差はJASS6(2018年版)付則6.による。

表2.1 完全溶け込み溶接の開先標準 (GMAW,SMAW)

記号	図	適用板厚 T(mm)	ルート間隔 G(mm)	ルート面 R(mm)	開先角度 $\alpha_1, \alpha_2(^{\circ})$	開先深さ $D_1, D_2$ (mm)	備考
B I -1GC		<6	T	-	-	-	-
C I -1GC		<6	T	-	-	-	-
BV-1GC		6 ≦	6	≦2	$\alpha_1 : 45$	-	-
		6 ≦	9	≦2	$\alpha_1 : 35$		
BL-1GC		6 ≦	7	≦2	$\alpha_1 : 35$	-	*1
		6 ≦	7	≦2	$\alpha_1 : 30$		
TL-1GC		6 ≦	7	≦2	$\alpha_1 : 35$	-	*1
		6 ≦	7	≦2	$\alpha_1 : 30$		
CL-1GC		6 ≦	7	≦2	$\alpha_1 : 35$	-	*1
		6 ≦	7	≦2	$\alpha_1 : 30$		
B I -2GC		<6	T/3	-	-	-	*2
T I -2GC		<6	T/3	-	-	-	*2

\*1 :  $\alpha_1 : 30$ はGMAWのみ

表2.1 完全溶け込み溶接の開先標準 (GMAW,SMAW)つづき

記号	図	適用板厚 T(mm)	ルート間隔 G(mm)	ルート面 R(mm)	開先角度 $\alpha_1, \alpha_2(^{\circ})$	開先深さ $D_1, D_2$ (mm)	備考
C I -2GC		<6	T/3	-	-	-	*2
BV-2GC		6 ≦	0	2	$\alpha_1 : 60$	-	*2
BL-2GC		6 ≦	0	2	$\alpha_1 : 45$	-	*2
TL-2GC		6 ≦	0	2	$\alpha_1 : 45$	-	*2
BX-2GC		16 ≦	0	2	$\alpha_1 : 60$ $\alpha_2 : 60$	$D_1 : 2(T-R)/3$ $D_2 : (T-R)/3$	*2
BK-2GC		16 ≦	0	2	$\alpha_1 : 45$ $\alpha_2 : 60$	$D_1 : 2(T-R)/3$ $D_2 : (T-R)/3$	*2
TK-2GC		16 ≦	0	2	$\alpha_1 : 45$ $\alpha_2 : 60$	$D_1 : 2(T-R)/3$ $D_2 : (T-R)/3$	*2
CK-2GC		16 ≦	0	2	$\alpha_1 : 45$ $\alpha_2 : 60$	$D_1 : 2(T-R)/3$ $D_2 : (T-R)/3$	*2

\*2 : 裏はつり

設計者  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録361861号 正田 崇貴  
 構造設計一級建築士登録 10823号

設計 光市建設部建築住宅課

縮尺(A1) -  
 縮尺(A3) -

部長 課長 係長 製図 写図

令和 8年 3月

表2.2 完全溶込み溶接の開先標準 (溶接組立箱形断面角溶接SAW)

記号	図	適用板厚 T(mm)	ル-ト間隔 G(mm)	ル-ト面 R(mm)	開先角度 $\alpha$ (°)	開先深さ $D_1, D_2$ (mm)
CV-1SC		19 ≦	0~10	≧3	$\alpha$ : 30 ~42	-
CL-1SC		19 ≦	0~10	≧2	$\alpha$ : 35 ~40	-

表2.3 完全溶込み溶接の開先標準 (溶接組立H形断面SAW)

記号	図	適用板厚 T(mm)	ル-ト間隔 G(mm)	ル-ト面 R(mm)	開先角度 $\alpha_1, \alpha_2$ (°)	開先深さ $D_1, D_2$ (mm)
TI-2SC		<19	0	-	-	-
TK-2SC		19 ≦	0	6	45~60 ( $\alpha_1 = \alpha_2$ )	(T-6)/2

表2.4 完全溶込み溶接の開先標準 (溶接組立箱形断面ESW)

記号	図	適用板厚 T(mm)	ル-ト間隔 G(mm)	裏当厚さ a(mm)	裏当幅 b(mm)
TI-1EC		19 ≦	23~25	28	50

§3 部分溶込み溶接の開先標準

- 1.溶接方法ごとに、表3.1~表3.2に示す開先標準を適用する。
- 2.ル-ト間隔、ル-ト面、開先角度、開先深さの許容差は、JASS6付則5.1による。
- 3.余盛高さの標準及び許容差はJASS6付則6.1による。

表3.1 部分溶込み溶接の開先標準 (GMAW,SMAW)

記号	図	適用板厚 T(mm)	ル-ト間隔 G(mm)	ル-ト面 R(mm)	開先角度 $\alpha_1, \alpha_2$ (°)	開先深さ $D_1, D_2$ (mm)
TL-1GP		9 ≦	0	2	$\alpha_1$ : 45	$D_1$ : T-2
TL-2GP		9 ≦	0	2	$\alpha_1$ : 45	$D_1$ : T-2
CL-1GP		9 ≦	0	2	$\alpha_1$ : 45	$D_1$ : T-2
BK-2GP		16 ≦	0	2	45 ( $\alpha_1 = \alpha_2$ )	$D_1$ : (T-2)/2 $D_2$ : (T-2)/2
TK-2GP		16 ≦	0	2	45 ( $\alpha_1 = \alpha_2$ )	$D_1$ : (T-2)/2 $D_2$ : (T-2)/2
CK-2GP		16 ≦	0	2	45 ( $\alpha_1 = \alpha_2$ )	$D_1$ : (T-2)/2 $D_2$ : (T-2)/2

表3.2 部分溶込み溶接の開先標準 (溶接組立箱形断面角溶接SAW)

記号	図	適用板厚 T(mm)	ル-ト間隔 G(mm)	ル-ト面 R(mm)	開先角度 $\alpha$ (°)	開先深さ $D_1, D_2$ (mm)
CV-1SP		19 ≦	0	R : T/2	60	$D_1$ : T/2
CL-1SP		19 ≦	0	R : T/2	45	$D_1$ : T/2

§4 隅肉溶接の開先標準

- 1.継手の種別毎に表4.1~表4.2に示す開先標準を適用する。

表4.1 隅肉溶接の開先標準 (GMAW,SMAW)

記号	図	板厚 T (mm) T=min(T <sub>1</sub> , T <sub>2</sub> )									
		サイズ S (mm)、開先深さ D <sub>1</sub> , D <sub>2</sub>									
TI-2GF		T	4.5 -5	6 -7	8	9	10 -11	12	13 -14	15	16
		S	4	5	6	7	8	9	10	11	12
TK-2GF		T	19	22	25	28	32	36	40		
		D <sub>1</sub> D <sub>2</sub>	5.5	6.5	7.5	8.5	9.5	10.5	12.0		

表4.2 隅肉溶接の開先標準 (溶接組立H形断面SAW)

記号	図	開先角度 $\alpha_1, \alpha_2$ (°)	板厚 T (mm) T=min(T <sub>1</sub> , T <sub>2</sub> )							
			開先深さ D <sub>1</sub> , D <sub>2</sub>							
TK-2SF			T	19	22	25	28	32	36	40
		50 ( $\alpha_1 = \alpha_2$ )	D <sub>1</sub> , D <sub>2</sub>	6.5	7.5	8.5	9.5	11.0	12.0	13.5
		60 ( $\alpha_1 = \alpha_2$ )	D <sub>1</sub> , D <sub>2</sub>	5.5	6.5	7.5	8.5	9.5	10.5	12.0

板厚T<19のSAW(TI-2SF)は、表4.1のTI-2GFと同様とする。

§5 裏当て金

- 裏当て金の材質は溶接性に問題のないものとする。
- 断面：t×25～32（t：裏当て金板厚）  
ここに、 SMAW t ≧ 6 mm  
GMAW t ≧ 9 mm  
自動溶接 t ≧ 12 mm
- 柱梁接合部のフランジ裏当て金組立溶接は図5.1に示すように、梁フランジの端部から5mm以内およびウェブフィレット部のR止まりまたは隅肉溶接止端部から5mm以内の位置におこなわない。
- 裏当て金の組立用隅肉溶接は、サイズは4～6mmで1パスとし、長さ40～60mm程度とする。
- 現場溶接の場合、裏当て金の組立溶接は開先内とし、再溶融させる。

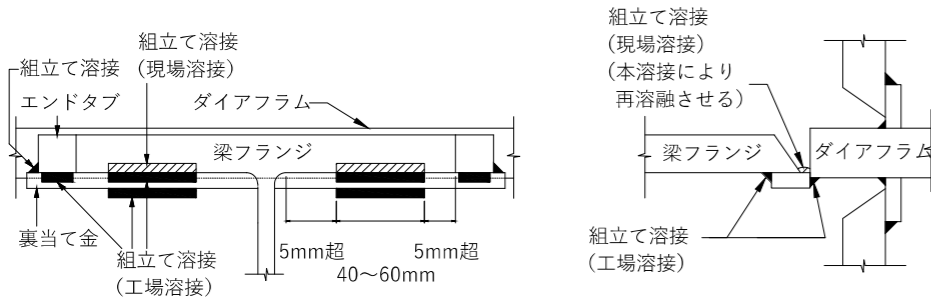


図5.1 柱梁接合部裏当て金の組立溶接位置

§6 エンドタブ

- 開先のある溶接の両端では、原則として鋼製エンドタブを用いる。
- 代替タブの使用は特記による。特記にない場合は監理者の承諾を得て使用する。
- エンドタブの材質は溶接性に問題のないものとする。
- 図6.1中 SMAW L ≧ 30 mm  
GMAW L ≧ 30 mm  
SAW L ≧ 70 mm
- 柱梁接合部にエンドタブを用いる場合は図6.1に示すように裏当て金に取り付ける。ただし、組立溶接を再溶融させる場合は開先内に組立溶接を行ってもよい。
- エンドタブの切断の要否は特記による。特記にない場合は切断しなくて良い。

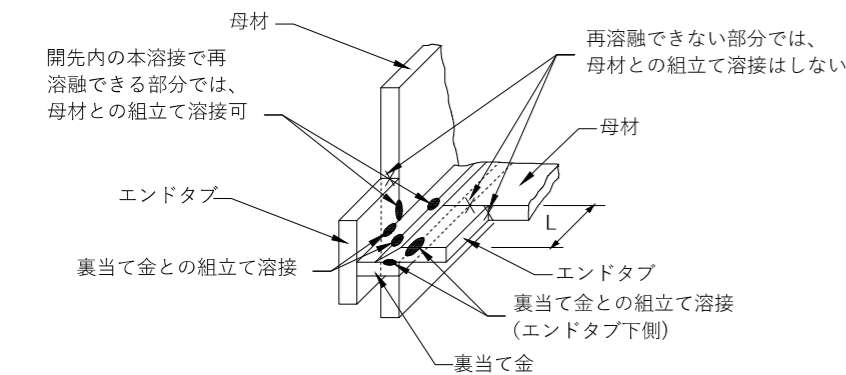


図6.1 柱梁接合部エンドタブの組立溶接位置

§7 スカラップ

- 工場溶接による柱梁接合部は図7.1に示すノンスカラップ工法を標準とする。
- スカラップを設ける場合は図7.2に示す複合円型スカラップとする。
- 梁端フランジ現場溶接の場合は、図7.3または図7.4に示す複合円型スカラップとする。
- 複合円型スカラップの r1=35mm以上、r2=10mm程度とする。
- Ld：ダイアフラムの寸出法、G：ルート間隔



図7.1a 梁がロールHの場合 図7.1b 梁がビルトHの場合  
図7.1 ノンスカラップ工法

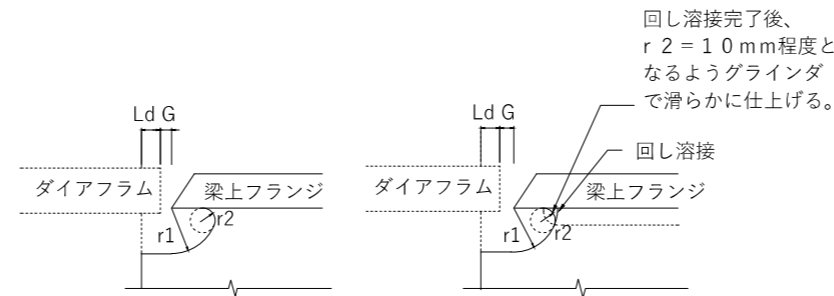


図7.2a 梁がロールHの場合 図7.2b 梁がビルトHの場合  
図7.2 複合円型スカラップ工法 (工場溶接)

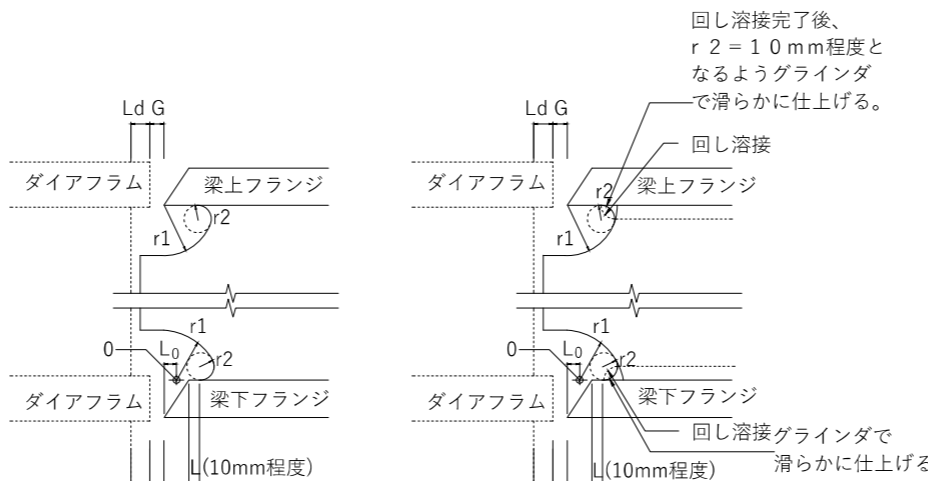


図7.3a 梁がロールHの場合 図7.3b 梁がビルトHの場合  
図7.3 複合円型スカラップ工法 (現場溶接、外 (通し) ダイアフラム形式の場合)

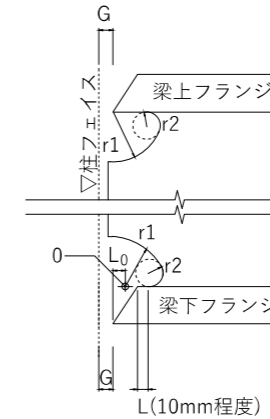


図7.4a 梁がロールHの場合  
0点の位置  
 $t_f < 22\text{mm} : L_0(\text{mm}) = 0$   
 $t_f \geq 22\text{mm} : L_0(\text{mm}) = 0.7t_f - 15$   
 $t_f$ : 下フランジの板厚

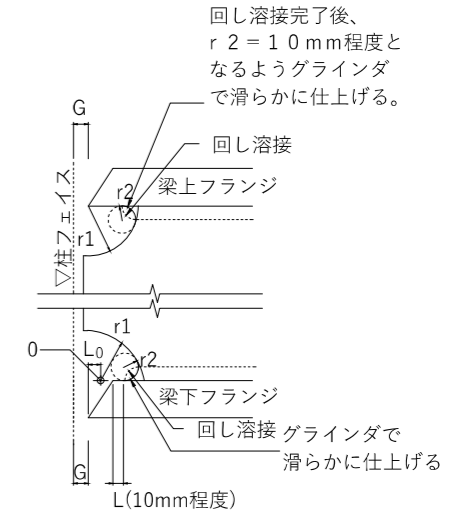


図7.4b 梁がビルトHの場合  
0点の位置  
 $L_0(\text{mm}) = 0.7t_f - 25 + S$   
ただし、 $L_0 \leq 0$ の場合は  $L_0 = 0$   
 $t_f$ : 下フランジの板厚  
S: 回し溶接の脚長

図7.4a 梁がロールHの場合 図7.4b 梁がビルトHの場合  
図7.4 複合円型スカラップ工法 (現場溶接、内ダイアフラム形式の場合)

§8 隅肉溶接始端

- ガセットプレート等の隅肉溶接端部は、図8.1に示すようにプレートを10～15mm下げて回し溶接を施工することを標準とし、回し溶接を行わない場合は図8.2に示すように端部から10mm程度控えて隅肉溶接を止める。

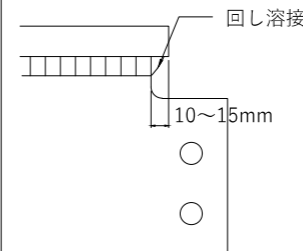


図 8.1 回し溶接

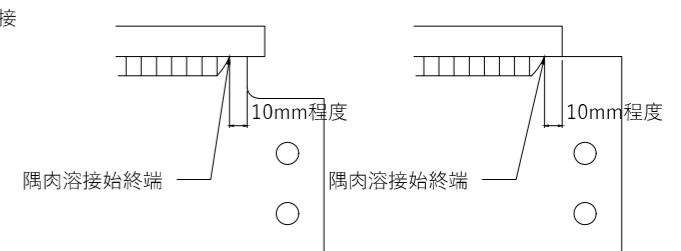


図 8.2 回し溶接を行わない場合

§10 仕口部の溶接標準図

1.基本記号

溶接部の形状	記号	溶接部の形状	記号	溶接部の形状	記号
I形開先	∏	V形フレア溶接	∩	ビード溶接	∪
V形開先	∨	レ形フレア溶接	∟	肉盛溶接	∪
レ形開先	∟	へり溶接	≡	スタッド溶接	⊗
J形開先	∟	隅肉溶接	∟		
U形開先	∩	エレクトロslag溶接	□		

2.補助記号などの記載方法



(a)溶接する側が矢の側又は手前側のとき

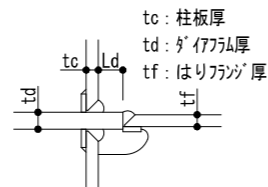
(b)溶接する側が矢の反対側又は向こう側のとき

(溶接施工内容の記号例示)

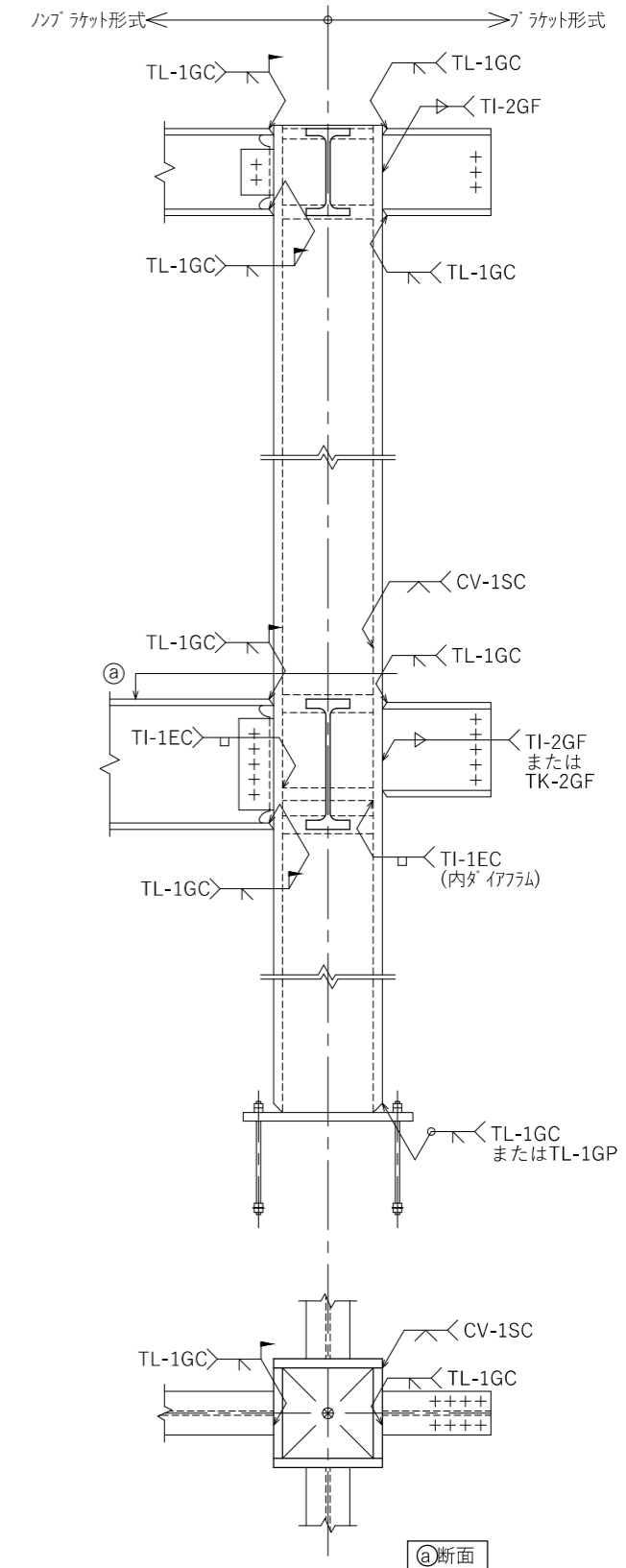
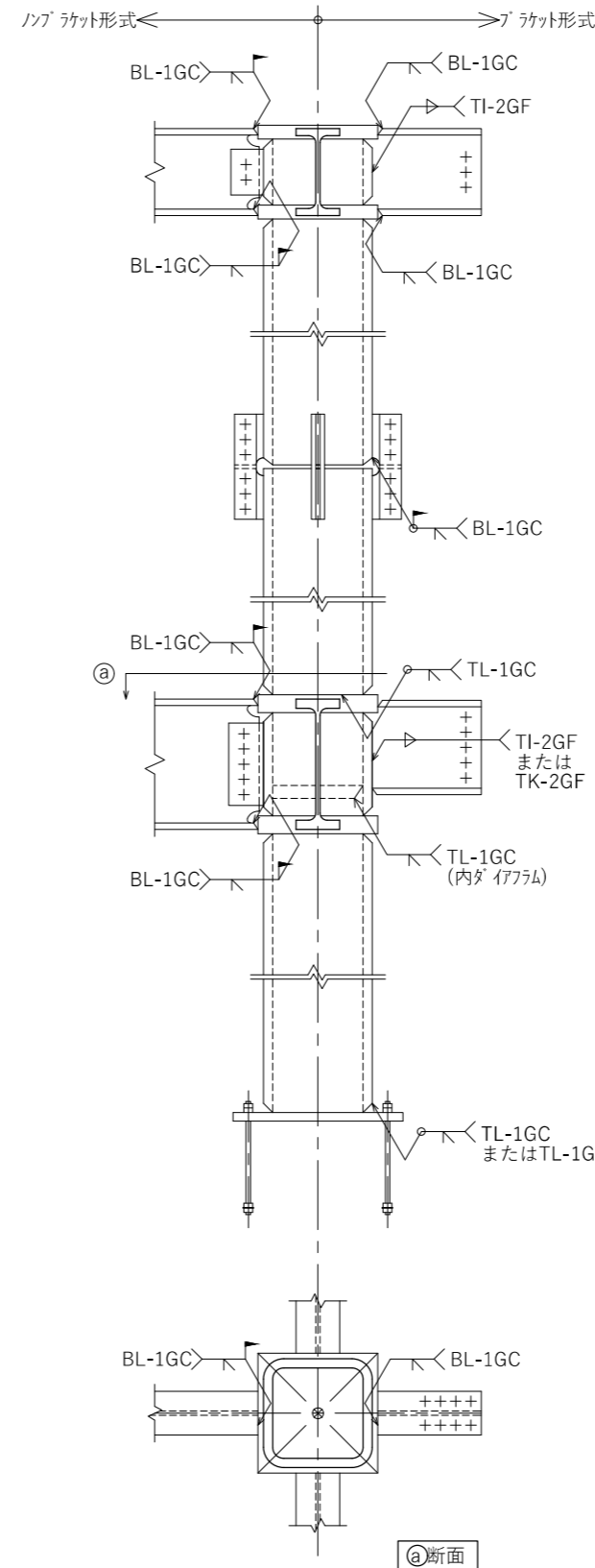
- : 基本記号
- S : 溶接部の断面寸法又は強さ (開先深さ, 隅肉の脚長, など)
- R : ルート間隔
- A : 開先角度
- L : 断続隅肉溶接の溶接長さ
- n : 断続隅肉溶接の数
- P : 断続隅肉溶接のピッチ
- T : 特別指示事項 (J形・U形などのルート半径, 溶接方法, 裏はつり, その他)
- : 表面形状の補助記号 ( - : 平ら仕上げ, ^ : 凸仕上げ, v : へこみ仕上げ, ⊥ : 止端仕上げ)
- G : 仕上方法の補助記号 ( C : チッピング, G : グラインダ, M : 切削, P : 研磨)
- ▬ : 現場溶接の補助記号
- : 全周溶接の補助記号

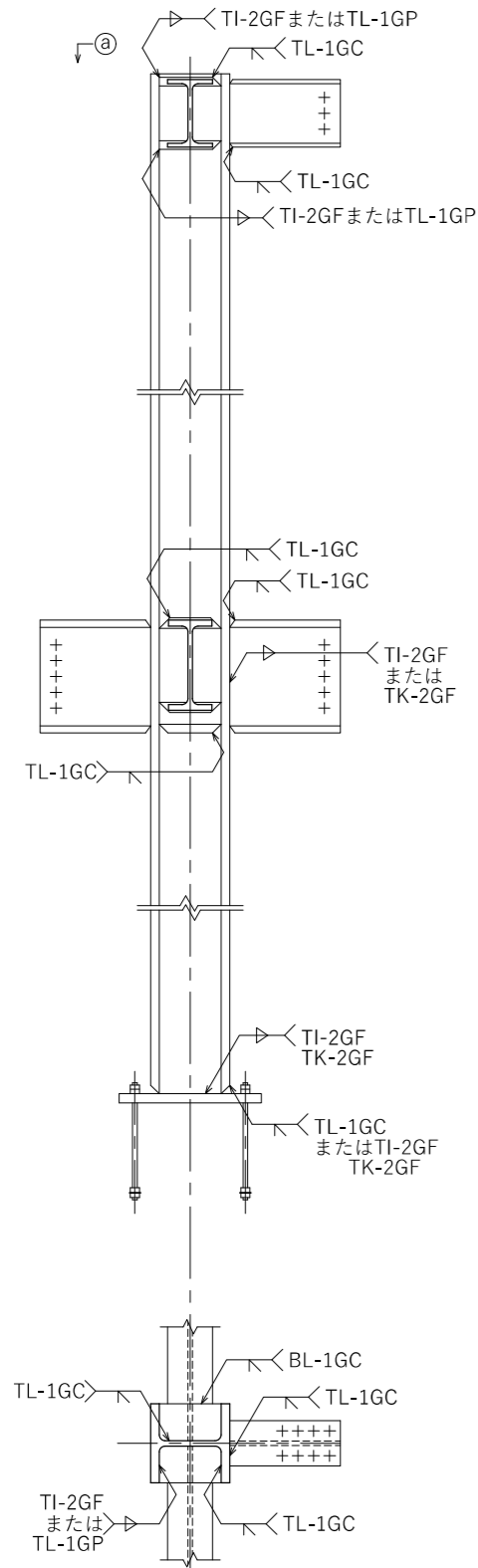
3.その他

- ・ダ イアムの寸法(Ld)は以下による  
柱板厚 tc < 28mm Ld = 25mm  
tc ≧ 28mm Ld = 30mm



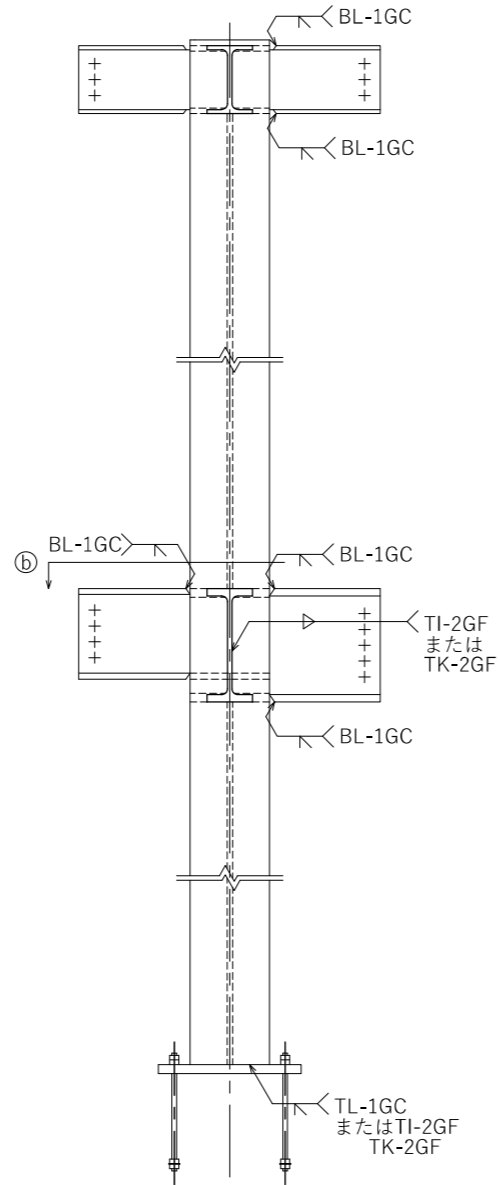
- ・通しダイアムの板厚tdは目違い防止のため原則として梁フランジ厚tfの2サイズupかつ柱板厚tc以上とする。
- ・内ダイアムの板厚tdは食い違い防止のため梁フランジ厚tfの1サイズup以上とする。
- ・突合せ継手の食い違い、仕口のずれは、平成12年建設省告示第1464号による。告示の規制を超えた場合は、「突合せ継手の食い違い仕口のずれの検査・補強マニュアル」(独立行政法人建築研究所監修)に準拠する。





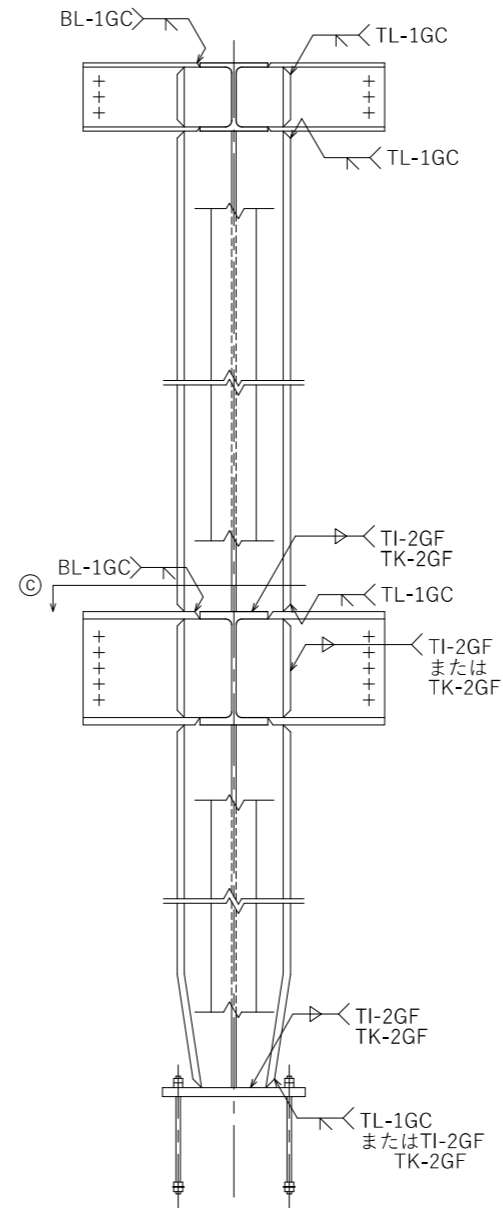
①断面

柱H-梁H(柱通しタイプ)



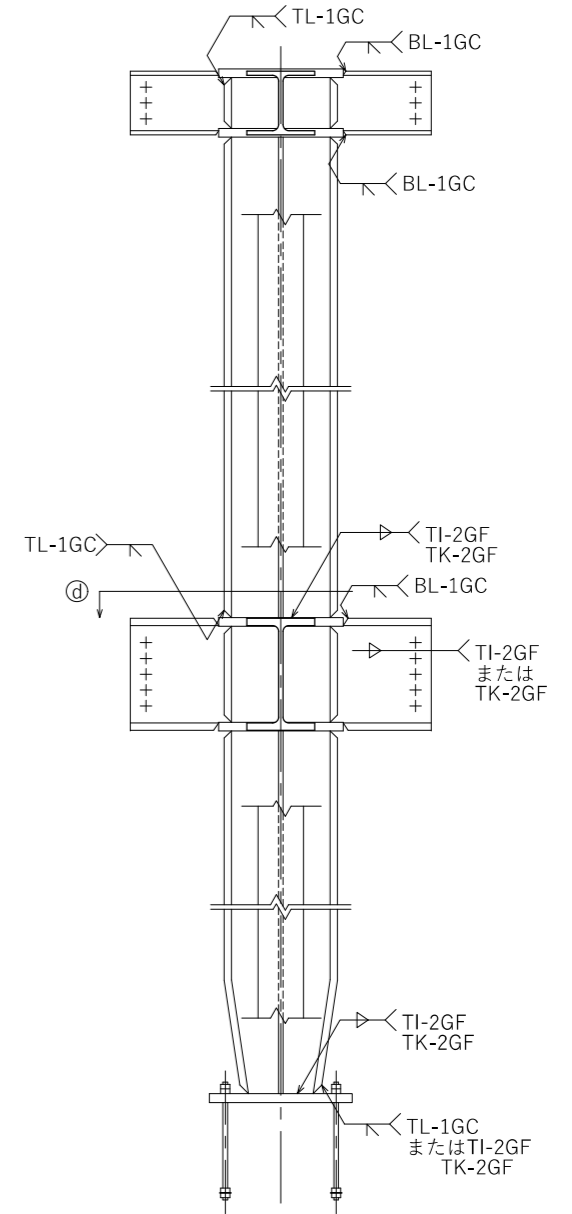
②断面

柱H-梁H(柱通しタイプ)



③断面

柱クロスH-梁H(梁通しタイプ)

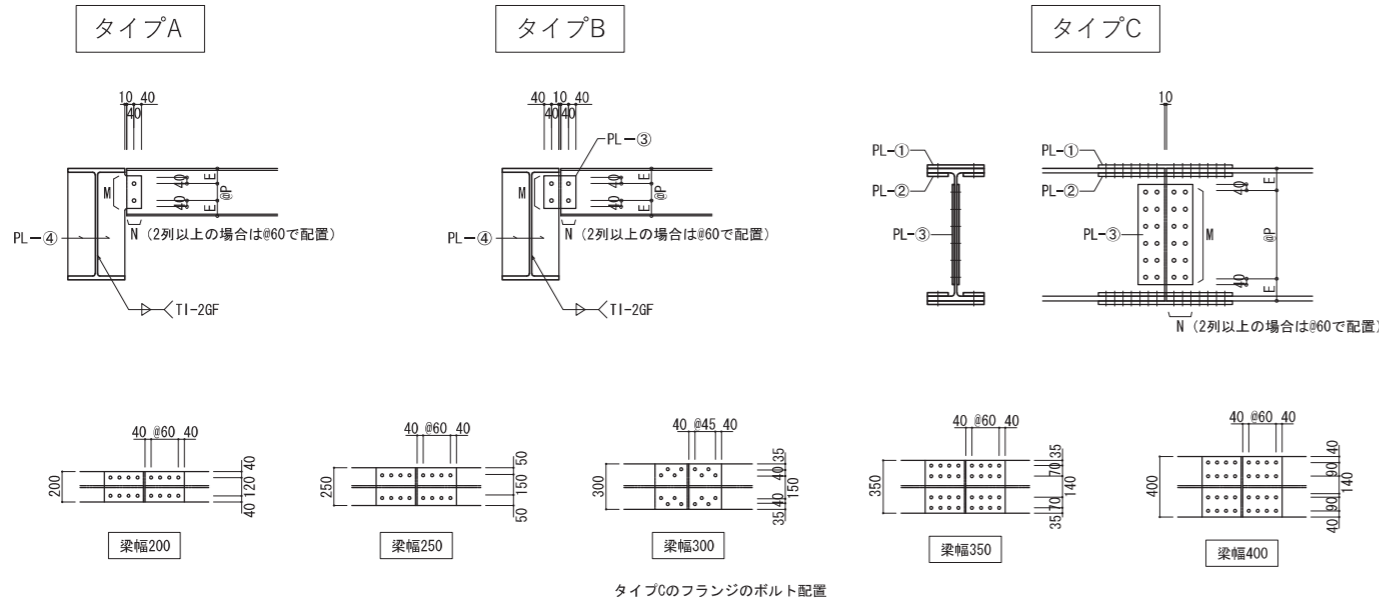


④断面

柱クロスH-梁H(通しダイヤタイプ)

鉄骨梁の継手基準

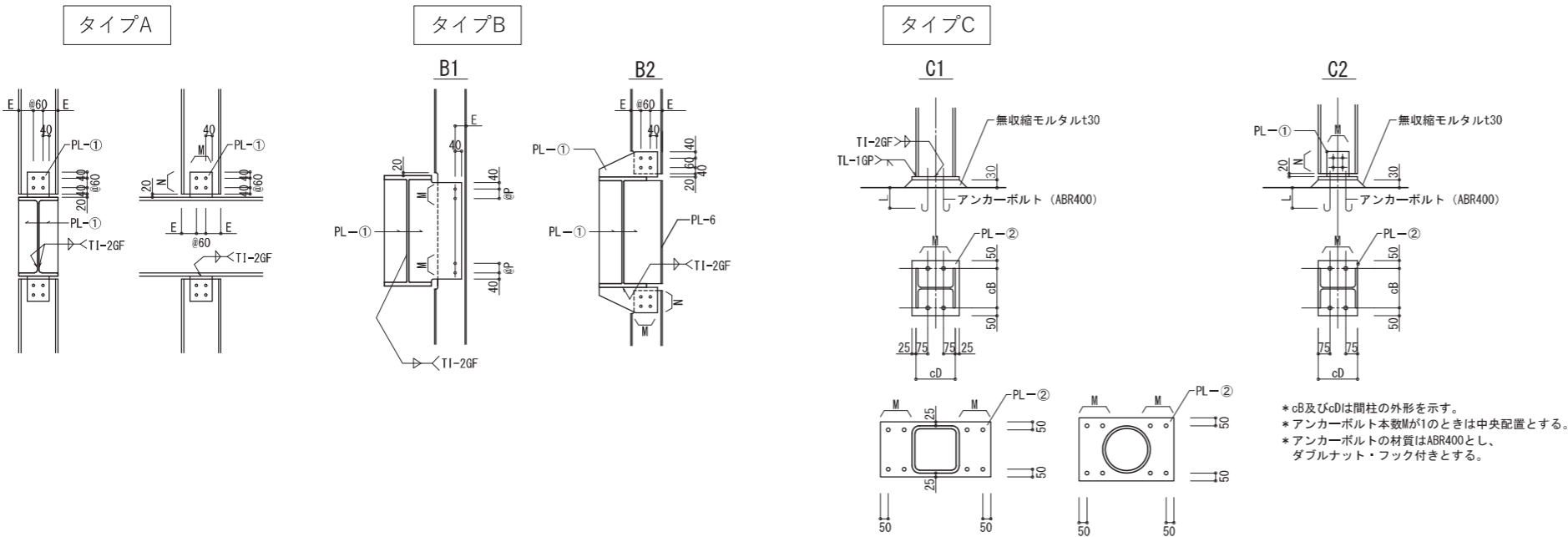
特記なき限り、下記による。  
 1.母材とガセットプレートとの接合ボルトは高力ボルト（トルシア型高力ボルトS10T）とする。当該部分が外気に接する場合は溶融亜鉛めっき高力ボルト（F8T）とする。  
 2.ガセットプレート及びスプライスプレートの鋼材材質は母材に同じとする。  
 3.継手表に示すボルト本数は、継手片側あたりの本数を示す。



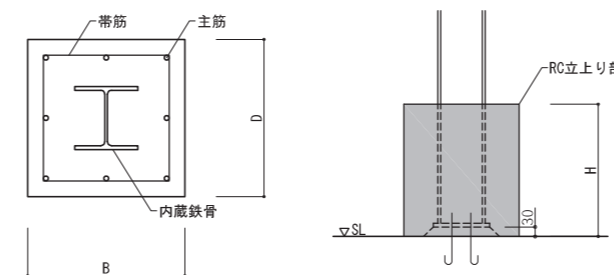
符号	部材断面	鋼材材質	タイプ	フランジ			ウェブ						備考	
				ボルト	PL-①	PL-②	ボルト	NxM	@P	E	PL-③	PL-④		
SB15a	H-150x75x5x7	SS400	A	—	—	—	2-M20	2	1	—	75	—	PL-6	
SB15c	H-150x150x7x10	SS400	A	—	—	—	2-M20	2	1	—	75	—	PL-6	
SB20a	H-200x100x5.5x8	SS400	A	—	—	—	2-M20	1	2	60	80	—	PL-6	
SB25a	H-250x125x6x9	SS400	A	—	—	—	2-M20	1	2	90	80	—	PL-6	
SB35c	H-350x350x12x19	SM490A	C	12-M22	2PL-12x350x410	2PL-12x140x410	6-M22	3	2	60	115	2PL-12x200x290	—	
SB40b	H-390x300x10x16	SS400	C	6-M22	2PL-12x300x350	2PL-12x110x350	3-M22	1	3	90	150	2PL-9x260x170	—	
SB50b	H-488x300x11x18	SS400	B・C	8-M22	2PL-12x300x440	2PL-12x110x440	5-M22	1	5	60	124	2PL-12x320x170	PL-16	タイプBの場合は、左記ウェブ部分を適用
SB60b	H-588x300x12x20	SS400	B・C	8-M22	2PL-12x300x440	2PL-12x110x440	7-M22	1	7	60	114	2PL-9x440x170	PL-12	タイプBの場合は、左記ウェブ部分を適用
TB1	H-294x200x8x12	SS400	B・C	6-M20	2PL-9x200x410	2PL-9x80x410	3-M20	1	3	60	87	2PL-9x200x170	PL-16	タイプBの場合は、左記ウェブ部分を適用
TB2	H-488x300x11x18	SS400	B・C	8-M22	2PL-12x300x440	2PL-12x110x440	5-M22	1	5	60	124	2PL-12x320x170	PL-16	タイプBの場合は、左記ウェブ部分を適用

間柱の接合要領

特記なき限り、下記による。  
 1.母材とガセットプレートとの接合ボルトは高力ボルト（トルシア型高力ボルトS10T）とする。当該部分が外気に接する場合は溶融亜鉛めっき高力ボルト（F8T）とする。  
 2.ガセットプレートの鋼材材質は母材に同じとする。  
 3.ベースプレートの鋼材材質は母材に同じとする。ただし、柱が鋼管の場合は以下とする。  
 鋼管柱の材質が400N級鋼材（BCR295含む）のとき：SS400 鋼管柱の材質が490N級鋼材のとき：SM490A



タイプD（柱脚部にRC立上りがある場合）



タイプA・Bの場合

符号	部材断面	鋼材材質	タイプ	ガセットプレート側					備考	
				ボルト	NxM	@P	E	PL-①		
SMC1	H-150x150x7x10	SS400	A	2-M20	2	1	—	75	PL-9	
SMC2	H-250x125x6x9	SS400	A	4-M20	2	2	60	95	PL-9	
SMC3	H-200x200x8x12	SS400	A	4-M20	2	2	90	80	PL-12	

タイプCの場合

符号	部材断面	鋼材材質	タイプ	ガセットプレート側					ベースプレート側				
				ボルト	NxM	@P	E	PL-①	アンカーボルト	L	M	PL-②	
SMC1	H-150x150x7x10	SS400	C2	2-M20	2	1	—	75	PL-9	2-M20	400	1	2PL-19x150x250
SMC2	H-250x125x6x9	SS400	C2	4-M20	2	2	60	95	PL-9	4-M20	400	2	2PL-19x250x225
SMC3	H-200x200x8x12	SS400	C1	鉄骨詳細図による									
SMC4	P-267.4x12.7	STKN490B	C1	—	—	—	—	—	—	4-M20	400	1	2PL-19x400x400
SMC5	P-216.3x12.7	STKN490B	C1	—	—	—	—	—	—	8-M24	480	2	2PL-22x420x320
SMC6	P-216.3x12.7	STKN400B	C1	—	—	—	—	—	—	4-M20	400	1	2PL-19x320x320

タイプDの場合

符号	部材断面	鋼材材質	RC立上り部				
			B	D	主筋	帯筋	RC立上り高さ H
SMC4	P-267.4x12.7	STKN490B	600	600	8-D19	□-D13@100	2階 バラット上端まで
SMC5	P-267.4x12.7	STKN490B	600	600	8-D19	□-D13@100	850
SMC6	P-267.4x12.7	STKN400B	600	600	8-D19	□-D13@100	850

\*内蔵鉄骨が角形鋼管や円形鋼管の場合も同様とする。  
 \*主筋は均等配置とする。  
 \*内蔵鉄骨が角形鋼管や円形鋼管の場合、充填コンクリートは不要とする。  
 \*内蔵鉄骨のベースプレート及びアンカーボルト等の仕様は、タイプCの要領による。

設計者  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録番号235197号 諏訪 泰輔  
 (株)長大 一級建築士登録番号361861 正田 崇貴  
 構造設計一級建築士登録番号10823号

工事名 やまと学園建設工事（建築工事）					No.
図名 鉄骨部材 各種接合要領図（1）					S- 39
設計 光市建設部建築住宅課				縮尺(A1) -	
級建築士登録第				縮尺(A3) -	
部長	課長	係長	製図	写図	号
					令和 8年 3月



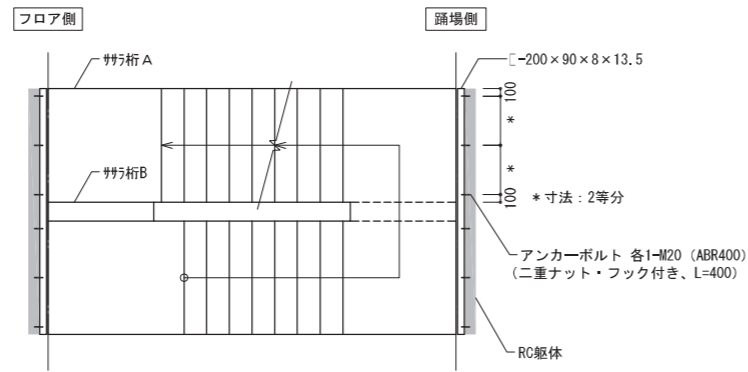
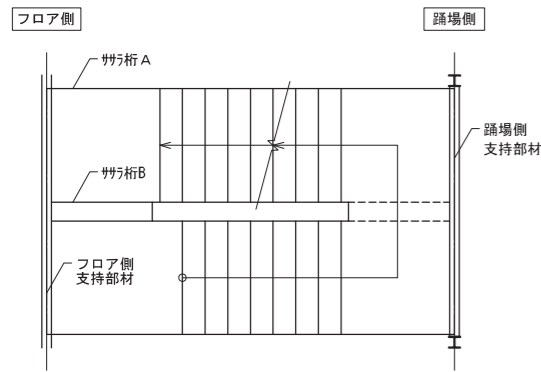
鉄骨階段 各種接合要領図 (折り返し階段の場合)

特記なき限り、下記による。

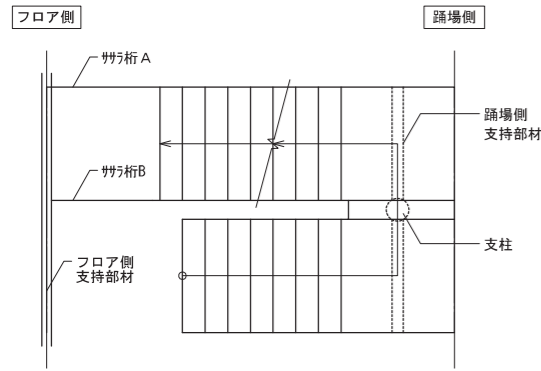
1. 階段の設計寸法は意匠図による。
2. ササラ桁の各支持部材の断面符号は伏図又は軸組図による。

3. 鋼材材質はSS400とする。
4. 直接外気に接する鉄骨は溶融亜鉛めっき処理とする。

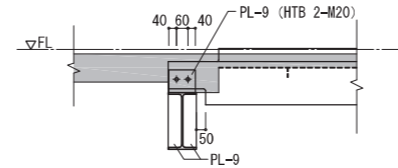
5. 本要領に記載のない階段については、意匠図又は鉄骨詳細図に示す。



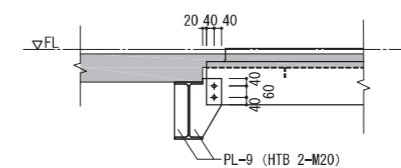
階段支持部材が鉄筋コンクリート造の場合 (タイプA3・B3)



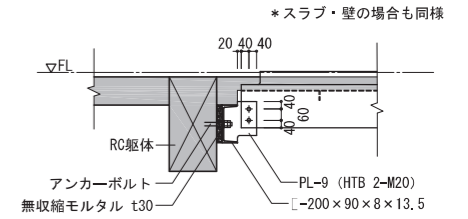
階段支持部材が鉄骨造の場合 (タイプA3・B3以外)



タイプ A1



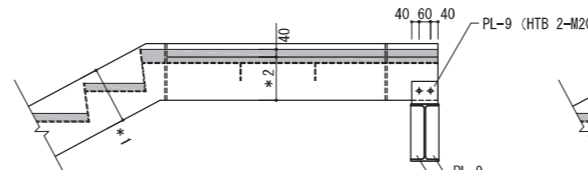
タイプ A2



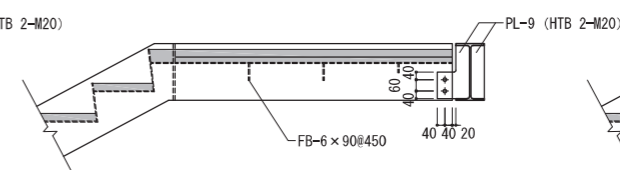
タイプ A3

\*スラブ・壁の場合も同様

フロア側接合部

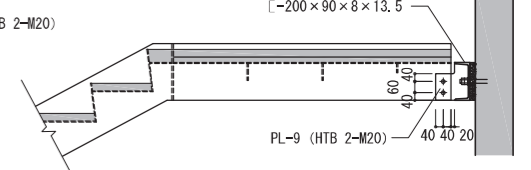


タイプ B1

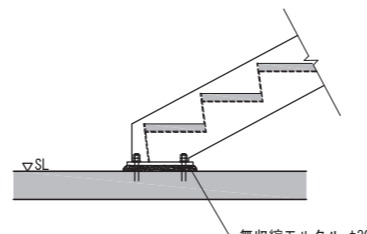


タイプ B2

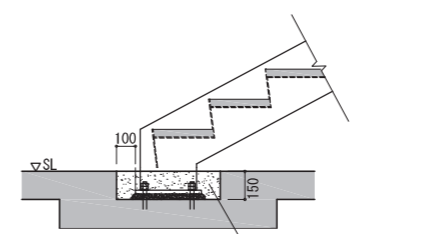
踊場側接合部



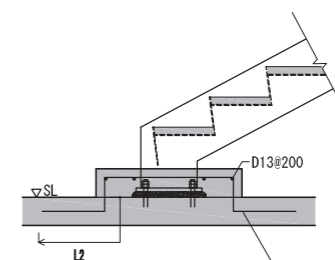
タイプ B3



タイプ C1

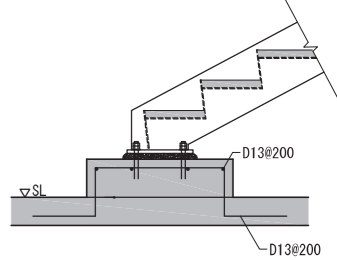


タイプ C2

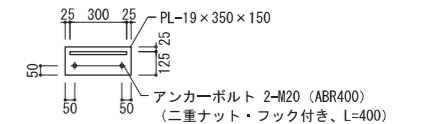


タイプ C3

最下層脚部接合部



タイプ C4



\*タイプC1~C4において共通とする。

ベースプレート詳細図

階段名称	支持部材の構造種別		ササラ桁 A 全断面	ササラ桁 B		段板	接合部タイプ			備考
	フロア側	踊場側		段床部	平場部		フロア側	踊場側	最下層脚部	
SK-1	RC	S	PL-16x300	PL-16x300	PL-16x230	PL-4, 5	タイプA3	タイプB1	タイプC2	

設計者  
 (株)異設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)異設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録番号235197号 諏訪 泰輔  
 (株)長大 一級建築士登録番号361861 正田 崇貴  
 構造設計一級建築士登録番号10823号

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)				No.
図名 鉄骨階段 各種接合要領図 (1)				S-41
設計 光市建設部建築住宅課 一級建築士登録第				縮尺(A1) - 縮尺(A3) -
部長	課長	係長	製図	写図
				令和 8年 3月

鉄骨階段 各種接合要領図 (直階段・L形階段の場合)

特記なき限り、下記による。

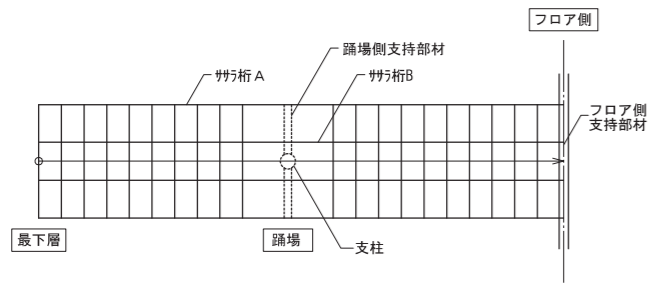
1. 階段の設計寸法は意匠図による。

2. ササラ桁の各支持部材の断面符号は伏図又は軸組図による。

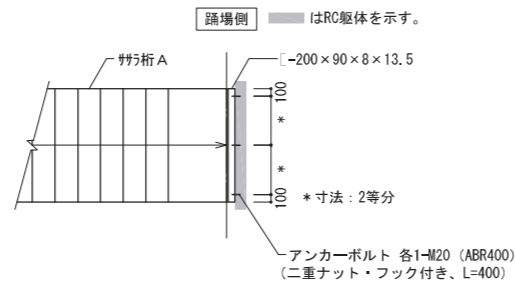
3. 鋼材材質はSS400とする。

4. 直接外気に接する鉄骨は溶融亜鉛めっき処理とする。

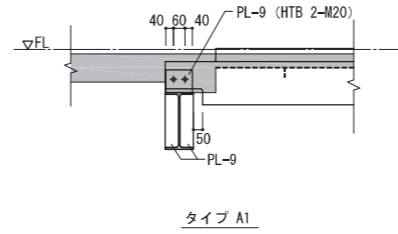
5. 本要領に記載のない階段については、意匠図又は鉄骨詳細図に示す。



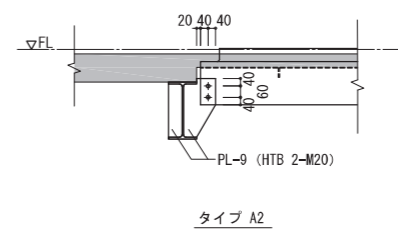
直階段の場合



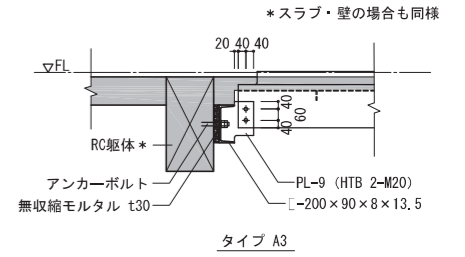
フロア側の階段支持部材が鉄筋コンクリート造の場合 (L形階段の場合も同様)



タイプ A1

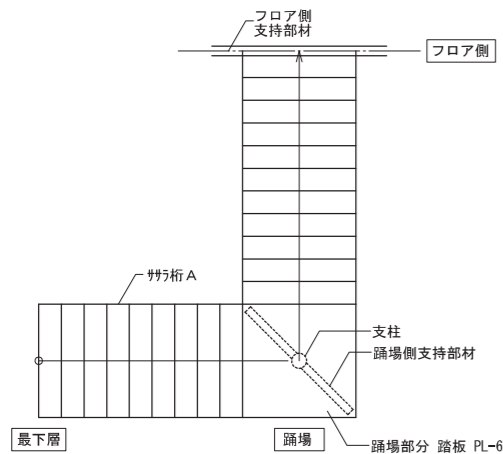


タイプ A2

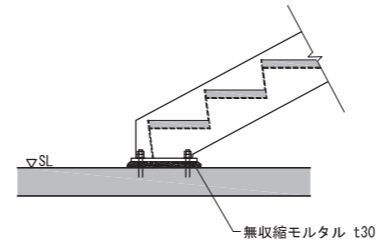


タイプ A3

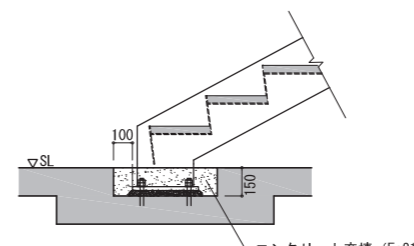
フロア側接合部



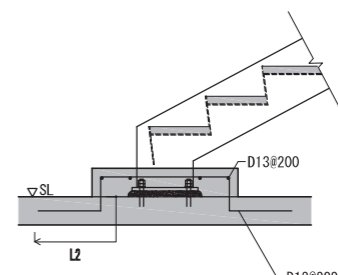
L形階段の場合



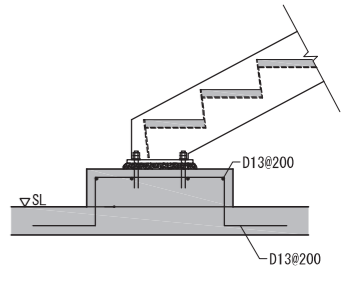
タイプ C1



タイプ C2

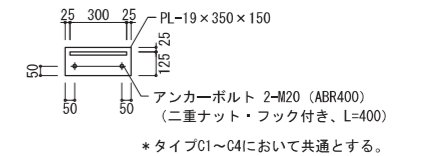


タイプ C3



タイプ C4

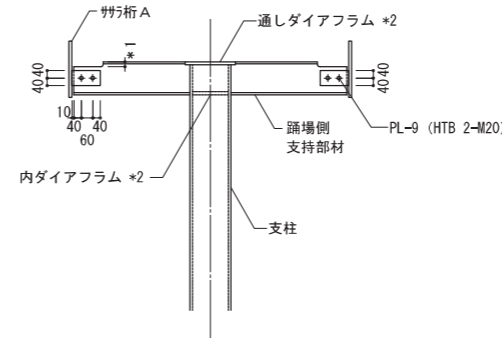
最下層脚部接合部



\*タイプC1~C4において共通とする。

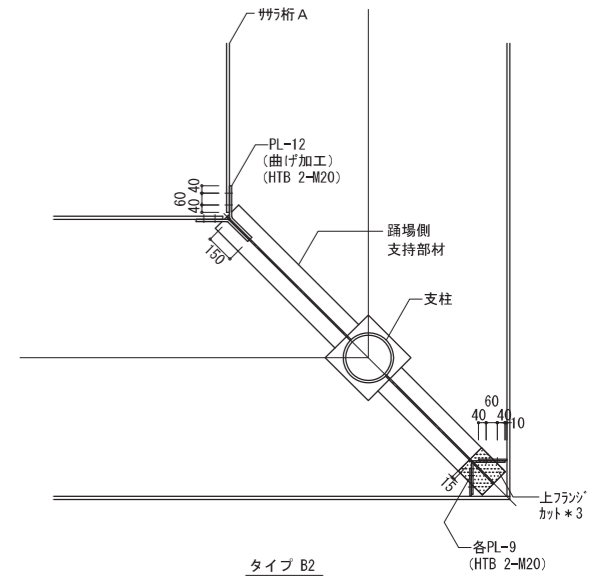
ベースプレート詳細図

階段名称	階段の種類	踊場側支持部材の有無	フロア側支持部材の構造種別	ササラ桁 A		ササラ桁 B		段板	接合部タイプ			備考
				全断面	段床部	平場部	フロア側		踊場側	最下層脚部		
SK-E1	L形階段	あり	RC	PL-16×300	PL-16×300	PL-16×230	PL-4.5	タイプA3	タイプB2	タイプC3		



タイプ B1

- \*1 梁フランジ厚の2.5倍以下とする (入隅部は10R加工とする)。
- \*2 各ダイヤフラムの板厚及び寸法は、溶接標準図による。
- \*3 上フランジカットの要領はタイプB1 (\*1)と同様とする。



タイプ B2

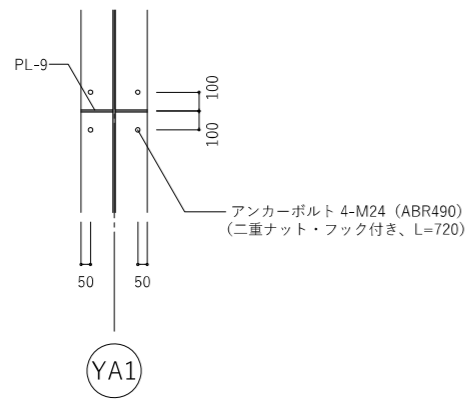
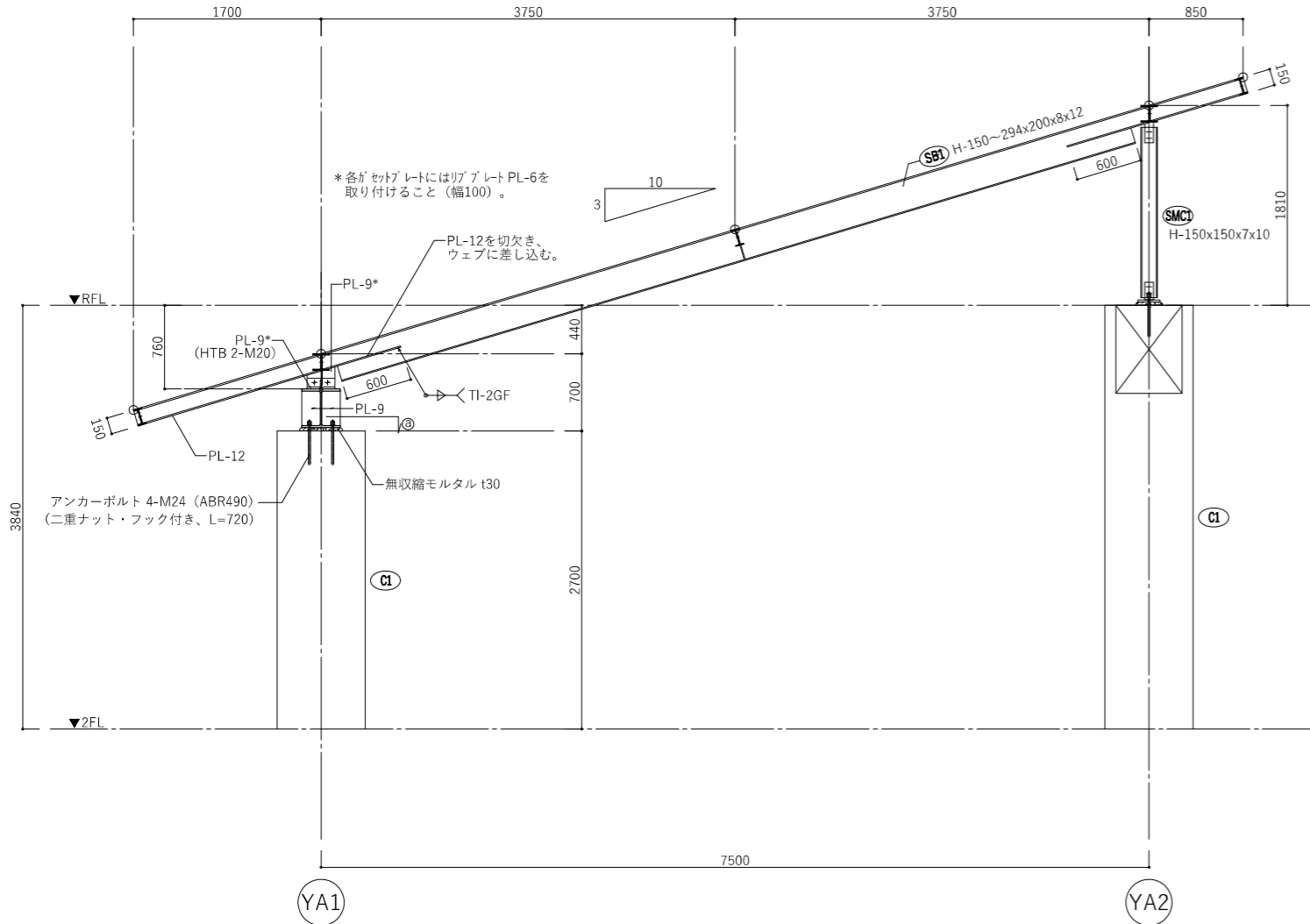
踊場側接合部

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)		No. S-42
図名 鉄骨階段 各種接合要領図 (2)		
設計	光市建設部建築住宅課 級建築士登録第	縮尺(A1) - 縮尺(A3) -
部長	課長	係長
製図	写図	令和 8年 3月

設計者	小澤 透
(株)異設計コンサルタント 一級建築士登録321729号	福田 豊和
(株)異設計コンサルタント 一級建築士登録293856号	諏訪 泰輔
(株)長大 一級建築士登録番号235197号	正田 崇貴
(株)長大 一級建築士登録番号361861	
構造設計一級建築士登録番号10823号	

一般架構部詳細図

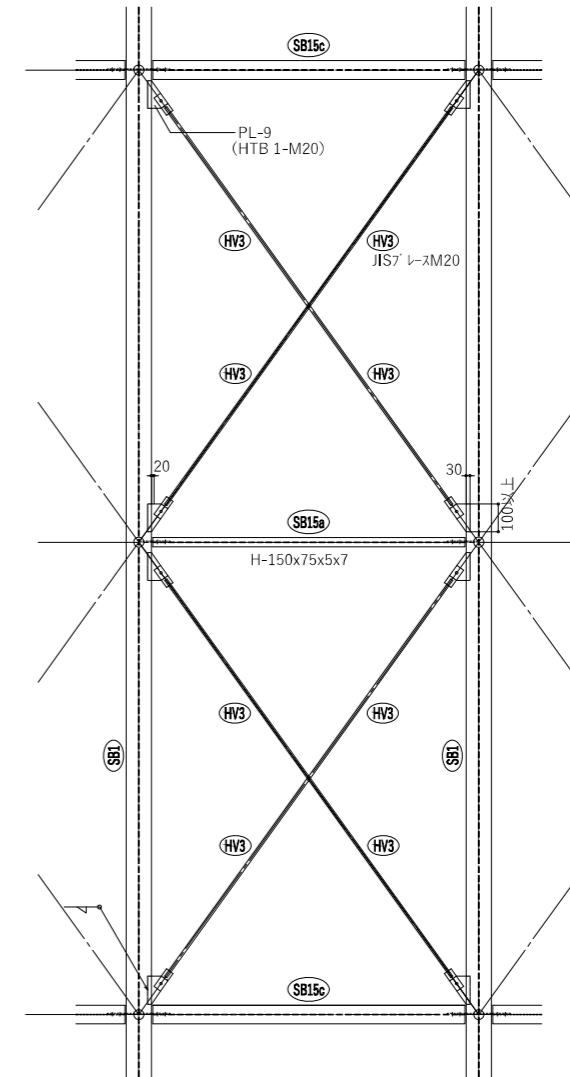
- 特記なき限り、下記による。  
 1.鋼材材質はSS400とする。  
 2.屋外に面する部分の鉄骨及びボルトについては溶融亜鉛めっき処理とする。  
 3.本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。  
 4.YA8～YA9間りの架構面も同様とする。



① 視 (A1:1/20)

屋根面ブレース詳細図

- 特記なき限り、下記による。  
 1.鋼材材質はSS400とする。  
 2.ブレースの狙い点（○印）は梁材-梁材の交点とする。  
 3.本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。

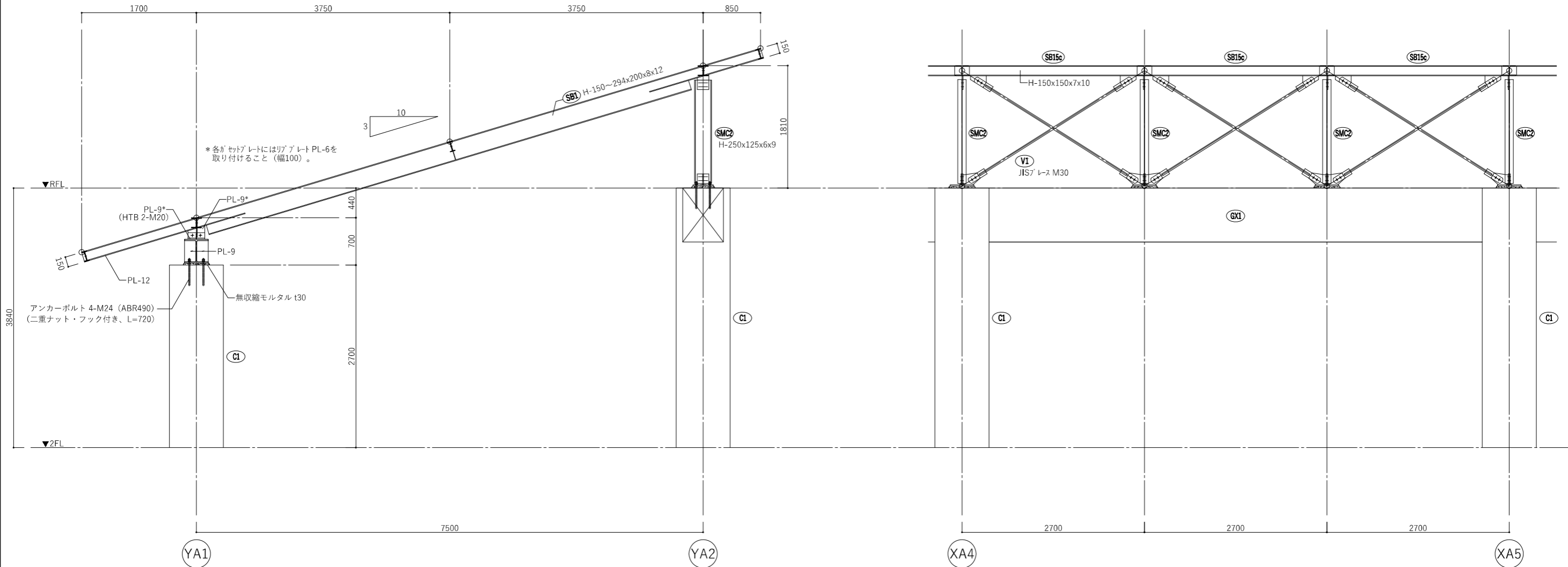


設計者  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録番号235197号 諏訪 泰輔  
 (株)長大 一級建築士登録番号361861 正田 崇貴

工事名 やまと学園建設工事（建築工事）					No.
図名 鉄骨詳細図（1）					S-43
設計 光市建設部建築住宅課					縮尺(A1)1/30
級建築士登録第					縮尺(A3)1/60
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

東西方向 鉛直ブレース設置架構（YA2）詳細図

- 特記なき限り、下記による。  
 1.鋼材材質はSS400とする。  
 2.屋外に面する部分の鉄骨及びボルトについては溶融亜鉛めっき処理とする。  
 3.本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。  
 4.YA8～YA9間東西方向鉛直ブレース設置架構面（YAA8通り）も同様とする。



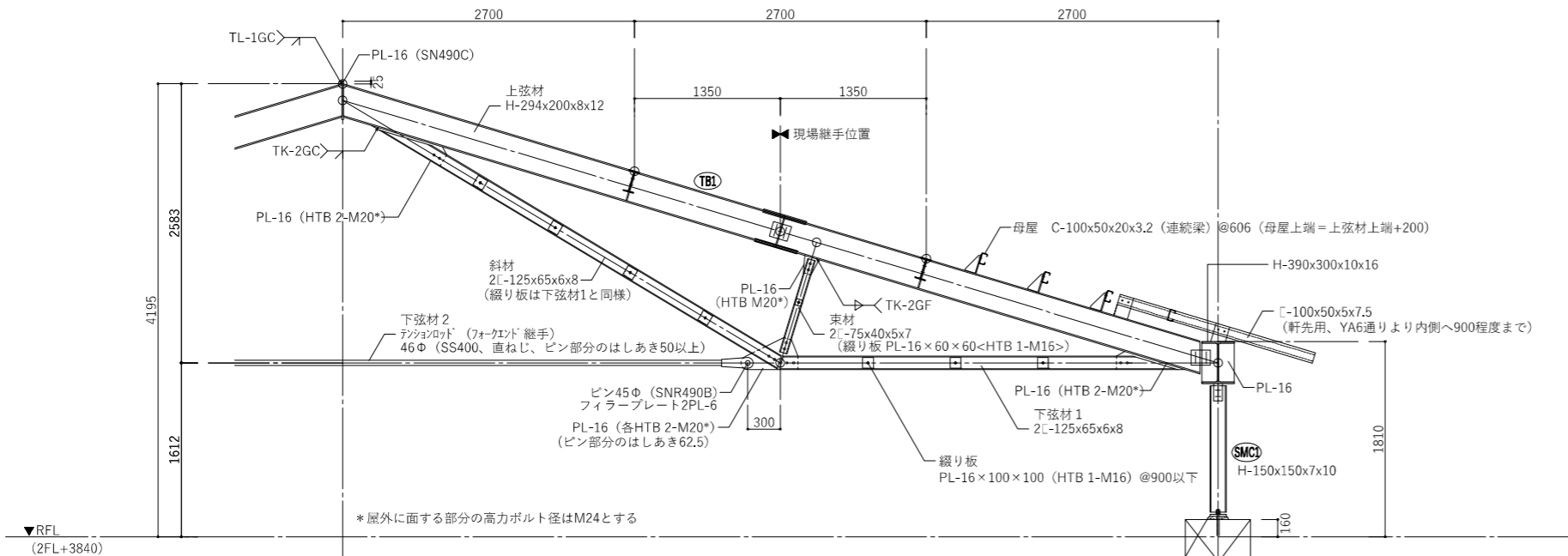
設計者  
 (株)異設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)異設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録番号235197号 諏訪 泰輔  
 (株)長大 一級建築士登録番号361861 正田 崇貴

構造設計一級建築士登録番号10823号

工事名 やまと学園建設工事（建築工事）					No. S-44
図名 鉄骨詳細図（2）					縮尺(A1)1/30 縮尺(A3)1/60
設計 光市建設部建築住宅課 一級建築士登録第					
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

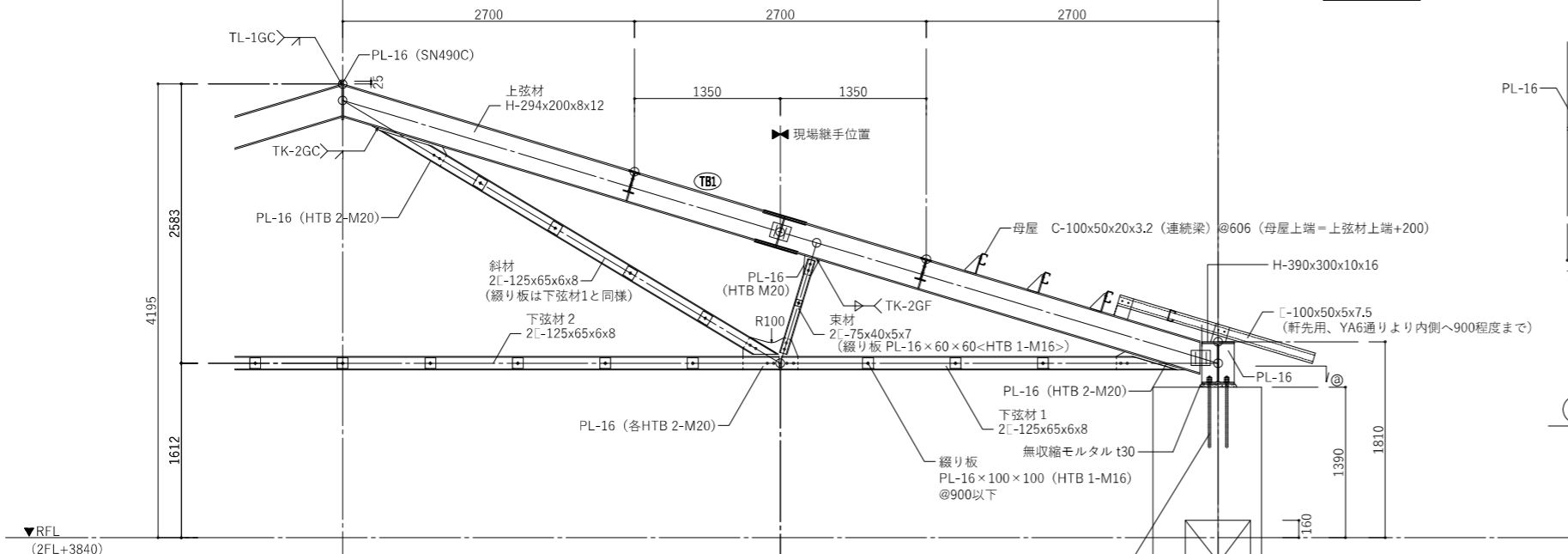
張弦梁TB1架構詳細図

- 特記なき限り、下記による。  
 1. 鋼材材質はSS400とする。  
 2. 屋外に面する部分の鉄骨及びボルトについては溶融亜鉛めっき処理とする。  
 3. 本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。  
 4. 下弦材1及び斜材端部のガセットプレートのはしあきは50mm、ボルトピッチは60mmとする。  
 5. 東材端部のガセットプレートのはしあきは40mm、ボルトピッチは60mmとする。



\*屋外に面する部分の高力ボルト径はM24とする

一般部



アンカーボルト 4-M24 (ABR490)  
 (二重ナット・フック付き、L=720)

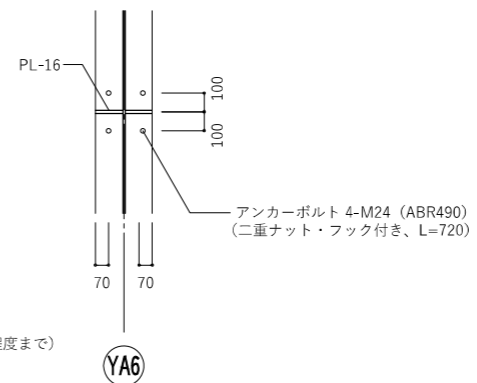
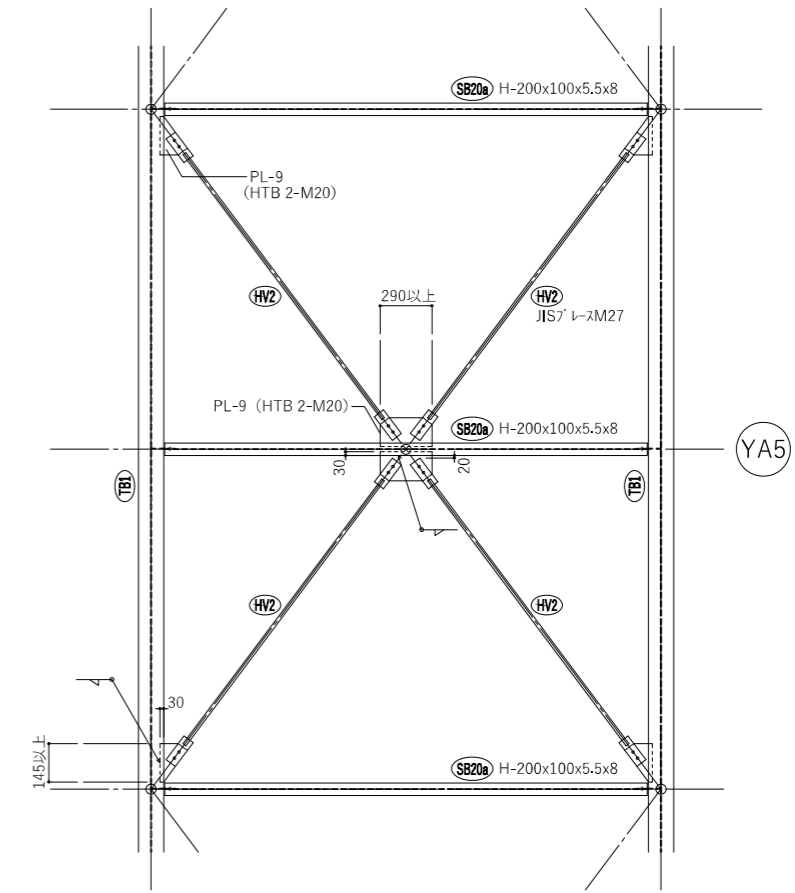
RC柱C2取合い部 (XA3・XA4・XA7通り)

設計者  
 (株)異設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)異設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録番号235197号 諏訪 泰輔  
 (株)長大 一級建築士登録番号361861 正田 崇貴

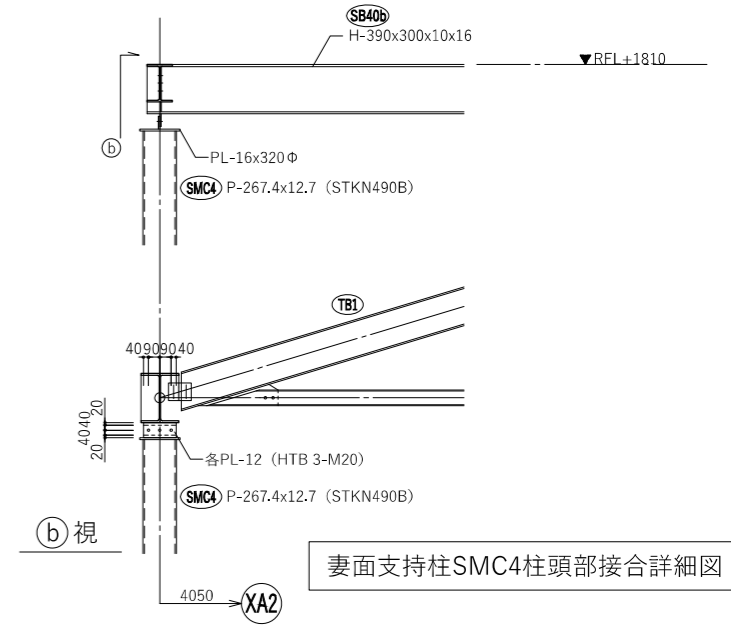
構造設計一級建築士登録番号10823号

屋根面ブレース詳細図

- 特記なき限り、下記による。  
 1. 鋼材材質はSS400とする。  
 2. ブレースの狙い点 (○印) は梁材-梁材の交点とする。  
 3. 本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。



(a) 視 (A1:1/20)

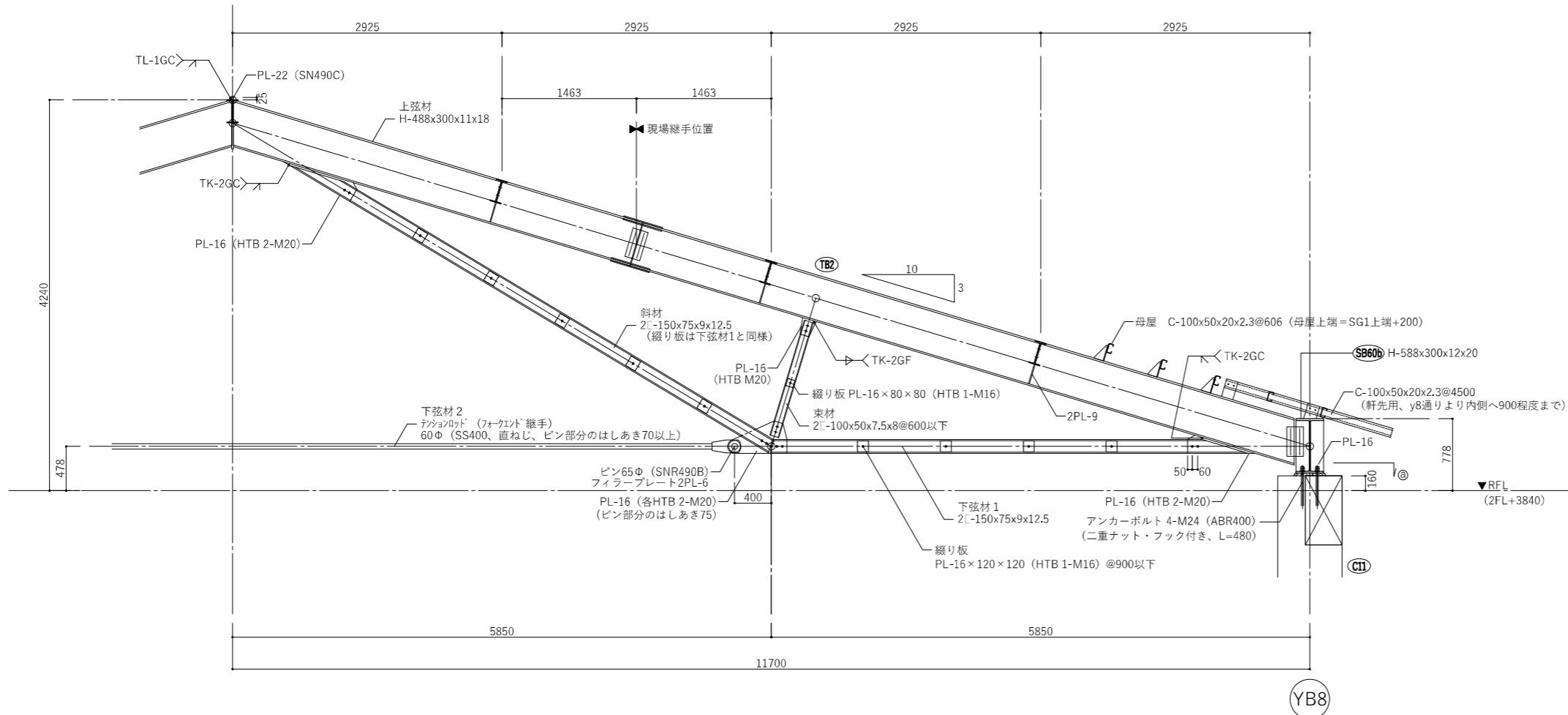


妻面支持柱SMC4柱頭部接合詳細図

工事名 やまと学園建設工事 (建築工事)					No. S-45
図名 鉄骨詳細図 (3)					縮尺(A1)1/30
設計 光市建設部建築住宅課					縮尺(A3)1/60
級建築士登録第					号
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

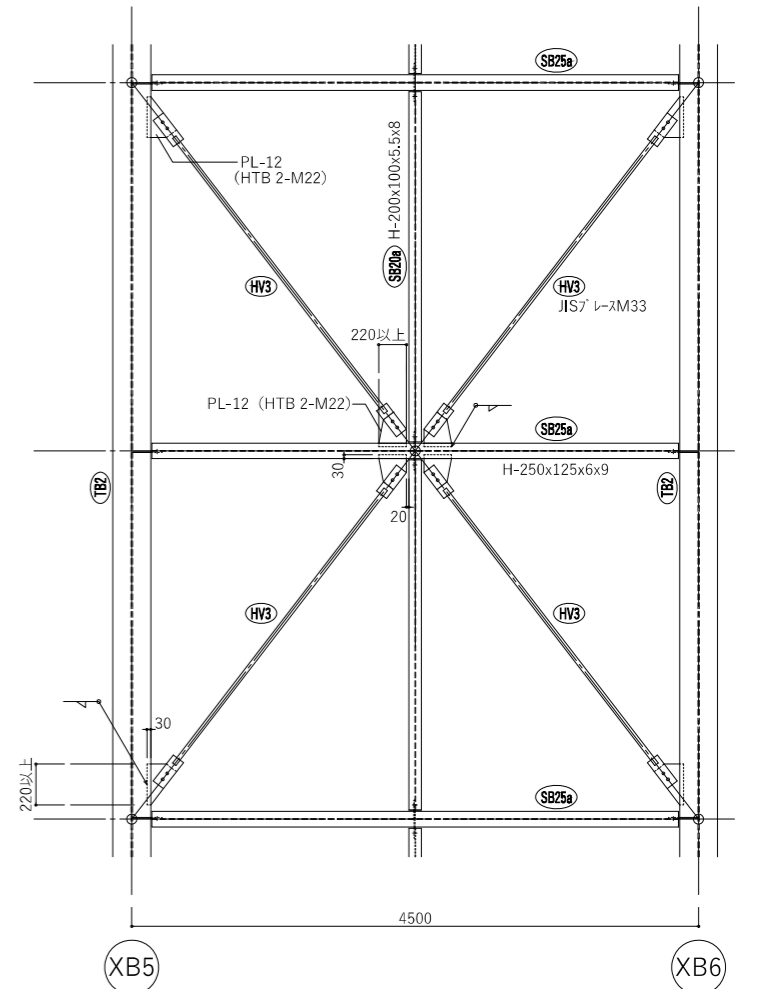
張弦梁TB2架構詳細図

- 特記なき限り、下記による。  
 1. 鋼材材質はSS400とする。  
 2. 屋外に面する部分の鉄骨及びボルトについては溶融亜鉛めっき処理とする。  
 3. 本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。  
 4. 下弦材1及び斜材端部のガセットプレートのはしあきは50mm、ボルトピッチは60mmとする。  
 5. 東材端部のガセットプレートのはしあきは40mm、ボルトピッチは60mmとする。



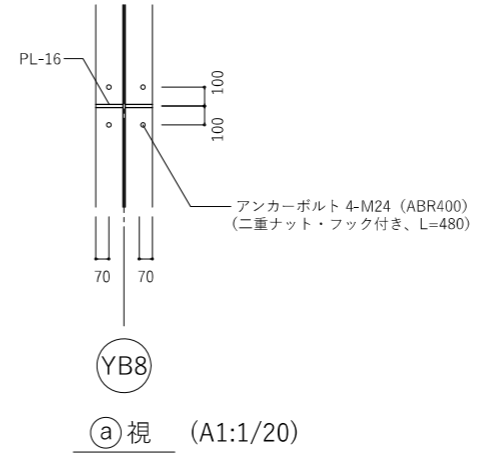
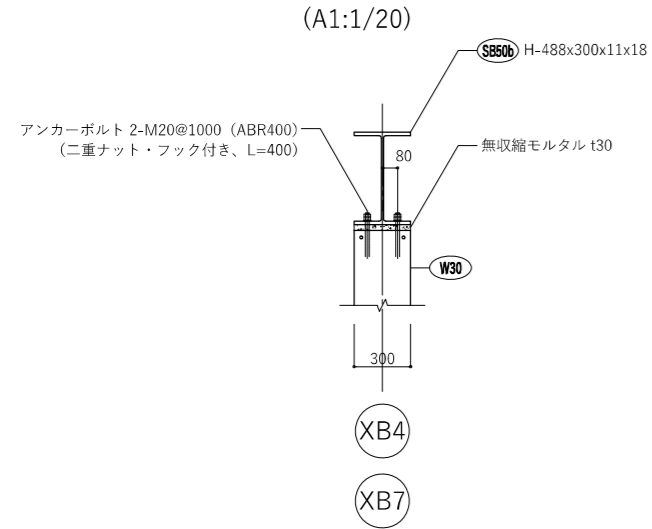
屋根面ブレース詳細図

- 特記なき限り、下記による。  
 1. 鋼材材質はSS400とする。  
 2. ブレースの狙い点（○印）は梁材-梁材の交点とする。  
 3. 本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。



SB50b-RC壁W30接合詳細図

- 特記なき限り、下記による。  
 1. 鋼材材質はSS400とする。

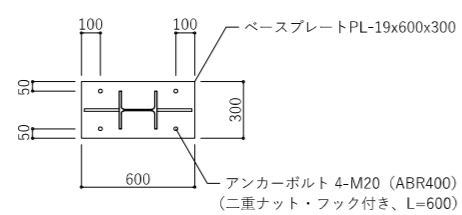
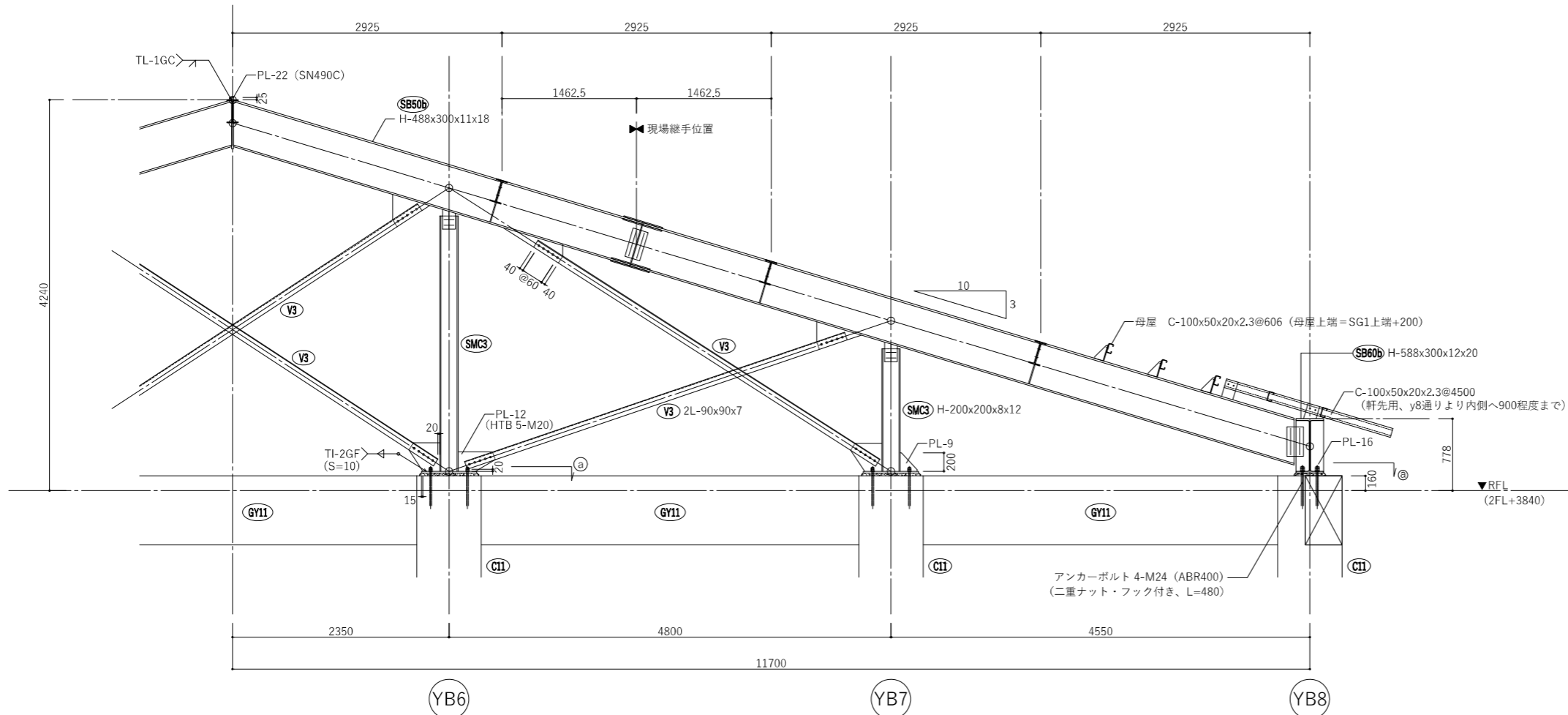


設計者  
 (株)異設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)異設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録番号235197号 諏訪 泰輔  
 (株)長大 一級建築士登録番号361861 正田 崇貴  
 構造設計一級建築士登録番号10823号

工事名 やまと学園建設工事（建築工事）					No. S-46
図名 鉄骨詳細図（4）					
設計 光市建設部建築住宅課 一級建築士登録第					縮尺(A1)1/30 縮尺(A3)1/60
部長	課長	係長	製図	写図	令和 8年 3月

XB2・XB9通り架構詳細図

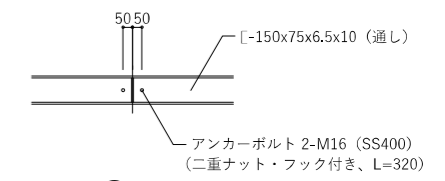
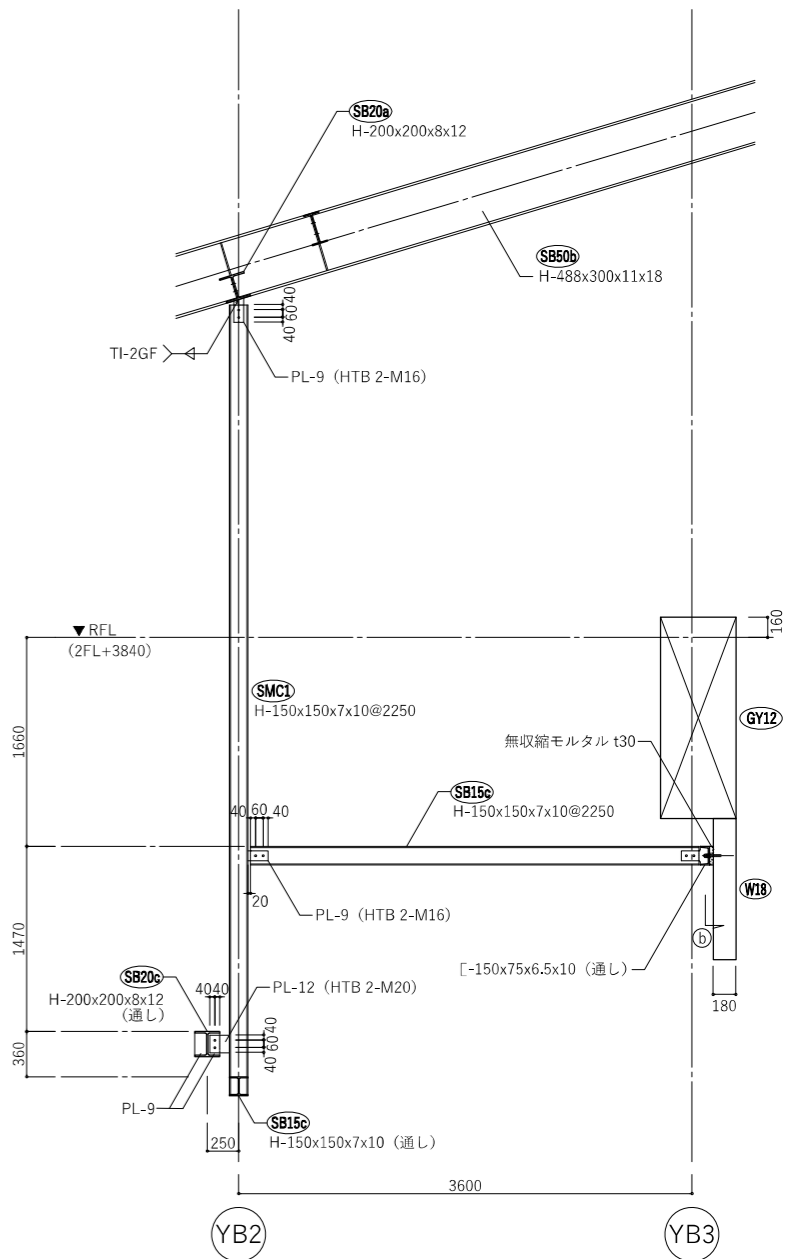
- 特記なき限り、下記による。  
 1.鋼材材質はSS400とする。  
 2.屋外に面する部分の鉄骨及びボルトについては溶融亜鉛めっき処理とする。  
 3.本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。  
 4.下弦材1端部のガセットプレートのはしあきは50mm、ボルトピッチは60mmとする。  
 5.東材端部のガセットプレートのはしあきは40mm、ボルトピッチは60mmとする。



(a) 視 (A1:1/20)

ぶどう棚・SLW受け詳細図

- 特記なき限り、下記による。  
 1.鋼材材質はSS400とする。  
 2.本詳細図に記載のない接合要領は、鉄骨部材 各種接合要領図による。



(b) 視 (A1:1/20)

設計者  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録321729号 小澤 透  
 (株)設計コンサルタント 一級建築士登録293856号 福田 豊和  
 (株)長大 一級建築士登録番号235197号 諏訪 泰輔  
 (株)長大 一級建築士登録番号361861 正田 崇貴

構造設計一級建築士登録番号10823号

工事名 やまと学園建設工事（建築工事）		No. S-47
図名 鉄骨詳細図（5）		
設計	光市建設部建築住宅課 一級建築士登録第	縮尺(A1)1/30 縮尺(A3)1/60
部長	課長	係長
製図	写図	
令和 8年 3月		